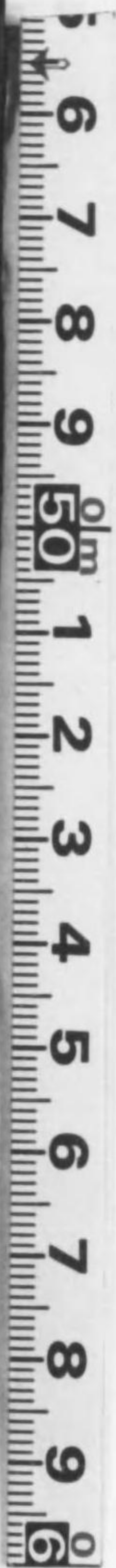


續國譯漢文大成

文學部 七十八

309
65

鉄
本



始



續國譯漢文大成

文學部第七十八册 (第二十帙の二)

高青邱詩集二の二

吉田待郎氏 寄贈本



高青邱集卷六

五言古詩

賦得眞娘墓送蟾上人之虎丘

眞娘の墓を賦し得て、蟾上人の虎丘に之くを送る

色相終壞滅。佳人能久妍。色相、終に壞滅、佳人、能く久しく妍ならむや。

斷碑山寺裏。小冢竹林邊。斷碑、山寺の裏、小冢、竹林の邊。

蘭葉春風帶。苔花暮雨鈿。蘭葉、春風の帶、苔花、暮雨の鈿。

情留吳苑客。夢逐楚臺仙。情は吳苑の客を留め、夢は楚臺の仙を逐ふ。

物外全眞念。人間斷俗緣。物外、眞念を全うし、人間、俗緣を斷つ。

高僧方宴坐。身在散花天。高僧、方に宴坐、身は散花の天に在り。

【字解】【一】色相、この世界に見るところの現象、文天祥の詩に爲問西來宗旨道。世間色相是空麼とある。【二】蘭葉春風帶、蘭の葉は春風に伸び廣がつて帶の標であるといふ義。

【三】暮雨鈿、鈿は釵。【四】吳苑客、むかしの吳宮の苑内を游行する人、即

五言古詩 賦得眞娘墓送蟾上人之虎丘

ち蘇州城内の潜人。【五】楚靈仙、陽臺の神女、前にも屢ば引いて置いたが、宋玉の高唐賦の序に「むかし、先王、かつて高唐に游び、怠つて寢殿の、夢に一婦人を見る、曰く、妾は巫山の女なり、高唐の客となる、君が高唐に遊ぶを聞く、願はくは、枕席を薦めむ、と。王、因つて之を幸す」とあり、一統志に「巫山縣に陽臺あり、南、大江に枕む、宋玉の賦、陽臺の下とは即ち此」とある。

【六】散花天、維摩詰經に「天女、天花を以て諸菩薩に散す、即ち皆墮落す。大弟子に至つては、便ち著いて墮ちず。天女曰く、結習、未だ盡さず、故に、花、身に著く。結習盡くるものは、花、身に著かず」とあり、又設齋歎佛文に龍王獻水、噴車馬之埃塵、天女散花、觀山林之草樹」とある。

【題義】唐の李紳の眞娘墓と題せる詩の序「眞娘は吳の妓人、歌舞名あるもの、死して武邱寺前に葬る、吳中の少年、その志に従ふなり。墓に花草多く、以て其上を蔽ふ」とある。武邱は即ち虎丘、唐人は其朝の先祖光皇帝の諱を避けて、いつでも、かくの如く書いて居る。眞娘の生存して居た時代は、分からぬが、いづれ、六朝の末であらう。そして、その墓は、今日なほ存して、虎丘の一名勝と成つて居る。蟪上人は、虎丘志に「蟪記室、高啓・徐賁と詩友たり、姚少師廣孝の謂はゆる問道蟪公似之。贊公、一瓶鉢寄山中の者なり」とあつて、當時知名の高僧と見えるが、その閱歴の詳しいことは分からぬ。この詩は、蟪上人が虎丘に之くに就いて、山中の古蹟、眞娘の墓を擇んで、これを賦し、中に送別の意を寓したのである。

【詩意】この世界に見るところの萬種の現象は、いづれ、終には破壊絶滅するもので、嬋娟たる佳人と雖も、決して、長しへに、その容姿の美を持続することは出来ない。現に、眞娘の如きも、死して虎丘の麓に葬り、斷碑は山寺の裏に側ち、小さな墓は竹林の邊に残つて居る。その碑家を繞つては、花草頗る多く、蘭の葉は、春風に伸び廣がつて帯の如く、苔の花は暮雨を帯びて、叙の如く見える。これは、處がら、思ひ做しの結果であらう。かくて纏綿の情思は、蘇州城中の游人をして、自然、去るに忍びざらしめ、泉下の夢は、なほ陽臺の神女を逐ひ、千歳の下、その魂魄、なほ生くるが如くである。蟪上人は、當代の名僧であつて、物外に在つて眞念を全うし、人間に向つて俗縁を斷つた御方であるから、その眞娘の墓に近き僧寺に來ても、心のどかに行ひ澄まし、宛ら散花の天の下に在つても、花片が身に著かず、結習全く盡きはてて大悟せられること、疑なく、まことに、有り難く且つ尊く覺える。

【餘論】初の八句は、眞娘の墓を詠じ、次の四句は、蟪上人が其地に至るも、宴坐して、毫も心を動かさぬことを言ひ、仍つて其高德を賛し、且つ題義を全うしたのである。

友竹軒

友竹軒

世人務結託。車馬紛交馳。
言笑雖強歡。衷懷詎相知。

世人、結託を務め、車馬、紛として交も馳す。
言笑、強ひて歡ふと雖も、衷懷、詎ぞ相知らむ。

中林有君子。淡然夙與期。

中林に君子あり、淡然として夙に與に期す。

虛心兩無阻。榮悴焉可移。

虛心、兩つながら阻つるなく、榮悴、焉んぞ移すべけむ。

朝尋披煙徑。暮對寒風帷。

朝に尋ねて煙徑を披き、暮に對して風帷を褰ぐ。

非此君爲偶。誰共歲晏時。

此君が偶を爲すに非ずんば、誰か歲晏の時を共にせむ。

【字解】【一】結託。交を結んで互に深く信頼する。【二】言笑。談笑に同じ。【三】衷。衷心、心の奥底。【四】中林。林中に同じ。【五】無阻。隔てることがない。【六】榮悴。榮華と憔悴、即ち盛衰榮枯に同じ。【七】此君。竹を指す、晉書王徽之傳に「かつて、空宅中に寄居す、便ち竹を種ふしむ。人、その故を問ふ。但だ嘯詠して竹を指して曰く、何ぞ一日も此君なかるべけむや」とある。【八】歲晏時。歲暮の時に同じ、即ち窮冬。

【題義】姑蘇志に「友竹軒は、吳江の半澤村に在り、元末、金玉局副使崔天徳の居るところ、周伯溫、扁を書し、高啓、記を作る」とある。但し、青邱の作つた記文は、堯齋集に載せてないから、その後、散佚したのであらう。この詩は、同時に、友竹軒に寄題したものである。

【詩意】世人は、交を結んで深く結託せむことを務め、車馬を以て互に往來し、紛然として馳せ違ふ有様である。しかし、談笑の間、無理に機嫌の善い様な顔をして親み睦むとも、いづれ利己主義同士であるから、心の奥底は、到底測り知ることが出来ない。崔君の家に近き林中には、君子に比すべき竹があつて、崔君は、淡然として、夙に之と幽期を訂し、互に虚心にして、いささかの隔てだにあらさず、

榮枯盛衰の爲に、その交情を移すことはない。朝には、林中に竹を尋ねて、煙低く立ちこめたる細徑を披き、暮には、堂上に在つて竹と相對し、涼風の吹き入る紗帷を掲げて居られる。苟くも此君が友たるに非ざれば、百卉盡く凋落する窮冬の時に當つて、誰と共に在るべきか、崔君は、流石に善く其友を擇び得たものである。

【餘論】起四句は、世俗の輕薄を言ひ、輕輕筆を轉じて、中林有君子の四句は、軒の名にしおふ友竹に及び、朝尋披煙徑の四句は、朝暮寒暑に互つて、更に之を細説し、敘し得て全く遺憾なきを覺える。

遷婁江寓館

婁江の寓館に遷る

寓形百年内。行止固無端。

形を寓す百年の内、行止、もとより端なし。

我生甫三九。東西宜未闌。

我生まれて甫めて三九、東西宜しく未だ闌ならざるべし。

去年宅山陲。今年徙江干。

去年、山陲に宅し、今年、江干に徙る。

野性崇儉陋。經營唯苟完。

野性、儉陋を崇び、經營、唯だ苟くも完うす。

閒窓俯平疇。幽屏臨遠湍。

閒窓、平時に俯し、幽屏、遠湍に臨む。

豈忘大厦居。弗稱非所安。豈に大厦に居ることを忘れむや、稱はざるは安んずる所。
 披榛始來茲。霜露凄以寒。榛を披いて始めて茲に來り、霜露凄以て寒し。「に非ず。
 誰云遠親愛。弟子相與歡。誰か云ふ、親愛に遠ざかると、弟子相與に歡ぶ。
 室中有名酒。歲暮聊盤桓。室中に名酒あり、歲暮聊か盤桓。

【字解】 〔一〕寓形、この形骸を寄せる。〔二〕百年、人壽の限りを云ふ。〔三〕行止、出處進退に同じ。〔四〕無端、すべて端緒なく、全く偶然なること。〔五〕甫三九、二十七歳。〔六〕宜未聞、まだ十分に知らぬ。〔七〕宅山園、青邱に寓せしことを云ふ。〔八〕江干、婁江の邊。〔九〕野性、粗野の天性。〔一〇〕儉陋、浪費を禁じて、朴陋に甘んずる。〔一一〕經營、居宅の造築。〔一二〕平疇、平かなる田の面。〔一三〕遠澗、遠くに見ゆる早瀬。〔一四〕大厦、大きな家室。〔一五〕弗稱、かなはぬ、身分に釣り合はぬ。〔一六〕披榛、榛荆を切り開く。〔一七〕遠親愛、平生交遊の人と疎遠になる。〔一八〕盤桓、陶潛の歸去來辭に攜三孤松一面盤桓とあつて、のん氣に構へる。

【題義】 吳地記に「松江、東北に行くこと七十里、三江口を得、東北して海に入るを婁江となし、東南して海に入るを東江となし、松江を并せて三江となす」とある。年譜にも見ゆる通り、作者は、至正二十二年壬寅、二十七歳の時、青邱より移つて婁江に寓居し、婁江吟藁を作つたので、何月であつたかは、一寸分からのぬが、霜露凄以寒の句で見ると、いづれ、秋冬の際であつたらう。この詩は、婁江の寓館に遷る時に作つたのである。

【詩意】 人は、形骸を百年の壽命の内に寄せ、その出處進退、すべて偶然である。われ生まれて、はじめて二十七歳、東西に遷徙することは、まだ止まない。現に去年は青邱の山邊に居たが、今年は婁江の汀上に徙ることに成つた。もとより、粗野の天性、萬事約やかして、朴陋なることに甘んじ、寓館の築造なども、大體形を成して居るだけである。しかし、閒窓は、平曠なる田疇に俯し、幽扉は、遠くを走る早瀬を見下ろし、その景色は、なかなか面白い。決して、大厦に住むことを忘れはしないが、身分に釣り合はねば、心を安んずることが出来ない。滿地の荆榛を切り開いて、はじめて、ここに卜居した次第で、今しも、秋冬の際、霜露は凄然として寒い。こんな片田舎に來ると、平生親愛せし人と、自然疎遠になるだらうと云ふ人もあるが、決して、そんな譯でもなく、弟子どもは、毎に尋ねて來て、相共に歡娛をなして居る、加之、室中には、名酒を貯へてあるから、歲暮の互寒に敵して、悠悠と、のん氣に構へて居ることが出来る。

【餘論】 起四句は、この生、遷徙なほ未だ止まざるを云ひ、去年宅山園の四句は、今次、婁江の寓館に遷ることを述べ、閒窓俯平疇の四句は、寓館の狀況、披榛始來茲の六句は、遠僻の境なれども、幸に此に安んずることが出来るといつて、深く自ら慰めたのである。

雪夜懷周著作

雪夜、周著作を懷ふ

燈照竹林雪、寢齋寒更空。

燈は照らす竹林の雪、寢齋、寒更に空し。

窓間成獨坐、遙想故人同。

窓間、獨坐を成す、遙に想ふ故人の同じきを。

不有孤吟興、寧度此宵中。

孤吟の興あらずんば、むしろ、この宵中を度らひや。

【字解】【一】 寢齋 寢室。【二】 宵中 中宵に同じ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 窓を開けば、燈火の光は、竹林に降り積んだ雪を照らし、わが寢室は、寒さ甚しく、その上、人が居ないから、がらりとして居る。そこで、つくねんと獨り窓間に坐して居るが、わが友も、亦た必ず此様にして居ることと、遙に思を運んだ。何は免もあれ、この孤寂荒寒の底に在つて、孤吟興を縦にするに非ざれば、到底、この夜中を過ごすことは出来ぬであらう。

【餘論】 一氣呵成ではあるが、その内容は、格別目ざましくもない。唯だ遙想の一句に多少の情思を合んで居るのが、取りも直さず、この詩の生命であらう。

登西城門

西城門に登る

登城望神州、風塵暗淮楚。

城に登つて神州を望めば、風塵、淮楚暗し。

江山帶睥睨、烽火接樓櫓。

江山、睥睨を帯び、烽火、樓櫓に接す。

并吞何時休、百骨易寸土。

并吞、何時か休まむ、百骨、寸土に易ふ。

向來禾黍地、雨露長榛莽。

向來、禾黍の地、雨露、榛莽を長す。

不見征戰場、那知邊人苦。

征戰の場を見ずんば、那ぞ邊人の苦を知らむ。

馬驚西風笳、鳥散落日鼓。

馬は驚く西風の笳、鳥は散す落日の鼓。

嗚嗚城下水、流恨自今古。

嗚嗚たり城下の水、流恨自ら今古。

【字解】【一】 登城 城樓に登る。【二】 神州 桓温の言に「遂に神州をして陸沈し、百年邱墟たらしむ、王夷甫諸人、その責に任ぜざるを得ず」とある。神州は中原の地。【三】 淮楚 淮は淮水附近、楚は揚子江岸を云ふ。【四】 睥睨 睥名に「城上の垣を睥睨といふ、その孔中に於て非常を睥睨するを言ふなり、一に埒境に作る」とある。【五】 樓櫓 櫓は假りに建てた望樓、玉鶯に「櫓は、城の守禦の望樓」とあり、釋名に「櫓は露なり、露上して覆瓦なきなり」とある。【六】 嗚嗚 咽ぶ聲。

【題義】 西城門は蘇州府城の西門、この詩は、即ち其處に登つて感慨を發したのである。

【詩意】 城の西門に登つて、中原の方を望むと、淮楚一帯の地、風塵暗く立ちこめ、江山は、城垣に傍うて濶く、烽火は、樓櫓に接して起り、まことに、慘澹たる光景である。今しも、天下の喪亂に際



し、英豪輩、互に鬪争を事として居るが、并吞は、何時止むべきぞ。しかも、百人の骨を以て、一寸の土地に易へ、下民の苦痛は、一通りでない。さきに、禾黍稷穰たりし美田は、雨露依然たれども、今は榛莽を長じて、全く荒れ果てて仕舞つた。苟くも、征戦の場所に臨んで、その實況を視察せねば、如何に邊人が苦み惱んで居るか、とても料り知ることも出来まいと思ふ。今しも、笳は西風に鳴つて、匹馬爲に驚き、鼓は夕陽に敲いて、羣鳥争つて散じ、戰聲耳に至る外には、何物も聞こえず、四野、亦た妖雲低く地を罩めるといふ有様。城下の濠の水は、嗚鳴として咽びつつ、無限の恨は、今古に互り、滔滔として流れて止まない。

【餘論】起四句は城外の遠望、并吞何時休の六句は亂世の光景、馬驚西風笳の四句は城下の近望。中間に感慨を挿入した爲に、波瀾横生、自然、平板の弊に遠ざかつて居る。その中、百骨易三寸土は、一將功成萬骨枯と同義であるが、更に簡警痛切であるし、不見征戰場の六句は、聲調極めて高亮である。

期家兄宿東湖民家不至 家兄と期して東湖の民家に宿す、至らず

東湖欲上月。寒鳥已棲煙。東湖、月を上さむと欲し、寒鳥、すでに煙に棲む。
何處相期宿。柴門汀樹邊。何の處にか相期して宿せむ、柴門、汀樹の邊。

未嘗新漉酒。猶望遠來船。未だ新漉の酒を嘗めず、猶ほ遠來の船を望む。

誰信姜肱被。今宵還獨眠。誰か信せむ姜肱の被、今宵還た獨り眠る。

【字解】(一) 東湖 湖東に同じ。(二) 相期 約束する。(三) 新漉酒 田舎では大抵濁酒であるから、それを濾して清酒に當てる。南史陶潛傳に「郡將、漉酒候す。その酒熟するに逢ひ、頭上の葛巾を取つて、酒を漉して畢り、漚た復た之を著く」とある。(四) 姜肱 後漢書の本傳に「肱、字は伯淮、家世名族たり、弟仲海・季江と、俱に孝行を以て著聞し、友愛天至、兄弟、被を共にして寝ぬ」とある。被は夜具。

【題義】年譜にも見ゆる通り、青邱は次男で、兄の名を吝といつた。東湖は、太湖の東面であらう。この詩は、兄の吝と共に、太湖東岸の民家に一宿せむことを約し、自分は、先づて其處に往つたが、兄は遂に來らざりしに因つて作つたのである。

【詩意】太湖の東には、月が上らうとして、寒鳥は、すでに、煙の中なる時に宿つて居る。この夜、相約して宿せむとせしは何處かといへば、汀樹の邊に柴門を啓いた民家である。自分は、先に來て、待ち暮らし、新に漉して差出した酒をだに飲まず、もしかと思つて、遠くから漚ぎ寄する舟を望んで居る。かの姜肱にも比すべく、一處に著る夜具を擁して、今宵ひとりで眠るとは、まことに豫想せぬところであつた。

【餘論】前半四句は、宿せむことを期した湖東の民家、後半四句は、兄の來り過ぐるを待つ情思を寫

し出したのである。

送陶兵曹之越

陶兵曹の越に之くを送る

高齋掩林雪。獨臥玄景暮。

高齋、林雪に掩はれ、ひとり臥す玄景の暮。

夫君定何聞。此日勞我願。

夫君、定めて何をか聞く、この日、我を勞して願る。

清言一歡然。孰云味平素。

清言、一に歡然、孰れか云ふ、平素に味しと。

方期締深約。幽抱終以布。

方に深約を締し、幽抱、終に以て布かむことを期す。

胡爲遽嚴裝。明發首東路。

胡すれぞ、遽に嚴裝、明發、東路に首ふ。

手持三公檄。新辟當遠赴。

手に三公の檄を持し、新辟、當に遠く赴くべし。

薄祿豈足羈。知君爲親故。

薄祿豈に羈するに足らむや、知る君が親故の爲にするを。

況茲勾踐邦。山水夙所慕。

況んや、この勾踐の邦、山水、夙に慕ふところ。

湖明夕權來。谷迴寒鐘度。

湖は明かにして、夕權來り、谷は迴にして、寒鐘度る。

留滯自成悲。無因共遊鶩。

留滯、自ら悲を成す、共に遊鶩するに因なし。

【字解】【一】高齋 曹斎たる高樓。【二】玄景 冬景。冬は五色に配すると黒に當るが故に云ふ。【三】夫君 君といふに同じ、楚辭の九歌に思夫君兮太息とある。【四】勞我願 われを慰解せむが爲に懇懇來訪した。【五】清言 清談、清話に同じ、世事に關係せぬ談話。【六】幽抱 深く秘めたる懷抱。【七】嚴裝 嚴重に旅裝をする。【八】明發 明朝に同じ。【九】首東路 東方の驛路に向つて行く。【一〇】三公檄 三公は内閣員、檄は召し出しの通知。【一一】新辟 新に召し出される。【一二】爲親故 親戚故舊の爲にする。【一三】勾踐邦 勾踐の領土、即ち越の地。【一四】遊鶩 鶩は飛びあがる。

【題義】後漢書百官志に「兵曹は、太尉の公屬にして、兵事を主るとある。太尉は、陸軍大臣であるから、兵曹は、陸軍省の參事官といつた様なものであらう。陶某は、名字不詳、ともに不詳。この詩は、陶某が新に兵曹に任命せられ、仍つて、越の地に赴くを送つて作つたのである。

【詩意】書齋に充てた高樓は、林に降り積む雪に掩はれ、獨臥して、淋しく暗き冬の日暮の景色を眺めて居た。君は、定めて何事をか聞かれ、仍つて、予を慰解する爲に、その日、態態お出でに成つたことであらう、世事に關係せぬ話をされたのは、予の平生の事を十分に知つて居られることと見える。

そこで、深き約束を爲し、折よくば、他日、一處に出かけて、秘めたる懷抱を展べたいと思つて居た處が、今次越地に赴任されるに就いて、支度も嚴めしく、明朝、東方の驛路に向つて行かれるとのことと、まことに、豫想外であつた。しかし、三公からの徵書を受け取られて、新に召し出されたこと

であるから、遠くても何でも、是非往くべき筈である。君の才を以てして、少しばかりの俸祿の爲に

羈束されることは、斷じて無い筈だが、官界に於ける親戚故舊の關係があれば、それも、仕方が無い

ことである。まして、越は、むかし勾踐の所領たりし地で、その好山水は、早くから慕うて居られたから、今次の行も、定めて、御不満ではあるまい。夕霞に照らされて湖面明かなる時、舟に棹して渡り、谷は遙にして、寒鐘隱隱として響く、別時の光景は、もとより傷心に堪へられぬ上に、われは、この地に滞留し、一處に往つて、勝手に遊び廻ることの出来ないのは、まことに悲しいことである。

【餘論】起八句は前日陶兵曹の來訪、次の八句は今次の赴任、最後の四句は、別時の光景に併せて、離愁を寫し出し、それで題意を全うしたのである。

豊城余君夢彩堂

豊城の余君の夢彩堂

楚客身未歸。悠悠念庭闈。
 濤江雖云廣。莫阻魂夜飛。
 秋陰天無星。猿叫楓樹稀。
 家山倏已到。不失舊路微。
 宛然上高堂。獻笑試舞衣。
 焉知空館曙。鐘動殘燈輝。

楚客、身、未だ歸らず、悠悠として、庭闈を念ふ。
 濤江、廣しと云ふと雖も、魂の夜飛ぶを阻つるなし。
 秋陰、天に星なく、猿は叫んで楓樹稀なり。
 家山、倏ち已に到り、舊路の微なるを失はず。
 宛然として高堂に上り、笑を獻じて舞衣を試む。
 焉んぞ知らむ、空館の曙、鐘動いて殘燈輝くことを。

難追夢中歡。益發覺後啼。

夢中の歡を追ひ難く、益す發す覺後の啼。

誰能傳爾翼。遠去成相依。

誰か能く爾の翼を傳け、遠く去つて相依することを成さむ。

【字解】(一) 楚客 余氏の居る處は楚地なるが故に云ふ。(二) 庭闈 家庭の戸ばり、兩親の居るところ。(三) 濤江 波濤の湧き起る大江。(四) 秋陰 秋の曇り。(五) 舊路微 もと來し路の分かり悪いこと。(六) 試舞衣 高士傳に「老萊子、年七十、嬰兒の戲を作し、五色斑斕の衣を着け、水を取つて堂に上り、跌き倒れて地に臥し、小兒の啼を爲し、母の喜ばむことを欲す」とある。(七) 覺後啼 啼は歎歎、すすり泣をする。(八) 傳爾翼 汝に翼を附けてやる。(九) 相依 兩親と相依つて同居する。

【題義】豊城は、南昌府に屬して居る。余君は、名字閱歷、ともに不詳、夢彩堂は、彩衣の戲を爲すことを夢むといふので、即ち親を思ふ意に取つたのであらう。この詩は、南昌の豊城に寓居する余某の爲に、その夢彩堂に寄題したのである。

【詩意】君は、遠き楚地に客となつて、未だ歸らず、その間、常に兩親の事を思ひつづけて居る。波濤湧き起つ大江は、廣いけれども、夜、魂の飛び行くことを妨げず、夢中、毎に家に歸られるといふ話。秋陰に鎖されし空は、黯澹として星だに見えず、楓の葉の散る頃、猿の悲しげに叫ぶのが聞こえる。この時しも、君は、夢の中に忽ち故郷に歸り、もと來し路の、紆餘悠遠、分かり悪いにも拘はらず、決して取り違へることもない。そこで、宛然として、高堂に上り、兩親の前に於て、古しへの老萊子を真似、五色の彩衣を着けて舞を爲しつづつ、笑を獻する。しかし、夢は醒め易く、空館の曉早く、鐘

の聲に驚かされ、そして、枕頭には、残んの燈火が輝くのみ、夢中の歡喜は、到底追求し難く、醒めての後は、覺えず嘔り泣を致される。誰か、汝の身に翼を付けてやり、ここより、遠く去つて、實際の許に往き、そして一處に居る様にして遣る人は無いか。さういふ様に出來ないのは、まことに氣の毒で、且つ遺憾極まりないことである。

【餘論】起四句は、余君の豊城に客居すること、次の四句は、余君の夢に歸國すること、次の四句は夢中に彩衣の舞を爲すこと、最後の四句は、それに就いての感慨を敘してある。通篇、余君の爲に同情を寄せたので、夢彩てふ堂名の貴くして且つ意義あることも、自然、ここに説明されて居る。

過東氏廢園

東氏の廢園を過ぐ

人間樂事變、池上高臺傾。

人間、樂事變じ、池上、高臺傾く。

歌堂杏梁壞、射圃菜畦成。

歌堂、杏梁壞れ、射圃、菜畦成る。

不見妓釵影、詎聞賓履聲。

妓釵の影を見ず、詎ぞ聞かむ賓履の聲。「て情を傷ましむ。」

來斯欲據抱、念昔反傷情。

ここに來つて、抱を據べむと欲すれば、昔を念うて反つ

【字解】(一)杏梁、木理の奇麗な杏の材を用ひて梁を造る。南部煙花記に「隋の文帝、蔡容華の爲に瀟湘綺綺窓を作り、上に黃

金芙蓉花を飾り、琉璃の網戸、文杏を梁となし、飛走を雕刻し、動しすれば、千金を値す」とある。蔡容華は、龍姬蔡氏で、容華夫人に封ぜられた故に云ふ。(二)射圃、弓の稽古をする廣場、禮記に「孔子、射を聖相の圃に習ふ」とある。(三)賓履、賓客の履。

(四)據、懷抱をのべる、憂を忘れる。

【題義】東氏とは、如何なる人か分からぬが、いづれ、一時は、豪家を以て聞こえたものであらう。

この詩は、即ち其廢園を過ぎて作つたのである。

【詩意】この浮世に於て、樂事は長く續かず、榮枯遞變し、池上に在つた高臺も、いつしか、傾いて仕舞つた。むかし、佳人が歌を唱へた畫堂は、文杏の梁、すでに壞れ、弓の稽古をした廣場は、今しも菜畑と成つて仕舞つた。妓人の釵影をだに見ぬ位だから、いかで、賓客の履聲を聞くべき。折角、ここに來て景色を愛でて、憂を忘れやうとした處が、むかし勢猛に豪客を縦にしたことを思ひ出で、今日淒涼の實況に對し、却つて、我が心情を傷ましめるばかりであつた。

【餘論】起二句は總提、中間四句は廢廢の有様、結二句は感慨を述べたのである。

送倪雅

倪雅を送る

交游結深歡、離別生遠念。

交游、深歡を結び、離別、遠念を生ず。

聊持毛子檄、暫脫劉生劍。

聊か毛子の檄を持して、暫く劉生の劍を脱す。

南風柳下亭杯動江色灩

南風、柳下の亭、杯は江色の灩なるを動かす。

山遙馬嘶驛日落蟬鳴店

山遙にして、馬、驛に嘶き、日落ちて、蟬、店に鳴く。

此去漸成名驅馳君勿厭

ここを去つて、漸く名を成す、驅馳、君、厭ふ勿れ。

【字解】(一) 遠念、遠愁に同じ、盡さざる愁。(二) 毛子撤、卷四、醉贈三王廟の詩中、不奉三諸侯微の項にも述べて置いたが、後漢書、劉平等の傳の序に「毛驥、家貧、孝行を以て稱せらる。南陽の張奉、その名を慕ひ、往いて之を候す。坐定まつて、所撤適ま至り、驥を以て守令となす。驥、撤を奉じて入り、喜、顔色に動く。奉、心に之を賤む、驥の母死するに及び、公車微せども至らず。張奉嘆じて曰く、賢者、もとより測るべからず、往日の喜は、親の爲に屈するなり」とある。(三) 劉生、卷一、劉生の題辭に「劉生は、何代の人なるかを知らず、齊梁以來、爲るところの劉生の詞を觀るに、皆その任俠豪放、三秦の地に周游するを稱す。或は云ふ、劍を抱いて當征し、符節官となる、と。未だ詳にせざるところなり」とある。【一】江色灩、江水の灩つて碧なるを云ふ。【二】鳴店、店は驛店。

【題義】 鳧藻集に送倪雅一序と題する一篇があつて、その中「一日、倪君に客館に遇ふ。その年又少にして、氣は余に過ぐ、遂に相與に交を定む。余、江上に旅食して、君に別るるもの累年、歸るに及んで、君を城南に訪へば、亦た筆を載せて僕僕たり、新に辟されて省府掾曹となる。署間、これを問へば曰く、親老いたり、方に祿養に急、餘は吾が事に非ざるなり、と。今年春、撤して松江の幕に調せられ、且に過辭し、且つ謂はゆる贈言なるものを求む」の數語あるを見れば、その人物も、略ぼ想像される。この詩は、矢張、同時の作であらう。

【詩意】 これまで交游して、折角、深歡を結んだ位であるから、今日の離別に際しては、自然、盡さざる愁に堪へられぬ。君は、古しへの毛義の如く、今回撤を以て召し出され、しばらく、劉生の劍を脱して、游俠を止め、眞面目になつて赴任される。今しも、南風の吹き入る柳下の旗亭に於て、君が行を送ると、杯を擧ぐる度ごとに、灩灩たる江水が色を動かすやうに見えた。これから行けば、山遙にして、馬は驛門に嘶き、夕日落ちむとして、蟬が野店に鳴いて居る。清和四月の頃、旅もなかなか氣散じなものである。さて此を去れば、次第に功名を成すことが出来るので、風塵に馳驅すること、まことに御苦勞千萬であるが、決して之を厭うてはならぬ。

【餘論】 この篇は、二句づつ一意になつて居るので、起二句は總提、聊持毛子撤は遠行の所由、南風柳下亭は旗亭の送別、山遙馬嘶驛は旅中の光景、此去漸成名は、倪雅の爲に其前程を祝し、併せて勸奨の意を寓したのである。

同徐山人賁過妙蓮佛舍訪王主簿欽

徐山人賁と同じく、妙蓮佛舍を過ぎて、王主簿欽を訪ふ

逸人如高僧傲吏同隱尉

逸人は高僧の如く、傲吏は隱尉に同じ。

閒房對清夏共挹池荷氣

閒房、清夏に對し、共に池荷の氣を挹す。

煙帷栖鶴馴風鐸驚禽畏
明日雨還來山櫻當熟未

煙帷、栖鶴馴れ、風鐸、驚禽畏る。
明日、雨、還た來る、山櫻、當に熟すべきや未だしや。

【字解】【一】逸人 徐賁を指す。【二】傲吏 氣骨峻峻として上官に屈せぬ役人、王欽を指す。【三】隱尉 隱逸の名ある尉官、漢の梅福、前に卷五、刺繡九曲の詩中、仙尉の項に注して置いた。【四】挹 とる、くむ。【五】煙帷 煙を帯びたる戸ばり。【六】栖鶴馴 何ひ鳩が善く馴れて居る。錢起の津梁寺の詩に馴鶴不猜、寒雲能護霜とある。【七】風鐸 風に鳴る鈴。【八】山櫻 野生の櫻桃であらう。【九】當熟未 當に熟すべきや未だしやと訓すべし。熟すべきや否やといふ意。

【題義】徐山人賁は、前に春日懷二十友の詩の中にも見えて居て、青邱と親交ありし當時の詩人。妙違佛舎は何處に在るか、主簿王欽の字、竝に郷貫、閔歴等は如何か、すべて分からぬ。この詩は、徐賁と同行して、妙違寺に至り、そこに假寓して居た主簿王欽を訪ひ、三人游宴の席上に於て作つたのである。

【詩意】徐山人は逸人にして、さながら高僧の如く、王主簿は傲吏にして、古しへの梅福と同じである。この二人と共に、静かなる僧房の中に居れば、夏も涼しく、そして、池の方から吹き來る蓮の匂を十分に吸ひ取つて居る。煙を帯びたる戸ばりの間には、何ひ鳩が馴れて集まり、風に鳴る鈴の音に驚く鳥は、畏れて飛び起つて仕舞ふ。明日、雨が降つたならば、櫻桃の實も、定めて熟することであらう。【餘論】前半は三人會同の狀況、後半は佛舎中に見たところの光景、但し聊か堆垛に類した嫌がある。

る。

題帶經圖

帶經の圖に題す

朝鉏東臯上暮鉏西陂側
釋耒讀遺經欣然此休息
因觀舜稷事耕稼寧辭力

朝に鉏く東臯の上、暮に鉏く西陂の側。
耒を釋てて、遺經を讀まむとし、欣然として、此に休息。
因つて、舜稷の事を觀れば、耕稼、寧ろ力を辭せむや。

【字解】【一】朝鉏 鉏は鉏に同じ、田をすく。【二】東臯 前に數ば見えて、陶淵明去來辭の登東臯而舒嘯を引いて置いた、東の澤地。【三】西陂 西の隄。【四】耒 鋤の類。【五】舜稷 舜は親ら歷山に耕したことがあるし、后稷、名は棄、民に稼穡を教へ、仍つて、后稷と稱せられた。【六】耕稼 田を耕し稻を獲り入れる。

【題義】漢書兒寬傳に「寬、尙書を治む、貧にして資用なし、經を帯びて鉏き、息へば誦讀す」とあつて、この詩は、即ち兒寬帶經の圖に題したのである。

【詩意】兒寬の少時、朝には東の澤地に、暮には西の隄の邊に至り、終日田を鋤きかへし、その間少しでも休息する時は、鋤を投げ出し、欣然として、書經を誦讀して居る。その書經に載せたる舜の後稷だのの事蹟を觀ると、耕稼は、決して賤人の爲すことでもなく、聖人でさへ、親ら務められた位、骨が折れることなどは、少しも厭ひはせぬ。

【餘論】前の四句は事實、結二句は、舜稷の事、ともに書經に出づるに因り、上の遺經の二字に緊切に映帶し、自然に針線が相通じて居る。

題漂麥圖

漂麥の圖に題す

田中刈麥罷把卷忘其疲。

田中に麥を刈つて罷み、卷を把つて其疲を忘る。

風雨忽云至千穗漂無遺。

風雨、忽ち云に至り、千穗、漂うて遺すなし。

於書苟有得歲晏何憂飢。

書に於て苟くも得るあらば、歲晏、何ぞ飢を憂へむ。

【字解】「千」千石、多くの麥の穂。

【題義】後漢書高鳳傳に「鳳、專精誦讀、晝夜息不寐。妻、かつて田に之かむとし、麥を庭に曝らし、風をして難を護せしむ。時に天暴に雨ふる、而して、鳳、竿を持し、經を誦し、涼水の麥を流すを覺らず。妻、還つて怪み問ふ、鳳、方に之を悟る」とあつて、この詩は、即ち高鳳漂麥の圖に題したのである。

【詩意】高鳳の猶ほ貧なる時、畑中の麥を刈つて仕舞つて之を乾すことになり、書物を手にして其番をなしつつ、疲れを忘れて居た。然るに、風雨忽然として至り、多くの麥の穂は、残らず行潦に漂

されて、流れて仕舞つた。しかし、高鳳の心の中では、苟くも、書中に於て得るところあらば、それこそ結構なことで、麥を流した爲に、歳の暮になつて、飢に苦むとも、そんなことには關はないと思つて居たに相違ない。

【餘論】これも、前首と全然同一の作法で、結二句は、その上の第四句から一轉して出たのである。なほ、大全集には、題三帶經漂麥二圖として、この二首を一つ處にまとめてあるが、體裁上、その方が宜しいと思ふ。

秋日山中

秋日山中

山澤含霧雨偶來若居夷。

山澤、霧雨を含み、偶來れば夷に居るが若し。

我無遠游志何與親愛離。

我に遠游の志なく、何ぞ親愛と離れむ。

暑退初可喜秋來轉堪悲。

暑退く、初めて喜ぶべし、秋來る、轉た悲むに堪へたり。

壯顏豈草木憔悴同此時。

壯顏、豈に草木ならむや、憔悴、同じく此時。

中心與百憂日暮如有期。

中心、百憂と、日暮、期あるが如し。

悄悄出空字悠悠適荒陬。

悄悄として空字を出で、悠悠として荒陬に適く。

陋窮勿復歎。天欲昌吾詩。 陋窮、復た歎する勿れ、天、吾が詩を昌にせむと欲す。

【字解】【一】山澤、山と澤地、即ち溪壑。溪山といふに同じ。【二】如有期、約束した時がある様である。【三】空字、字は住宅。【四】昌吾詩、韓愈の貞曜先生銘に「維卒不施、以昌其詩」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】谿山の間、霧の如き雨を含み、ゆくりなくも此處に來ると、四顧人なく、さながら、夷の居る異國にでも居る様な氣がする。われに遠遊したいといふ志もないのに、どうして親愛の人人と離れて、ひとり居るのであるか。暑熱の退いたのは、先づ喜ぶべきことであるが、秋の來たのは、轉た悲むべきものである。壯夫の容顏は、草木と同じでも無いのに、此時に遇へば、同じく、憔悴して仕舞ふ。日暮になると、心中に、百憂羣がり生じ、さながら、約束して置いた時でもある様に覺える。そこで、すこすこと空屋を出て、悠悠と遠く歩いて、荒れた隄の處まで往つて見た。たとひ、窮陋に遇ふとも、決して嘆息せぬが善いので、それは、天が我が詩を立派な物に仕立て上げる爲に、態とするのであらう。

【餘論】起四句は獨居、次の四句は秋來憔悴すること、次の四句は日暮百憂の生ずること、結末二句は、奮激の意を漏らして、強ひて、自ら慰めたのである。それから、この詩は、山中と題するも、起五字以外、すこしも山らしい景色も見えず、甚だ其當を得ぬ様である。

宿幻住棲雲堂

幻住棲雲堂に宿す

窓白鳥聲曉。殘鐘度溪水。

窓は白くして鳥聲、曉なり、殘鐘、溪水を度る。

此時幽夢迴。獨在空山裏。

この時、幽夢廻り、獨り空山の裏に在り。

松巖留佛燈。葉地響僧履。

松巖、佛燈を留め、葉地、僧履を響く。

余心方湛寂。無使羣動起。

余が心、方に湛寂、羣動をして起らしむるなけれ。

【字解】【一】幽夢、醒は醒める。【二】佛燈、佛前に供へた燈火。【三】葉地、落葉の散り布いた地面。【四】湛寂、水の湛へたるが如く極めて靜寂なること。【五】羣動、萬物の活動。

【題義】幻住棲雲堂は、姑蘇志に「閶門外、雁蕩村に在り。元の大徳間、僧明本、吳に至り、その地名、雁蕩山と合ふを喜び、遂に草庵を此に結ぶ。趙孟頫、爲に之に名づけて棲雲といふ、その後、別に精舎を創して、今の名に改む」とある。この詩は、青邱が棲雲堂に宿した時に作つたのである。

【詩意】東の窓は、ほのぼのと白くなり、鳥聲、嬉嬉として曉を報じ、殘鐘は遠く谿水を度つて響いて居る。この時、自分も幽夢俄然として醒めたが、おもへば、唯だ獨り空山の裏に宿して居たのである。それから、外面を見ると、松の茂れる巖の間には、佛燈熒然として猶ほ残り、落葉の散り布いたる地上を坊さんが歩く、その履音が聞こえた。今しも、子が心は、靜寂の極、天晴、悟境に入りさ

うであるから、羣動をして起らしめず、しばらく、この儘であつて欲しい。
【餘論】前半は、室内に在つて達著した晚景、後半は、窓外の模様、これを併せて、略ぼ遺憾なく、結二句は、謂はゆる深省を發せむとする妙境である。全篇、清貧絶塵、中に盎然たる禪味を含んで居る處が極めて面白い。

送賈鳳進士

賈鳳進士を送る

新逢洛陽客。握手共遊般。
如何異鄉土。乃得此交歡。
相逢既不易。相違亦良難。
驅馬夕云返。北風野多寒。
登高望山川。浮雲杳漫漫。
羣獸相號呼。哀音摧心肝。
遊子念高堂。歲晚身得安。
人生如蓬萍。飄流無定端。

新に洛陽の客に逢ひ、手を握つて共に遊般。
如何か異郷の土、乃ちこの交歡を得たる。
相逢ふ、すでに易からず、相違ふ、亦た良に難し。
馬を驅つて夕に云に返れば、北風、野に寒多し。
高きに登つて、山川を望めば、浮雲、杳として漫漫。
羣獸、相號呼し、哀音、心肝を摧く。
遊子、高堂を念ひ、歳晚、身、安きを得たり。
人生、蓬萍の如く、飄流、定端なし。

重合諒有日。長歌聊自寬。 重ねて合ふ、諒に日あり、長歌、聊か自ら寛にす。

【字解】【一】洛陽客 史記賈生列傳に「賈誼は、洛陽の人」とある。賈鳳は、同姓なる故に、これを賈誼に比して云つたので、必ずしも、鳳が洛陽の人であつた譯ではない。【二】遊般 般は盤、遊びめぐる。【三】相逢 相別れる。【四】高堂 父母の在ます處。【五】如蓬萍 蓬の種、風の風に隨ふが如く、浮草の水のまにまに移るが如きをいふ。【六】定端 定まりたる端緒。【七】聊自寬 聊か自分で打ち寬ぐ、即ち心を慰める、王維の時に把酒與君自寬とある。

【詩意】この頃、古しへの賈誼の様な賈鳳進士に逢ひ、手を握つて、一處に遊びめぐつた。どうして、異郷の土に於て、かくの如き莫逆の友を得たか、まことに、思ひがけぬ仕合であつた。相逢ふことが既に容易でないから、相別れることも、良に六つかしく、おいそれといつて、手を分つ氣には成れぬ。君を送りし後、馬を驅つて、夕に返つて來ると、北風、野を捲いて、寒さは愈よ加はつた。そこで、高い岡に登つて、君の旅する山川を眺めると、浮雲は、杳然として際涯なく、折から羣獸相號呼し、悲しげな其聲は、わが心肝を摧くばかり、遊子たりし君は、兩親の事を思ひつづけて居たが、歳晚に近く、今しも歸國され、身は、初めて、安きを得る次第。おもへば、人生は、蓬の如く、萍の如く、常に飄流して、定まれる端緒もなく、爾我二人、この先、どう成るか知らぬが、重ねて相逢ふ日は、必ず有るに相違なく、そこで長歌して、聊か氣を大きくし、自ら慰める次第である。

【餘論】起四句は、最近の交遊を喜び、次の四句は、今回の別れ、登高望山川の四句は、その旅路を遠望し、遊子念高堂の二句は、歸郷の徒爾ならざるを云ひ、人生如蓬萍の四句は、他日重合の期あるべきを囑望したのである。

寄王七孝廉乞猫

王七孝廉に寄せて猫を乞ふ

鼠類固甚繁、家有偏狡狢。厥質亦陋微、朋聚工造怪。舞庭欲呈妖、憑社期免敗。饑同善飯頗、暴比橫行噲。倉偷自詫肥、穴竄寧辭隘。唯思淮南舉、不悟河東戒。嗟余守窮僻、有屋如弊廩。公然肆相欺、遠告來別界。

鼠類、もとより甚だ繁く、家には、偏に狡狢なるあり。その質、亦た陋微、朋聚して工に怪を造す。庭に舞うて妖を呈せむと欲し、社に憑つて敗を免るるを。期す。饑は善飯の頗に同じく、暴は横行の噲に比す。辭せむや。倉に偷んで自ら肥えたるを詫り、穴に竄して寧ろ隘きを。唯だ淮南に、舉がるを思つて、河東の戒を悟らす。嗟す、余が窮僻を守り、屋あり、弊廩の如きを。公然、肆に相欺き、遠く告げて別界より來る。

嚶嚶鳴棗頻、窸窣緣幙快。

嚶嚶、棗を鳴らすこと頻りに、窸窣、幙に緣ること快なり。

伺暗忌燈然、開腥喜餐餲。

暗を伺うて、燈の然ゆるを忌み、腥を聞いて、餐の餲きを喜ぶ。

空牀印凝塵、高壁隕墮塊。

空牀に凝塵を印し、高壁に墮塊を隕す。

核遺槃果亡、汁覆甕蓋壞。

核遺つて槃果亡び、汁覆つて甕蓋壞る。

轟霆駭怒鬪、急雨疑流嘔。

轟霆、怒鬪に駭き、急雨、流嘔を疑ふ。

書殘費補裝、裊澆煩烘曬。

書殘はれて補裝を費し、裊澆れて烘曬を煩はす。

入厠客驚吁、守舍奴憂誠。

厠に入つて、客、驚吁し、舍を守つて、奴、憂誠す。

豈無老烏圓、昔壯今何憊。

豈に老烏圓なからむや、むかし壯にして今何ぞ憊れたる。

不修司捕職、垂頭象瘖聵。

司捕の職を修めず、頭を垂れて瘖聵に象たり。

難求許邁符、莫具張湯械。

許邁の符を求め難く、張湯の械を具ふるなし。

尋蹊漫設機、薰隧徒吹輔。

蹊を尋ねて漫に機を設け、隧を薰して徒に輔を吹く。

遂令不眠人、中夜長抑噫。

遂に眠らざるの人をして、中夜長く噫を抑へしむ。

君家產銜蟬、許贈不以賣。

君が家に銜蟬を産す、贈を許し以て賣らず。

何意 意は疲れる、意氣地のなきこと。【元】司捕職 鼠を捕ふることを司る役。唐書五行志に「龍朔の年、洛州 鼠同しく處る。鼠は、隱伏して盜竊に象たり。猫は、捕鼠を職とし、しかも、反つて鼠に同じ、司盜者の職を廢し鼠を容るるに象たり」とある。【四〇】瘡 啞とつんば。【四一】許過符 別傳に「許過、鼠に衣を噛まる、符を作つて鼠を召し、畢く中庭に至る、唯だ一鼠住伏して動かす」とある。【四二】乳湯 前に守舍奴堂誠の項に見ゆ、械は攻め道具。【四三】尋 鼠は道路。【四四】設機 鼠を取る仕掛。【四五】蕭 蕭は煙、くすべる、隱は火道。【四六】吹 輪はふいご。玉篇に「輪、音聲、章義、以て火を吹いて熾ならしむべし」とあり、北周書章孝實傳に「盤外に於て、柴を積み、火を貯ふ。敵人、地道の内に伏するものあらば、便ち柴火を下し、皮輪を以て之を吹く、氣を吹いて一衝、成なり即ち灼爛す」とある。【四七】抑 歎息を抑へる。【四八】街 黃庭堅の乞糶詩に「道經奴符三數子、買魚穿柳柳街」にあつて、その注に「街 蟬は貓の名」とある。【四九】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五〇】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五一】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五二】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五三】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五四】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五五】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五六】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五七】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五八】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【五九】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六〇】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六一】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六二】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六三】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六四】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六五】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六六】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六七】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六八】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【六九】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七〇】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七一】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七二】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七三】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七四】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七五】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七六】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七七】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七八】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【七九】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八〇】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八一】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八二】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八三】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八四】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八五】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八六】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八七】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八八】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【八九】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九〇】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九一】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九二】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九三】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九四】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九五】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九六】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九七】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九八】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【九九】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。【一〇〇】 鼠 鼠は鼠の名。邱遲の表に「麻絲は是れ著へ、菅刷は遺すなし」とある。

【題義】 この詩は、自宅に鼠が多く住み、その害甚しきに因り、どうか猫を一疋貰ひたいといつて、王七孝廉に申し送つたので、いはば、手紙に代へた様なものである。王七の七が排行なることは、解するに及ばぬ。

【詩意】 鼠の種類は、もとより非常に多く、人家に住むものは、特別にするく、且つはしつこいものである。その性質は野郎にして且つ微賤であるが、類を以て聚まり、巧に奇怪な事を仕出來す。前庭に舞ふに當つては、妖兆を呈せむと欲するものの如く、社に憑り付いて、どうしても攻められることもなく、自然、敗を免れることが出來ると、多寡を括つて居る。鼠の貪食なることは、一飯に斗米を

食つて見せたといふ廉頗に同じく、その亂暴なことは、十萬の衆を得て胡中に横行して見せるといつた樊噲に比すべく、倉中に匿れて、その中なる積粟を偷み食つて、自ら肥えたことを誇り、穴の中に引ッ込んで、その隘きことを厭はぬ。そして、淮南王の遺した薬を舐めて、天に上つて仙去せむことを願ひ、柳河東が、飽食禍なきは豈に恆となすべけむやといつた其戒をだに悟らない。大體、鼠といふものは、かくの如くであるが、予は、窮僻の地に居り、家は壊れかかつた役所の如く、ただ廣いばかりで、掃まりも十分でない處から、鼠どもは、公然として肆に手を壓倒し、遠く其同類に告げて別界より來り、次第に多く聚まつて仕舞つた。そこで、こそこそと頻りに囊を鳴らし、又ひよこひよこと戸ばりを傳はつて走り、暗きを伺うては、燈火の燃えて居るのを氣にし、腥を嗅ぎつけては、食物の腐敗したるを喜び、空床の上なる糞塵には、その足跡を残し、高壁の落ちかかつた土塊を頰すこともある。それから、種だけを残して、盤上の果物を引き凌つて仕舞ひ、汁をこぼせば、鉢の中の野菜が引き散らしてある。その怒り鬨ふに當つては、雷霆の轟くが如く、つゆッほい物を態態流して嘔るときは、さながら夕立の様な音がする。書物は噛ぢられて、修繕を要し、初は汚されて、日に乾かねばならず、圃に入ると、その中で暴れて居るから、知らぬ客人は驚いて叫び、留守居を爲せる下僕は、肉などを凌はれて、ひどく心配して居る。もとより、古猫が居ない譯でもないが、むかしは、随分壯であつた奴でも、今は老いさらばいて、意氣地も無く、鼠を取る職務を十分に盡すことが出來ず、

頭を垂れて、嘔かつんぼの如く見える。かの許邁が鼠を狩り出した御符は、到底求め難く、張湯の如く之を磔殺することも出来ず、その通路を尋ねて罾を設けたり、穴を燻べる爲に罽を吹き立てたりするが、さしたる効果もなく、あまり騒がしくて寐られぬままに、夜中いつまでも嘆息を耐へて居るといふ始末、承はれば、貴君の家では、猫が産をして、その子猫は、賣らぬけれども、希望者には贈呈するといふ御話であるから、是非、一頭頂戴したい。そこで、願はくは、おもふ存分に、驅り出して之を退治したならば、役にもたぐぬ菅副を刈り盡した様に、さつぱりするであらう。残さず殺したとして、仁でない譯でもなく、鼠の害を去つて仕舞へば、少しは氣を許して、ゆつくりすることも出来る。かくて、枕を高くして安眠し、幸に苦痛なくんば、全く貴君の御蔭で、再拜頓首して、御禮を申し上げることで御座らう。

【餘論】起首より不悟河東戒に至る十二句は、一般鼠族の害を記し、嗟余守窮僻より守舍奴憂賊に至る十八句は、おのが家に於ける鼠害の殊に甚しきを述べ、豈無老烏圓より中夜長抑噫に至る十句は、老猫が居ても、何の役にも立たぬことを言ひ、君家産三衙蟬より結尾に至る八句は、新に産まれた子猫を是非一頭貰ひたいといふ意を述べたのである。通篇、随分こまかく立ち廻つて、形容を盡し、典故を自在に運使して居るけれども、題が題だけに、さう面白くないが、その大部分は、鼠賦として見るべく、何かの場合に、資材を此に借る上に於ては、大に便宜がある。

送客至海上得誠字

客の海上に至るを送る、誠の字を得たり

臥廐困田子。抱關老侯生。
 豈無一時辱。終有千載名。
 子亦屈身者。薄祿非所榮。
 結驩誰云淺。一杯吐衷誠。
 艱難我何託。所託在友朋。
 平生不傷離。此離骨爲驚。
 白日川上沒。歌作變徵聲。
 明朝欲觀海。浩蕩逐東征。

廐に臥して田子を困しめ、關を抱いて侯生を老いしむ。
 豈に一時の辱なからむや、終に千載の名あり。
 子も亦た身を屈するもの、薄祿は榮とするところに非ず。
 驩を結ぶ、誰か淺しと云ふ、一杯、衷誠を吐く。
 艱難、われ何にか託せむ、託するところは友朋に在り。
 平生、離るるを傷まず、ここに離れむとして、骨爲に驚く。
 白日、川上に沒し、歌は變徵の聲を作す。
 明朝、海を觀むと欲す、浩蕩として東征を逐ふ。

【字解】(一) 田子 史記田橫傳に「漢王、立つて皇帝となる、田橫、その徒屬五百人と、海に入つて島中に居る。高帝、これに詔す。横、乃ち其客二人と傳に乗じて洛陽に詣る。未だ至らざること三十里、戸郷に至つて巖に置く。遂に自到して死す」とある。

(二) 侯生 前に卷二、大梁行の已訪侯嬴二到里門の項にも見えて居たが、史記信陵君傳に「魏に隱士あり、侯嬴といふ、年七十、大梁夷門の監者たり。公子、これを聞き、車騎を從へ、左を虚しうして、自ら侯生を迎ふ。侯生、錦衣冠を搦し、直に上つて、公子の上に坐して謙せず、以て公子を觀むと欲す、公子、轡を執ること愈々恭し」とある。(三) 結驩 交を結ぶに同じ。(四) 衷誠 同上に坐して謙せず、以て公子を觀むと欲す、公子、轡を執ること愈々恭し」とある。

中心の誠。【二】不傷離 離は別離。【三】骨爲野 江淹の別賦に心折骨驚とある。【七】變微聲 史記刺客傳に「易水の上に至り、すでに祖して道を取る。高漸離、筑を撃つ、蕭何、和して歌ひ、變微の聲を爲す。士、皆涙を垂れて涕泣す」とある。【八】浩蕩 際涯なき貌。

【題義】海上は、東方の海岸、得誠字は、何かの句を分つて韻となし、おのれは、誠の字を得たといふこと。この詩は、知人某の東方海岸に遊ぶを送り、誠の字を得たから、それを韻にして作つたといふのである。

【詩意】田横は、尸郷の巖に臥して困み、侯嬴は、大梁夷門の番人として年を取つて仕舞つた。この二人、無論、一時の恥辱を受けたが、終には、千古不朽の名を成した。君も亦た、高才世に容れられず、その身を屈して居るもので、すこしばかりの俸祿は、決して有り難いとも思はぬ。君と交を結ぶこと、もとより深く、仍つて、ここに、一杯の酒を傾けつつ、中心の誠を吐く次第。艱難の折からなど、われは何處に此身を託すかといへば、託するところは、朋友に限られて居る。されば、平生別離など、格別心にかけてぬが、今日、親友たる君に別るるに際しては、骨も爲に驚くばかり。やがて、白日は川上に没し、歌は自然悲しく、變微の聲を爲すに至つた。君は、明朝、ここを去つて、大海を見物せむとし、浩蕩として際涯もなく、東方に向つて往かれるさうだが、偏に道中の無異ならむことを祈るのみである。

【餘論】起四句は、古人を引き出して、暗に客の人物を況し、その次四句、客の屈身より、この席上、衷誠を吐くことに及び、艱難我何託の四句は、この別の傷むべきを言ひ、白日川上没の四句は、別時の光景より、延いて前程の平安を望む意を述べたのである。

冬至夜坐懷周記室

冬至夜坐、周記室を懷ふ

夜聞驚鴻來。一室寒且靜。

夜、驚鴻の來るを聞く、一室寒くして且つ靜かなり。

明朝日長至。夜漏方最永。

明朝、日は長至、夜漏、方に最も永し。

淒淒霜塗階。皎皎氷入井。

淒淒として霜は階に塗れ、皎皎として氷は井に入る。

故人昔同宿。杯酒笑相領。

故人、むかし同じく宿し、杯酒、笑うて相領す。

年運方重周。歡事忽盡屏。

年運、方に重ねて周り、歡事、忽ち盡く屏く。

別離孰無有。爾獨限殊境。

別離、孰れか有るなからむ、爾、ひとり殊境を限る。

達曙恨難裁。殘燈兀孤影。

曙に達せむとして、恨、裁し難く、殘燈、孤影兀たり。

【字解】【一】驚鴻 物に驚いて飛ぶ雁。【二】日長至 冬至に當ること、即ち日が最遠處に達すること。【三】塗階 階にまみる

五言古詩 冬至夜坐懷周記室

と調すべし。【四】年運 歳月の運行。【五】重周 二度めぐる。【六】離職 たち切ることが出来ない。

【題義】 列朝詩集に「周砥、字は履道、吳人、無錫に寓居す。博學にして文詞に工なり。兵亂、地を避け、義興の馬治孝常と善し。往いて、荆溪山中に舍するや、治、爲に具を治し、車に巾し、舟を泛べ、陽羨溪山の勝を窮め、荆南倡和集あり。吳に歸り、高楊諸人と遊び、書畫益す工なり。すでにして、又去つて會稽に之き、兵に歿す」とある。この詩は、冬至の夜、獨坐無聊なるまま、當時記室の職に居て外に在りし、周砥に寄懐したのである。

【詩意】 夜、物に驚く様な雁が鳴いて飛び来るを聞きつつ、わが居る一室の内は、寒くして且つ静かである。明日は冬至、今夕は一年中一番長い夜で、水時計の響も、わびしく聞こえる。凄凄たる霜は、階上に塗れ、皎皎たる氷は、井に張りつめて居る。さき頃、君と同宿し、笑ひさざめいて杯酒を傾けたこともあつたが、歲月頻りに移つて、すでに二年を経過し、當年の喜は、盡く屏けられて仕舞つた。別離は、誰にしても有るが、君は、ひとり、格別遠い處に居られるから、なほ更、相思の情に堪へぬ。かくて、曉ならむとして、この恨、遂に去るに由なく、暗澹たる殘燈の底、ひとり、我が影の兀然たるを顧みて、愈よ心さびしく覺えた。

【餘論】 起六句は、當夜の敘事。故人昔同宿の四句は、往年を追憶し、別離孰無有の四句は、今夕相思の堪へられぬ趣を敘したのである。

賦永上人紙帳

永上人の紙帳を賦す

剡藤裁素幃。坐使諸塵隔。

冬室自生溫。寒窓屢驚白。

不隨直省被。長覆棲禪簀。

思曾雪夜時。宿伴山中客。

【字解】 【一】剡藤 剡溪に産する藤紙。博物志に「剡溪、古藤甚だ多く、紙を造るべし」とあり、一統志に「紹興府藤縣、剡藤を出す」とある。【二】素幃 白色の戸ばり。【三】諸塵 浮世の塵。【四】直省被 直省に當直する時に用ふる被具、漢官典職に「漢の尙書郎、入直するや、青綾被、白綾被、或は錦被を供す」とある。【五】棲禪簀 安坐して禪を爲すところの簀子。

【題義】 説明に及ばぬ、但し、永上人の本名隠歴は不詳。

【詩意】 剡溪に産する藤紙で、白い戸ばりを造つたが、その中に這入ると、世上の諸塵を隔離することが出来るし、冬の部屋も、これだにあらば、自然温を生ずべく、唯だ寒窓が早く白み、夜が明けたかと思つて、屢ば驚かされるのは、どうも仕方がない。宮中に宿直する時は、綾錦の夜具を提供されるさうだが、この紙帳は、さういふ場合に引き出されることはなく、翻つて、名僧が安坐して禪を爲す其簀を覆ふに過ぎぬ。おもへば、山中の雪の夜に、宿を請ふ人があつた時、この紙帳の中で、主

客ともに寐たことは、今でも思ひ出される。

【餘論】前半は、直に紙帳その物を詠じ、冬室の二句は、殊に明堂である。後半は、側筆を以て之を行き、いささか、餘情を含んで居る。

初開北窓晚酌

初めて北窓を開いて晚酌す

春暄罷淒風。朝始開北牖。

春暄 淒風を罷め、朝に始めて北牖を開く。

青山入吾座。不異延故友。

青山、わが座に入り、故友を延くに異ならず。

自掃榻上塵。琴册列左右。

自ら榻上の塵を掃ひ、琴冊、左右に列す。

悠然坐其間。傲兀醉杯酒。

悠然として其間に坐し、傲兀、杯酒に酔ふ。

況當江花落。微雨斜日後。

況んや、江花の落つるに當る、微雨斜日の後。

遠見帆渡川。高聞鳥鳴柳。

遠く帆の川を渡るを見、高く鳥の柳に鳴くを聞く。

孰云非吾廬。居止亦可久。

孰れか云ふ、吾が廬に非すと、居止、亦た久しうすべし。

人生處一席。累榭復何有。

人生、一席に處る、累榭、復た何かあらむ。

幽懷悟澹泊。末事辭紛揉。

幽懷、澹泊を悟り、末事、紛揉を辭す。

更擬長夏眠。風期結陶叟。

更に擬す長夏に眠り、風期、陶叟に結ぶことを。

【字解】【一】春暄 春暖に同じ。【二】淒風 寒風。【三】傲兀 得意の貌、韓愈の詩に傲兀坐試席とある。【四】居止、

こゝに止まって居る。【五】累榭 累は重疊、榭は臺の木あるもの。重なる榭臺、楚辭に層臺累榭とある。【六】末事 瑣細な世事。

【七】紛揉 紛紛揉揉、ごちゃごちゃの貌。【八】風期結陶叟 風懷が陶淵明と冥契する。淵明が自ら況した五柳先生傳に「北窓に高

臥し、自ら謂ふ羲皇上人」とある。

【題義】春になつて、大分暖いといふので、はじめて北窓を開いて晚酌を爲し、仍つて、その趣を詠

出したのである。原注に「時に江上外、舅周隱君の宅に寓す」とあるから、これは、妻君の里方、周

仲達の家で、年譜で見ると、至元二十七八年、青邱三十三歳の間の事である。

【詩意】春暖、日に相催し、淒しい北風も、最早吹かなくなつたから、今朝、はじめて北の窓を開

いた。すると、青山、わが座に入り、丸で舊友を迎へた様な心持がした。そこで、親ら榻上の塵を

掃除し、左右に琴書を排列し、悠然として其間に坐し、そして、得意氣に酒を傾けた。今しも、春の

末、微雨斜日の後に、江邊の花ども、しづ心なく散り、白帆の川を渡り行くのが遠く見え、小鳥の柳

に囀るのが、高らかに聞こえ、まことに、面白い眺である。ここは、自分の家ではないが、妻の里方

であるから、いくら長く居たとて、差支はない。人生、唯だ一席に處るを以て足れりと爲すべく、二

階三階の宏壯な樓臺とても、何にも成らぬ。幽懷は、悟徹の餘、自然淡泊であり、つまらぬ世事のごたごたは、御免被つて、關係せぬ積り。この上、日の長い夏の頃になると、獨り此に高臥し、羲皇以上の人様な氣がするといつた彼の陶淵明の風懷と、自然冥契するであらう。

【餘論】起四句は北窓を開く。次の四句は晚酌。況當江花落の四句は、窓外の風物、孰云非吾廬の四句は、満足の意を述べ、幽懷悟澹泊の四句は、全然世事に關係せざる其高致を寫し出したのである。

夏日與高廉遊無量佛院還憩王隱君池上

夏日、高廉と無量佛院に遊び、還つて、王隱君の池上に憩ふ

久臥困炎煥。煩抱思一浣。
 久臥、炎煥に困み、煩抱、一浣を思ふ。
 霽雨留暫涼。言出欣子伴。
 霽雨、暫涼を留め、ここに出でむとして子の伴ふを欣ぶ。
 悠悠去景得。稍稍來跡斷。
 悠悠として去景得たり、稍稍として來跡斷ゆ。
 已尋名僧廬。復謁高士館。
 すでに名僧の廬を尋ね、復た高士の館に謁す。
 蒲荷共南風。池上新葉滿。
 蒲荷、ともに南風、池上、新葉滿つ。

步陰覺衣輕。汲冷嫌綆短。
 陰を歩いて衣の輕きを覺え、冷を汲んで綆の短きを嫌ふ。

幸無塵中役。樂此林下款。
 幸に塵中の役なく、この林下の款を樂む。

鳴蜩嘒斜陽。歸駕猶可緩。
 鳴蜩、斜陽に嘒たり、歸駕、猶は緩くすべし。

【字解】【一】久臥、久しく高臥して外出せぬこと。【二】炎煥、暑熱。【三】煩抱、煩悶する懷抱。【四】言出、ここに出でむとしてと訓すべし。【五】去景、すでに過ぎ去つた處の景色。【六】來跡、前から來かかる跡。【七】名僧廬、即ち無量佛院。【八】高士館、王隱君の宅。【九】汲冷、冷水を汲む。【一〇】綆短、車井戸の綱の短いこと。【一一】林下款、林下の會合。【一二】鳴蜩、蜩は蟬。【一三】嘒、蟬の鳴く聲。【一四】歸駕、歸りの車。

【圖義】高廉は、もとより作者の一族であるが、その字や閱歷は分からぬ。無量佛院は、蘇州府志に「齊門の外に在り、明の洪武の初、十高僧を選び、本寺の東白曉、與るを得たり」とある。王隱君も、姓字不詳、この詩は、夏の暑い頃、族人高廉と共に外出し、はじめに無量佛院に遊び、次いで王隱君を訪うて、その池上に休憩し、當日の見聞を併せて敘したのである。

【詩意】久しく高臥して、連日の暑さに困みつつ、この煩悶せる懷抱を一洗したいと思つて居た。幸に雨が霽れたばかりで、しばらく涼しい處から、門外に出たが、高廉といふ族人の一所に往つて呉れたのは、まことに嬉しかつた。過ぎ行く途すがら、すでに後に成つたと思はれる景色に再び出合ひ、前に在る筈の勝蹟が忽ち斷えて無くなり、あとから考へると、去來常ならぬ有様。すでに名僧が居たと

いよので有名になつた無量佛院を尋ね、次に高士王隠君が現に住んで居る亭館に立ち寄りて見た。その池上に於ては、蒲や蓮が暖き南風に吹かれて、新しい葉が水面に一ぱい満ちて居た。花木の陰を歩けば、何となく、ひいやりとして、衣の軽きを覚え、喉が乾いた爲に、冷水を汲み上げやうとしても、何分、井戸綱が短いので、困つて仕舞つた。身は、幸にして、塵中の職務なきが故に、ここに来て、林下の會晤を樂むことが出来るので、たとひ、蟬の聲、嘒嘒として斜陽を促がすとも、歸りの車を急がせずに、少しは、緩々くりして居ても宜しい。

【餘論】起四句は、夏日外出したことを云ひ、次の四句は、その行先をいひ、蒲荷共南風の四句は、王隠君の池上の景、幸無塵中役は、自家の感慨を逗露したのである。

曉起春望

曉起春望

今朝有春意。原野晴始綠。今朝、春意あり、原野、晴れて始めて緑なり。

疏花未破煙。新禽稍鳴旭。疏花、未だ煙を破らず、新禽、稍や旭に鳴く。

物情各欣榮。客意胡刺促。物情、各、榮を欣び、客意、胡ぞ刺促なる。

居閒厭寂寞。從仕愁羈束。閒に居ては寂寞を厭ひ、仕に従つては羈束を愁ふ。

兩事不可齊。人生苦難足。

兩事、齊しうすべからず、人生、足り難きに苦む。

安得長放歌。花開酒醅熟。

安んぞ得む、長しへに放歌し、花開いて酒醅熟するを。

【字解】【一】春意、春の氣分。【二】疏花、まばらなる花。【三】物情、萬物の情思。【四】刺促、こせこせする。【五】從仕、仕官に従事する。【六】羈束、萬事拘束される。【七】兩事、閒に居ると仕に従ふとを云ふ。【八】酒醅、醅は酒の醱したるもの。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】今朝早く起きて見ると、どうやら、景色立つて、春の氣分の漾ふを覚え、野もせも、晴れわたりて、一面に緑の色をして居る。疏花は、未だ煙を破つて咲き出でざれども、珍らしい小鳥は、次第に多く朝日に向つて啼り出した。萬物の眞情として、榮華を喜ばぬものはないのに、如何なれば孤客の思のみは、こせこせとして、のびやかでないか。閒中に居れば、相手が少いといつて寂寞を厭ひ、仕官に従事すれば、事ごとに拘束されるから面白くない。閒に居ると仕に従ふとは、もとより同一視すること出来ず、それぞれ面白いこともあるのだが、人は兎角満足し難いものであるから、まこと厄介極まる次第。おのれは、百花初めて開いて酒の熟する時、長しへに放歌して、心ゆくばかり、樂を極めたいと思ふ。

【餘論】起四句は、題に見えた春望の景、物情各欣榮の四句は、人生の常態を言ひ、兩事不可齊の

四句は自己の懷抱と操守とを述べたので、宛然たる閱世の語といふべく、その中、自然に至理を含んで居る。

陳氏秋容軒

陳氏の秋容軒

西郊莽迢遞。川樹凝煙景。西郊、莽として迢遞、川樹、煙景を凝らす。

雨過落紅蕖。斜陽半江冷。雨は過ぎて紅蕖を落し、斜陽、半江冷かなり。

蟬鳴山欲暗。雁去天逾永。蟬は鳴いて山暗からむと欲し、雁は去つて天逾よ永し。

孤客對蕭條。應知鏡中影。孤客、蕭條に對し、應に知るべし鏡中の影。

【字解】【一】莽、荒れたる貌。【二】迢遞、遠き貌。【三】川樹、川原に生えた木木。【四】煙景、春景色をいふのが普通であるが、こゝのは字面の通り、煙れる景色。【五】紅蕖、蕖は芙蓉、即ち芙蓉、赤い蓮の花。【六】天逾永、天が末遠く見える。【七】蕭條、さびしき景色。【八】鏡中影、鏡に映する自己の影の瘦せ衰へたるをいふ。

【題義】陳氏は如何なる人か、秋容軒は何處に在るか分からぬ。この詩は、即ち陳氏の秋容軒に寄題したので、純ら秋容の二字に就いて趣向を著けたのである。

【詩意】西郊は荒れはてて、望遠に極まらず、川原に簇生する遠樹は、煙れる景色を凝らして居る。

雨一たび過ぐれば、池上の赤い蓮を落し、半江の斜陽、自ら冷かなるを覺える。時しも、蟬は鳴いて、暮山暗くなりかかり、雁は飛び去つて、長天は一しほ末遠く見える。軒の主人は、友もなく、ひとり、この蕭條たる秋景に對して感慨愴然、翻つて、鏡中に見た自己の影の瘦せ衰へたのを嘆息することであらう。

【餘論】前六句は敘景で、自然の秋容、後二句は感慨で、孤客の秋容、句句、題を離れぬ處は、いかにも緊切であるし、殊に中間四句は、清瑩明媚、極めて人に近きを覺える。

瞻木軒

瞻木軒

道士李玄修所居。庭有凌霄花。依樹而生。近樹伐而凌霄獨存。因以名室。求予賦詩。

【調讀】道士李玄修の居るところ、庭に凌霄花あり、樹に依つて生ず。近ごろ、樹、伐られて、凌霄、ひとり存す。因つて、以て室に名づけ、予に求めて詩を賦せしむ。

【字解】【一】凌霄、邦名のうぜんかづら、本草綱目に「凌霄花は、多く山中に生ず、人家の園圃、亦た或は種蒔す。初めは、藤を作して大木に依り、その順に至つて花あり、色黃、夏中乃ち盛にして錦繡の如し。仰ぎ觀るべからず。露、目中に濡れば、明を失ふ

ものあり」と見えて居る。「三」依 つきまといふ。

凌霄託高樹引蔓日已長。

凌霄、高樹に託し、蔓を引いて日に已に長し。

纏綿共春榮幽花藹敷芳。

纏綿として春榮を共にし、幽花藹として芳を敷く。

高樹忽見伐無依向風霜。

高樹、忽ち伐られ、依るなくして風霜に向ふ。

亭亭還自持柔姿喜能強。

亭亭として、還た自ら持し、柔姿、能く強きを喜ぶ。

君子貴獨立倚附非端良。

君子は獨立を貴ぶ、倚附は端良に非ず。

覽物成感歎爲君賦新章。

物を覽て感歎を成し、君が爲に新章を賦す。

【字解】(一)纏綿 蔓のからまる貌。(二)春榮 勢よく生長する。(三)藹敷芳 藹然として芳香を發する。(四)喜能強 姿は柔しくても、その本性の堅強なる處が頼母しい。(五)端良 端正にして良善なること。(六)新章 新詩に同じ。

【題義】小引の意味は「李玄修といふ道士の居る道觀の庭には、凌霄花があつて、木にまとひ付いて生長した。處が、近ごろ、その木は伐り倒されたが、凌霄花のみは、獨り猶ほ存して居る。そこで、道士は、瞻木を以て其室に名づけ、予に乞うて詩を賦せしめた」といふので、瞻木とは、さきに凌霄花の纏ひ付いて居た木を見上げる、つまり戀ひ慕うて居るといふことで、本を忘れざる意を含んだものと見える。

【詩意】凌霄花は、丈高い木にまとひつき、蔓を引いて日に日に生長し、からみ合つて、木と共に、自然勢よく、やがて花が咲くと、藹然として芳香を放つて居る。處が、高樹は忽ち伐ち去られた爲に、まとひ付くべきものを失つて、これから風霜凄じき冬に向はむとして居る。しかし、幸にも、凌霄花は、亭亭として高きに拘はらず、自ら其身を持ちこたへ、一寸見では、やさしく力なげなるに似もやらず、本性の堅強なるを發揮したのは、まことに頼母しい。元來、君子は獨立を貴ぶもので、他に依附することは、端正良善の仕打ではない。今物を見るにつけて、感慨自ら禁せず、君の爲に、この新詩を賦した次第である。

【餘論】起四句は、凌霄の樹に依つて生ぜしこと。高樹忽見伐の四句は、樹、すでに伐られて、凌霄、ひとり存すること。以下四句は感慨、この中、君子貴獨立の十字は、格言めいて、聊か面白いが、覽物の二句は、全く挨拶的、形式的で、興趣索然、折角ながら、全篇を玉なしにして退けた様な憾がある。

雨中遣興

雨中、興を遣る

積雨坐無悶端由便寂寞。

積雨、坐して悶なし、端に寂寞を便とするに由る。

好鳥不頻啼。閒花自遲落。

好鳥、頻りには啼かず、閒花、自ら遅く落つ。

行園每渡徑。望岫時登閣。

園を行つて、毎に徑を渡り、岫を望んで、時に閣に登る。

只此可終朝。何當有樽酌。

只だ此に朝を終るべし、何ぞ當に樽あつて酌むべき。

【字解】【一】種雨。降りつづく雨、長雨。【二】無聞。閑は煩悶。【三】端。まさにと訓すべし。【四】便寂。寂を便宜とする。【五】不頻啼。打ちつづけては啼かぬ、時たま啼く。【六】行園。庭園を巡る。【七】望岫。岫は兩山の間の谷。【八】終朝。終日に同じ。

【題義】雨の日に興懷を遣る爲に作つたのである。

【詩意】降りつづく雨に坐して、格別、煩悶の念なきは、まさしく寂寞を便宜とし、つまり、静で善いと思ふからである。好鳥も打つづけては啼かず、忘れられた花は、十分咲き切つてから落ちる。庭園を巡る其度ごとに、細徑をたどり行き、高岫を望むが爲に、時時、高閣に登ることがある。かういふ風にして居れば、退屈もせずに、一日を長閑に暮らすことも出来るので、何も酌むべき酒樽が有らねばならぬといふ譯でもない。

【餘論】閒中の興趣を述べたので、起二句は總提、好鳥の二句は雨中見るところの景色、行園の二句は自己の所作、只此の二句は收結である。

題方厓師聽秋軒

方厓師の聽秋軒に題す

西澗獨趺處。涼颺度虛閣。

西澗に獨り趺處すれば、涼颺、虚閣を度る。

秋從夜深來。流音滿林壑。

秋は夜深より來り、流音、林壑に滿つ。

初鳴忽澎湃。稍定還蕭索。

初め鳴いて、忽ち澎湃、稍や定まつて、還た蕭索。

月下暗禽翻。窓間危葉落。

月下、暗禽翻り、窓間、危葉落つ。

上人習靜定。談籟笑南郭。

上人、靜定に習ひ、籟を談じて南郭を笑ふ。

喧寂兩無聞。星河在寥廓。

喧寂、兩つながら聞かなく、星河、寥廓に在り。

【字解】【一】西澗。西の方の溪澗。【二】趺處。あぐらをかいて行ひ澄まして居る。【三】流音。流るるが如き音。【四】澎湃。波濤の湧きかへる如く高く烈しき聲。【五】蕭索。聲細くして淋しげなること。【六】暗禽。暗中を飛ぶ鳥、夜出る鳥。【七】危葉。枯れて落ちかかつて居た葉。【八】靜定。寂靜を旨として入定する。【九】談籟。談笑南郭。莊子の齊物論に「南郭子綦曰く、汝、人籟を聞いて未だ地籟を聞かず、汝、地籟を聞いて未だ天籟を聞かざるかな」とある。人籟・地籟・天籟の事を論じて、古しへの南郭子綦が未だ至理を悟らざるを笑ふといふ意。【一〇】星河。天の河。【一一】寥廓。大空。

【題義】方厓は、いづれ坊さんの名であらうが、如何なる人か分からぬ。この詩は、即ち方厓の居室たる聽秋軒に寄題したのである。

【詩意】方厓師が、西澗なる居室に於て、あぐらをかいて打澄まして居ると、廻風が人もなき高閣を

吹き度つて、まことに涼しい。元來、秋は深夜の頃に成つてから来るもので、その涼颯の發する流るる如き聲は、林壑の間に滿ちて居る。はじめて鳴る時は、高く烈しく澎湃たる如く聞こえるが、しばらくして、それが止むと、細く淋しい聲が、相繼いで聞こえ、月下には、鼻の如き夜出る鳥が飛んで翻り、窓間には、枯葉がひらひらと舞ひ落ちて来る。上人は、静寂を旨とする入定を習ひ、人籟・地籟・天籟の辨に就いては、古しへの南郭子綦も、其處退けといふ有様。上人に取つては、騒がしいも、静かなのも、兩つながら耳に聞こえず、仰いで天の河の燦爛として大空に横はるを眺めて居るのみである。

【餘論】起四句は、軒の位置から秋を引き出し、初鳴の四句は、即ち秋聲、上人の四句は、もとより悟り澄ましたる身、喧寂兩つながら相關せず、更に心を大處に遊ばせるといふ趣を言つたので、つまり上人の人物を影寫したのである。

與内兄周思齊思義同過僧浩西齋夜酌

内兄周思齊・思義と同じく僧浩の西齋を過ぎて夜酌す

雨過月在花 疏鐘閉禪舍 雨過ぎて、月は花に在り、疏鐘、禪舍を閉づ。

幽僧與逸人 對酌明燈下

幽僧と逸人と、對酌す明燈の下。

園樹稍辭春 池蛙正鳴夜

園樹、稍く春を辭し、池蛙、正に夜に鳴く。

嘉會莫蹉跎 流年易傾謝

嘉會、蹉跎する莫れ、流年、傾謝し易し。

【字解】「一」疏鐘、問道に聞こゆる鐘。「二」精神春、花が次第に落ちる。「三」蹉跎、興を衰にせずして終る。「四」流年、歲月の推移を流水に比して云ふ。

【題義】内兄は妻の兄、思齊・思義は其名、即ち周仲達の倅どもである。甫里志に「周仲達は、青邱の鉅室、隱居して仕へず。高太史は、その館甥たり、因つて、之に依つて以て居る。子、思齊・思義、思恭・思敬・思忠、ともに啓の贈詩あり」と記してある。僧浩は、浩講、本名を宗源といふ坊さんで、王行の送浩師住報恩寺序に「予が友浩講師宗源、かつて、龍河全室泐禪師の方丈に至る、禮遇殊に厚し。全室、將に之に高職を昇へむとす。師、遜避して以て歸る。洪武庚午の夏、衆、師を推して報恩に主席たらしめ、師を迎へて山に入り、祝釐して道を講ず」とある。この詩は、宗源が、初め蘇州に居た時、作者が、その妻の兄思齊・思義と共に、これを訪ひ、西齋に於て夜飲を催し、その席上に於て作つたのである。

【詩意】一雨、すでに過ぎて、月は花の梢に上り、間遠に聞こゆる鐘の聲は、日の暮るるを報じて、禪舍の戸を閉ちて仕舞つた。そこで、幽僧と逸人とは、心しづかに、明燈の下に於て酒を酌み交はし

て居る。園中の木木は、次第に花散りなむとし、池の蛙は、夜に入つて鳴く聲が騒がしい。折角の此雅會に於ては、遠慮せず十分興を縦にするが善いので、流るるが如き歲月は、まことに過ぎ易いものである。

【餘論】前半は夜酌、後半は春の將に盡きむとするを眼前に見、歲月の移り易きを言うて、嘉會の蹉跎たらざらむことを囑望したのである。

萱草

萱草

不見堂上親。空樹堂下草。

堂上の親を見ず、空しく堂下の草を樹う。

夏來風雨繁。離披數叢老。

夏來つて風雨繁く、離披として數叢老いたり。

日暮欲忘憂。牽芳轉傷抱。

日暮、憂を忘れむと欲す、芳を牽げて、轉た抱を傷ましむ。

【字解】「一」離披、ちりぢりに成る貌。「二」牽芳、その句やかなる葉を摘む。「三」傷抱、抱は體抱、中心を痛ましめる。

【題義】萱草は忘れ草、詩經に願得三諷草、言樹之背とあつて、背は北堂。この詩は、即ち萱草を詠じたのである。

【詩意】堂上に在ます我が親を見るに由なく、むなしく、堂下に忘れ草を植ゑた。その忘れ草も、夏

以來、風雨しばしば至るに因つて、もと幾株かあつたのが、皆散散に成り果てて仕舞つた。かくて、日暮に憂を忘れむとし、その名に因みて、わづかに残れる句やかなる葉を摘んだが、愈よ中心を傷ましめた。

【餘論】青邱は、幼にして估特を喪つたから、題詠として拈出して、自然これを思ふ意を併せて述べたのであらう。但し何分淺近で、新警の趣は認められない。

月林清影

月林清影

疏林逗明月。散亂成清影。

疏林、明月を逗らし、散亂して清影を成す。

流藻舞波寒。驚蚪翔壑冷。

流藻、波に舞うて寒く、驚蚪、壑に翔つて冷かなり。

雲來稍欲翳。風動紛難整。

雲來れば稍や翳さむと欲す、風動けば紛として整ひ難し。

圓魄忽西傾。愁看墮空境。

圓魄、忽ち西に傾き、愁へ看る、空境に墮つるを。

【字解】「一」逗、逗留といふ意味が普通の構であるが、このは、逗留、即ち漏れるといふ義。「二」流藻、東坡の承天夜游記に「庭下、積水空明の如し、水中藻荇、交相攪はるは、蓋し竹柏の影なり」とある。「三」驚蚪、蚪は虬、即ち龍の屬。「四」欲翳、かざす、遮る。「五」圓魄、月を指す。

【題義】月林清影は、杜甫の龍門寺の詩に在る月林散清影の句に取り、この四字を敷張して、一首の詩としたのである。

【詩意】疏林は明月を漏らし、その清影は、散亂して地上に鋪き、たとへば、流れ藻が寒げに波に舞ふが如く、驚いたる虻が冷かに谷の中を駆け廻る様である。もし夫れ、雲が来れば、月光を翳さむとし、風が一たび動くと、林影紛紛として整へ難く覺ゆる。やがて、月が西に傾くと、すべては虚無の世界に歸して、何の影も無い様に成つて仕舞ふ。

【餘論】中間四句は、月林の清影を形容し、一は常態、一は變態、これを併せて略ぼ遺憾なきを得るのである。その前後、各二句は、その清影の起滅を敘したのである。

春草堂并引

春草堂 并に引

余既爲彦兼記春草堂。士大夫多賦詩歌之。出以示余。因復賦五言一首。

【訓讀】余、すでに彦兼の爲に春草堂を記す。士大夫、多く詩を賦して之を歌ふ。出して以て、余に示す、因つて、復た五言一首を賦す。

靡靡堂廡草、託根近華楹。

靡靡たり堂廡の草、根を託して華楹に近し。

膏露既灌芳、惠風亦揚馨。

膏露、すでに芳を灌し、惠風、亦た馨を揚ぐ。

匪蒙陽和力、孰使微物榮。

陽和の力を蒙るに匪ずんば、孰れか微物をして榮えしめむ。

中天駛景流、青節坐易盈。

中天、駛景流れ、青節、坐に盈ち易し。[とを惜まむや。

但憂德澤遠、豈惜憔悴并。

但だ德澤の遠はむことを憂ふ、豈に憔悴に并せらるること願はくは、ここに相蔓結し、彼の春逝の程を遮らむ。

願言相蔓結、遮彼春逝程。

願言はくは、ここに相蔓結し、彼の春逝の程を遮らむ。

寸心雖難報、拔去還當生。

寸心、報じ難しと雖も、拔き去らば、還た當に生ずべし。

【字解】(一) 堂廡、廡は門の兩傍に在る屋舎であるが、ここでは、奥まりたる處の建物と見れば善からう。(二) 華楹、見事なる華木。(三) 膏露、土を潤す露。(四) 惠風、春風。(五) 陽和、春氣。(六) 駛景、日の運行を云ふ。(七) 青節、春の期節。(八) 德澤、春の恵。(九) 春逝程、春の歸り去る道筋。(一〇) 寸心、雖難報、孟郊の詩に誰言寸草心、報得三春暉とあるに本づく。

【題義】太倉府志に「春草堂は、陳寶生が節母を奉ずるの所、高啓、記を撰す」とある。すると、青邱の小序に彦兼とあるのは、寶生の字と見える。そして、春草堂記が鳧藻集に見えぬ處から考へると、早く散佚したのであらう。小引の意味は「予、すでに、陳彦兼の爲に春草堂の記文を作つて遣つた處が、士大夫輩は、詩を賦して之を歌ふものが多かつた。それを寶生が盡く出して予に見せたから、

予は、因つて、五言短古一首を賦し、改めて寶生に贈つたといふのである。

【詩意】奥まりたる堂宇の邊に生ずる草は、立派な垂木の屋舎に近く其根を託し、土を溼す露に灌せられ、春風に吹き育てられ、花を開いて、馨香を放つて居る。苟くも、陽和の春氣の力を蒙るに非ざれば、誰か、この微物をして、かくばかり榮えしめやうか。中天を度る太陽は、さながら、流るるが如く、春てふ期節も、盈ち易くして、程なく盡きはてて仕舞ふ。草の身になれば、唯だ春の徳澤に違はむことを憂ふるのみで、やがて、憔悴に併されて、枯れて仕舞ふことなどは、何とも思はない。願はくは、ここに蔓を延ばして結び合ひ、それで彼の行く春の路を遮つて、春を引き止めたいと思ふばかり。草の寸心は、到底春の恵に報いることは出来ないが、抜いても抜いても、すぐに復た生えて、いつまでも、春の名残を留めて居る處が、洵にしほらしい。

【餘論】全篇が比體で、草は陳彦兼、春は節母に擬し、陳生の今日あるは、全く節母の御蔭、陳生は自分の年の寄ることは、すこしも厭はず、唯だ節母の命長かれかしと祈つて居る。陳生は、節母の恩に十分報ゆることは出来ぬが、如何なる場合に臨んでも、その教に背かぬ覺悟で居ると、かういふのが、裏面に於て摸索し得べき眞意義である。更に作法を見ると、起六句は、草が春の恵を受けることを言ひ、中天の四句は、春盡くる時あるも、草は其恵を忘れぬことを敘し、願言の四句は、草としての希望と覺悟とを述べたのである。

次韻内弟周思敬秋夜同飲白蓮寺池上

内弟周思敬の秋夜同じく白蓮寺の池上に飲するに次韻す

月出露已白。荷花香滿池。月は出でて、露、すでに白く、荷花、香、池に滿つ。

高僧愛清夜。留客坐題詩。高僧、清夜を愛し、客を留めて、坐して詩を題せしむ。

竹動鳥驚夢。草涼蟲語悲。竹は動いて、鳥、夢を驚かし、草は涼しくして、蟲語悲む。

閒齋一瓢酒。應不負幽期。閒齋一瓢の酒、應に幽期に負かざるべし。

【字解】【一】清夜、涼しき夏の夜。【二】閒齋、靜かなる僧房。【三】幽期、物しづかなる會合。

【題義】前に引いた甫里志に見えて居た通り、思敬は周仲達の俸の一人で、内弟とある以上は、青邱の妻の弟である。前に見えた思齊・思義の二人は、妻の兄であるが、この間に、もう一人、思恭といふのがあつて、これは、兄か、弟か、一寸分からねぬ。白蓮寺は、姑蘇志に「白蓮講寺は、長洲縣の二十都甫里に在り、即ち陸龜蒙の別業にして、祠堂あり」と書いてある。この詩は、ある年の夏夜、思敬と共に白蓮寺に至り、池上に於て夜飲を催せし席上、思敬が先づ一首を拈出せしに因り、それに次韻したのである。

【詩意】月は、高くさし上り、露の珠は、白く輝いて見え、頃しも、蓮の花盛りで、その香氣は、池

に満ちて居る。ここに、高僧は、涼しき夏の夜の景色を愛で、わざと客を引き止めて、詩を作らしめた。兎角する内に、竹の葉がざわざわと動けば、宿せし鳥は夢を驚かし、草は露にぬれて涼しく、その間にすだく蟲の聲も、悲しげに聞こえる。物静かなる僧房に於て、一瓢の酒を傾くれば、まことに清幽なる此會合に負かない。

【餘論】起句五字は、皆仄字であるが、露已以外の字は入聲であるから、自然合拍、三四兩句は流水對とも見られるし、五六は對仗精當であり、その他、皆聲律が諧合して居るから、これは、五古よりも、むしろ五律とした方が適當であるし、その作法までが、自然さう成つて居る。

聞鐘

鐘を聞く

迢迢煙際發。隱隱巖中應。

迢迢として煙際に發し、隱隱として巖中に應ず。

初來覺寺遙。乍歇看山暝。

初め來つて寺の遙かなるを覺え、乍ち歇んで山の暝する。

惆悵未眠人。空齋幾回聽。

惆悵、未だ眠らざるの人、空齋、幾回か聽く。「を看る。」

【字解】「一」迢迢、遙かなる貌。「二」隱隱、煙たなびく其際。「三」隱隱、こもつて發せむ貌。「四」應、反響する。「五」空齋、他に人なき齋室。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】鐘の聲たるや、迢迢として煙たなびく其際に起り、隱隱として巖谷の中に反響する。はじめ其聲が耳邊に來た時には、寺の遠きを覺えたが、忽ち歇んで聞こえぬ様になると、山も暗くたそがれて來た。憐むべきは、惆悵として寐つかれぬ人で、空齋の中に獨坐し、この聲を幾度も聞いたことであらう。

【餘論】更に數句を加へたならば、或は物に成つたかも知れぬが、これだけでは、いささか簡に失した嫌がある。

詠雨酬張進士羽見寄

雨を詠じて、張進士羽の寄せらるるに酬ゆ

珠碎復絲輕。颺廻乍拂楹。

珠碎けて、復た絲輕く、颺廻つて、乍ち楹を拂ふ。

望中來曉峽。愁裏度秋城。

望中、曉峽より來り、愁裏、秋城を度る。

莎溼蛩應冷。荷響鷺還驚。

莎、溼うて、蛩、應に冷かなるべし、荷、響いて、鷺、

聽絃知瑟潤。臥簟覺幃清。

絃を聽いて瑟の潤ふを知り、簟に臥して幃の清きを覺ゆ。

一覽停雲句。離抱轉難平。

一たび停雲の句を覽れば、離抱、轉た平かなり難し。

【字解】【一】莎溼。莎は溼地に生ずる雜草。【二】停雲。陶潛の集に停雲と題する四言の詩があつて、その序に「停雲は友を懷ふなり」とある。【三】離抱。離居の懷抱。

【題義】これは、雨を詠じて、進士張羽の詩を寄せたるに酬いたのである。張羽は、前に春日懷二十友の詩に見えて居た當時の詩人で、且つ作者の熟友である。

【詩意】雨の降り注ぐや、珠となつて碎けるかと思へば、又絲の如く軽く、そして、廻風に吹かれて、忽ち楫を拂ふことがある。眺めやれば、曉早く峡口の方より來り、秋の愁未だ盡きざる間に、城中に入つた。莎草溼へば、そこにすだく虫聲も、冷かなるべく、蓮の葉を打つて響けば、鷺も定めし驚くであらう。琴瑟の絃を弾するを聞けば、どうやら、溼つて居て、音も冴えないが、竹むしろに横臥して居ると、涼氣が戸ばりに透つた様に覺える。君から寄せられた懷友の詩を見ると、ひとり離居せる我が懷抱は、愈よ平かなり難く、まことに、岑寂の感に堪へられない。

【餘論】起四句は、雨その物を詠じ、莎溼の四句は、雨中の景物を點出し、語語新警。一覽の二句は、張羽に酬いたので、これを得て、はじめに、題義を完うしたのである。

徐隱君陋居

徐隱君の陋居

修途息往駕。環堵老所依。修途、往駕を息ひ、環堵、老いて依るところ。

蕭條窮巷中。故人亦來稀。蕭條たる窮巷の中、故人、亦た來ること稀なり。

交交風雨侵。翳翳蓬藿圍。交交として風雨侵し、翳翳として蓬藿圍む。

局促不苟厭。暫出復來歸。局促、苟くも厭はず、暫く出でて復た來り歸る。

名都列飛甍。煥燿朝日輝。名都、飛甍を列し、煥燿として朝日輝く。

爽塏豈不慕。終憂蹈危機。爽塏、豈に慕はざらむや、終に危機を蹈むを憂ふ。

心舒體自適。道在願無違。心舒びて、體、自ら適し、道在り、願、違ふなし。

茲焉樂飲水。回賢良可希。ここに樂んで水を飲む、回賢、良に希ふべし。

【字解】【一】修途。長い途。【二】息。やすめる、とどめる。【三】往駕。往く車。【四】環堵。堵は牆、牆が環らした小室。家語に「備に一畝の宮、環堵の室あり」と見えて居る。【五】交交。かはるがはる。【六】翳翳。重なり合ふ。【七】蓬藿。よもぎあかざの類。【八】局促。うづくまる、かがまる。【九】名都。名高き都、蘇州府城を指したのであらう。【一〇】飛甍。甍は棟瓦、高い處に在るから飛甍といつたのであらう。【一一】煥燿。きらきらしい貌。【一二】爽塏。小高い處、左傳に「景公、晏子の宅を更めむと欲す、請うて爽塏の者に更む」とある。【一三】飲水。論語に「飲を曲げて水を飲む、樂、その中に在り」と見ゆ。【一四】回賢。論語に孔子が顔回を賞美した語を記して「賢なる顔回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其壘に勝へず、回や其樂を改めず、賢なるかな回や」とある。

【題義】徐隱君は、多分、徐賁であらう。陋居は、侘び住居。これは、隱君の宅に寄題して、聊か慰

藉の意を寓したのである。

【詩意】徐君は、長い旅路を経て、此地に著すると、その車を停め、環堵の小室を以て、その老身を依らすべきところとなし、兎に角、卜居せられたが、何分にも、淋しき裏小路の中に在るから、友人でも、尋ねて来るものは、極めて稀である。折ふし、風雨、かはるがはる来り襲ひ、よもぎあかさは、重なり合つて、その家を圍んで居る。しかし、徐君は、その中に局促しつつ、格別いやと思はず、しばらく外出しても、又ぞろ、此に歸つて来る。世にも名高き蘇州府城の中に於て、大厦高樓の棟瓦は、飛揚するが如き勢を爲し、きらきらしく朝日に輝いて見える。小高き岡に倚つた此様な家は、暮はしくないでもないが、徐君は、そんな處に入つて、危い破目に罹らむことを恐れて居る。それよりも、心舒びやかなれば、身體まで、優游自適し、道の在るところは、わが願違ふことなく、ここに居て、水を飲み、以て樂となし、古しへの顔回の賢を真似たいと思つて居る處は、流石に偉い。

【餘論】起四句は、隱君の卜居、交交風雨侵の四句は、その陋居に安んじて居ること。名都列三飛堯の四句は、世の常の榮華を望まざること。結四句は、その人の操守を敘し、語語著實、まことに阿堵傳神の妙がある。

西園曉霽

西園曉霽

積雨淹夏半。始晴園景饒。

積雨、夏半に淹し、始めて晴れて、園景饒し。

高林上初日。遠水泛廻颺。

高林、初日を上り、遠水、廻颺を泛ぶ。

餘情萱際蝶。新響樹間蛸。

餘情、萱際の蝶、新響、樹間の蛸。

詎必勞觴詠。煩憂坐已銷。

詎ぞ必ずしも觴詠を勞せむ、煩憂、坐に已に銷ゆ。

【字解】【一】淹、滯る。【二】初日、朝日。【三】萱際、萱は忘れ草。【四】觴詠、王羲之の蘭亭序に一觴一詠とある、酒を酌みつつ詩を作る。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】長雨は、夏の半まで滯はつて居たが、今日しも、やつと晴れて、園中の佳景は、頗る多い。朝日は、高林の上にさしかかり、廻風は、遠水を拂つて、泛ぶが如く、波紋を残して居る。忘れ草に止まれる蝶は、春の名残を存し、木の間に鳴く蛸は、全く耳新しい聲である。かういふ景色を見て居れば、格別、一觴一詠の必要もないので、心中の煩憂は、いつしか、既に消えて仕舞つた。

【餘論】起二句は總提、そして、園景饒の三字から、中間の四句が出て来るので、七八兩句は收束、全體から見ても、聲調盡く諧和せざれども、兎に角、五律に近似したものである。

題畫鷹得嘯字

畫鷹に題す、嘯の字を得たり

高風動古壁。竦立見蒼鷁。

高風、古壁を動かし、竦立、蒼鷁を見る。

軒然欲飛揚。嗟此粉墨妙。

軒然として飛揚せむと欲す、嗟す、この粉墨の妙。

秋筋束老骨。天寒勢逾矯。

秋筋、老骨を束ね、天寒くして、勢、逾よ矯。

腦枯草中兔。氣盡檉上驪。

腦は枯る草中の兔、氣は盡く檉上の驪。

健鶴雖百餘。凡材豈同調。

健鶴、百餘と雖も、凡材、豈に同調ならむや。

乾坤正肅殺。怒氣號萬竅。

乾坤、正に肅殺、怒氣、萬竅を號ばしむ。

大野開平蕪。悲臺落殘照。

大野、平蕪を開き、悲臺、殘照落つ。

荒城有妖狐。夜作猛虎嘯。

荒城に妖狐あり、夜、猛虎の嘯を作す。

爲君試一擊。壯士慙勇剽。

君の爲に、試に一擊、壯士も勇剽を慙づ。

安能飽拳肉。側翅隨年少。

安んぞ能く拳肉に飽き、翅を側て、年少に隨はむや。

【字解】【一】高風、高空を吹く風。【二】竦立、すくんで立つ。【三】蒼鷁、鷁は鷹、即ち蒼鷹といふに同じ。【四】軒然、軒昂の貌。【五】粉墨、胡粉と墨。【六】秋筋、秋に成つて、筋までが自然引き締まる。【七】腦枯、腦味噌が干からびる。【八】健鶴、鷹に笑はれて居る駿馬。【九】悲臺、鶴は飛鷹。【一〇】萬竅、竅は孔穴、莊子の齊物論に「作れば、萬竅怒鳴す」とある。

【二】悲臺、もとより固有名詞ではない。悲しきまでに荒廢した高臺といふ義であらう。【三】勇剽、剽は剽悍。【四】拳肉、拳ほどなる一塊の肉、その少量なるをいふ。【五】側翅、翅をそば立てる、得意の貌。

【題義】これは、鷹の畫に題したので、席上、何かの句を分ち、嘯の字を得て韻としたのである。

【詩意】高空を吹き渡る烈風は、彷彿として、古壁を動かし、と見れば、一羽の蒼鷹が凝然として、すくんで立つて居るが、氣概軒昂、忽ち飛揚せむばかり。これは粉墨を以て畫いたものであるが、その妙、まことに感嘆すべき程である。なほ篇と眺めると、涼氣の爲に、筋も引き締まつて、老骨を束ね上げ、天寒き時など、その勢は、逾よ矯矯として居る。これを見れば、草間の兎は、腦味噌が干からびて仕舞ふし、鷹の中なる駿馬も、全く壓倒されて氣抜けがする位。かの龍鷹の如きものは、たとひ、その數が百餘あつたところで、その材器の平凡なる、到底、同調でないから、決して匹敵することは出来ない。折から秋で、乾坤正に肅殺を事とするに當り、鷹の怒氣は、千萬個の孔穴をして自然聲を發せしむべく、大野は開いて、平蕪遠く連り、荒廢したる古臺の彼方には、名殘の入口が落ちかかつて居る。この時こそ、鷹は、その技倆を縦にし、天晴、功勳を顯はすべきである。おもへば、荒城の中には妖狐が居て、夜になると、嘯いて猛虎の如き聲をするが、願はくは、この鷹を借ひ來つて、君の爲に、一擊して之を斃し、壯士をして、その勇銳慄慄、はるかに相及ばざるを愧づる様にした。鷹の本質は、かくの如く、いかで、拳ほどなる少許の肉に飽き、翅を側て、さも得

意らしく、年少輩に従はうか、その志は、もつと遠大である。

【餘論】この詩は、畫鷹に題すといふものの、實は之を借りて自ら寄託し、いささか、その英武の材略を矜つたものと思はれる。起四句は、畫鷹を斃し、即ち題意の正面、秋筋東三老骨より悲臺落三殘照に至る十句は、鷹の技倆を寫し、荒城有三妖狐六句は、獨り區區たる兎や小鳥を搏つのみならず、鷹には、もつと偉いことが出来るといひ、一步を拓開して收束としたのである。

哭王隅

王隅を哭す

車行一輪摧。鳥奮一翼傷。

車行いて一輪摧け、鳥奮つて一翼傷つく。

人生失輔友。誰當共提將。

人生、輔友を失はば、誰か當に共に提將すべき。

相逢豈無人。不獲如子良。

相逢ふ、豈に人なからむや、子の如きの良を獲ず。

朝游羣彥林。夕棄萬鬼鄉。

朝に羣彥の林に遊び、夕に萬鬼の郷に棄てらる。

春風吹南原。百草萎以長。

春風、南原を吹き、百草、萎、以て長し。

呼君不歸魂。割我欲斷腸。

君が歸らざるの魂を呼び、わが斷たむと欲するの腸を割く。

豈不悟生滅。情至諒難忘。

豈に生滅を悟らざらむや、情、至つて、諒に忘れ難し。

【字解】【一】鳥奮、奮は奮飛。【二】輔友、補助たるべき親友。【三】提將、將に率ゆる、提攜同行。

【題義】王隅、字は仲廉。鳧藻集に王仲廉哀辭の一篇があつて、その序に「仲廉、少にして春秋經に習ひ、進士に擧げられむと欲す。その氣を負ひ、肯て尺度に就かず、將に棄て去つて、北、燕趙の間に遊ばむとす。兵變に會し、且つ疾に嬰り、遂に家居して田業を治め、復た仕事を言はず、感ずるところあれば、發して歌詩となる。辭抗にして音激、讀者その志あつて、遂に泯泯たる者に甘んずるに非ざるを知る。性簡曠にして矯飾なし、人と交るに疏密を爲し易からず。余、郷里に居り、はじめ、これを識り、甚だ其賢を覺えず、後出でて時輩に接し、中險にして外夷、朝に合し夕に叛するもの、勝てて數ふべからざるを見る。而して、仲廉、泊然として、十載、一日の如し。然る後、深く其賢知、世の多く有らざるを嘆するなり。至正二十六年六月三日、仲廉、舊疾作り、家に卒す。壽止だ三十五」とあつて、その人物の一斑も分かる。この詩は、即ち同時の作である。

【詩意】車の將に行かむとするに當つて、偶ま一輪摧け、鳥の將に奮飛せむとするに際して、どうしたものが、一翼が傷ついて居たといへば、それこそ大變。人生、輔佐たるべき親友を失へば、矢張、これと同じく、今後、誰と提攜同行すべきか。もとより、相逢ふ人は、いくらもあるが、君の如き良き人は、到底、求められない。君は、朝に羣英の集まる處に遊んで、議論を上下して居たのに、料らざりき、夕には、萬鬼郷を爲せる墓地に葬られむとは。折から、春風は、城南の野邊を吹きわたり、草

どもは、妻妾として伸びて仕舞つた。すでに、その墓を弔ひ、因つて、歸り來ぬ君の魂を呼び回さうとすると、寸断しかかつた我が腸を忽ち引き割く様な想がする。われとても、浮世に於ける生滅の道理を悟らぬでもないが、情の至れるところ、君を思うて、長しへに、忘れることが出来ない。
【餘論】起四句は、王陽の死、次の四句は、王陽の人物、春風の六句は、即ち憑弔の意を述べたのである。

池上晚憩

池上の晚憩

春晚思悠悠。閣前池水流。

春晚思悠悠たり、閣前、池水流る。

新蒲風葉響。如對野塘秋。

新蒲、風葉響き、野塘の秋に對するが如し。

野塘前歲路。已隔歸舟度。

野塘、前歲の路、すでに歸舟の度を隔つ。

鳥下獨回頭。青山杳然暮。

鳥下つて、獨り頭を回らす、青山、杳然として暮る。

【字解】(一) 風葉、風に吹かる葉。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】閣前に池があつて、水が其處を流れて通る様になつて居る。春の暮、池上に少憩すれば、思

悠悠として盡きない。汀に生えたる蒲の葉は、風に吹かれて颯颯と響き、さながら、野塘の秋景色を見る様である。野塘といへば、前年通つた其塘上の路は、遠く歸舟を隔てて、何時又往つて見られるか分からぬ。晚禽の地に下る時、ひとり頭を回らして、その方を眺めると、青山、杳然として暮れかかり、愁思の逾よ蒼茫たるを覺ゆるのみである。

【餘論】前半は池上、後半は感想、如對野塘秋の一句が其關鍵となつて居る。

醉歸夜醒聞雨

酔うて歸り、夜醒めて雨を聞く

覺來聞雨聲。燈輝耿殘夜。

覺め來つて雨聲を聞く、燈輝いて殘夜耿たり。

窓間有危葉。暗助瀟瀟下。

窓間に危葉あり、暗に瀟瀟を助けて下る。

不記醉歸時。寢齋如客舍。

記せず醉歸の時、寢齋、客舍の如し。

【字解】(一) 寢齋、寢て居る小室。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】夜半すぎて後、夢醒めて雨聲を聞いたが、折しも、殘燈耿耿として、枕頭に輝いて居た。窓間には、枯れた葉があつて、雨聲の瀟瀟たるを助けて、やがて、ばらばらと飛び散つた。今宵は、前

後不覺に酔ひつぶれ、何時歸つたか知らず、自分の書齋に寝ては居るが、凡で宿屋にでも泊つて居る様な氣がした。

【餘論】 結末二句は一寸面白いが、全體に於ては、平淺を免れぬものである。

夏夜起行西園

夏夜、起つて西園を行く

夜熱不能寐。起步中庭前。

夜熱、寐ぬる能はず、起つて歩す、中庭の前。

舉頭望高旻。離離衆星躔。

頭を擧げて高旻を望めば、離離たり衆星の躔。

欲推理亂象。天道幽且玄。

理亂の象を推さむと欲するも、天道、幽にして且つ玄。

長歌來涼颺。驚鳥北林顛。

長歌、涼颺を來たし、驚鳥、北林の顛。

此時層城閉。悄悄萬室眠。

この時、層城閉ぢ、悄悄として萬室眠る。

誰復相與娛。淡月孤光懸。

誰か復た相與に娛まむ、淡月、孤光懸る。

【字解】 一、高旻、高い空。二、離離、ここの離は、はなれて居ることではなく、反對に、聚まること、紛糾すること。支那の文字には、一つで反對の二義を兼ねて居るのが幾らもある。三、衆星、離は星の運行する道、即ち軌道。四、理亂、治亂に同じ。五、層城、樓などがあつて、極めて高い城門。六、萬室、萬家、萬月に同じ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 夜むし暑くて、何分眠りつかぬ儘、起つて中庭の前を歩き、首を擧げて、高い天上を眺めると、衆星の軌道が紛糾して入り亂れて居る。ここに、天象を見て、刻下治亂の歸著するところを推究しやうとしたが、天道は幽遠に且つ玄妙であつて、一寸すぐの譯にも行かぬ。そこで、長歌すれば、涼颺遠くより來り、北林の上では、鳥が驚いて啼いて居る。今しも、眞夜中で、城門も閉ぢ、萬家、皆ひっそりとして眠つて居る。かくて、共に相娛む人もなく、唯だ澹月が孤光を飛ばして、中天に挂つて居るのみである。

【餘論】 起四句は題意の正面、次の四句は感慨を發し、結四句は、この時、人の伴をなすなく、ひとり蕭寂の趣を領したことを述べたのである。

師子林池上觀魚

師子林の池上に魚を觀る

穿蒲尾獨掉。唼養口羣仰。

蒲を穿つて、尾、ひとり掉ひ、養を唼して、口、羣がり仰ぐ。

波平沒見痕。池靜跳聞響。

波平かに、沒して痕を見、池靜に、跳つて響を聞く。

漁罟已免捕。僧盂每分養。

漁罟、すでに捕ふるを免れ、僧盂、毎に養を分つ。

落日意無驚。識我臨流賞。

落日、意、驚くなく、わが臨流の賞を識る。

【字解】【一】映、すする、食ふ。【二】没、魚の深く水中に沈むこと。【三】漁、魚網。【四】曾、孟は高つき、食物を上に乗せる器。

【題義】獅子林は、前にも見え、當時蘇州に於て有名なる禪林であつた。この詩は、即ち其池上に於て魚を観て作つたのである。

【詩意】魚の游行するや、密生する蒲の間を通り抜けては、尾だけ掉ひ動かさず、浮草を吸りては、羣がつて、ばくばく口を開いて居る。波平かなる時は、水中に沈んでも其痕明かに知られ、池静なる時は、水面に跳る響も、はつきり聞こえる。ここは、御寺の放生池であるから、網で捕へられることもなく、おまけに、坊さんが毎度高つきに残れる食物を分けて呉れる。夕日春く時、すこしも驚く氣はひだになきは、わが流に臨んで、唯だ賞観を爲すのみなることを知つて居るものと見える。

和張羽懷吳興舊遊之作效其體

張羽が吳興の舊遊を懐ふの作に和し、其體に效ふ

城貫綠川長。朱閣映飛梁。

城は綠川に貫かれて長く、朱閣、飛梁に映す。

驚嬌山唱度。蓮豔水嬉張。

驚は嬌にして、山唱度り、蓮は豔にして、水嬉張る。

花童擲翠管。桑婦挈銀筐。

花童、翠管を擲し、桑婦、銀筐を挈ふ。

箬溪酒脂碧。願渚茗旗香。

箬溪、酒脂碧に、願渚、茗旗香し。

擇勝事未厭。驚亂意俄傷。

勝を擇んで、事、未だ厭かず、亂を驚いて、意、俄に傷む。

回看舊遊地。秋草變淒涼。

回看す、舊遊の地、秋草、淒涼に變ず。

【字解】【一】綠川、一統志に「湖州の霅溪は、府治の南に在り、一名霅川。若溪、前溪、餘不溪の諸水を合す」とある。【二】飛梁、橋をいふ、後漢書梁冀傳に「飛梁石礎、水道に設跨す」とある。【三】山唱、山歌に同じ。【四】水嬉、今の端艇競漕の如きもの。

【五】花童、花に戯る童子。【六】擲翠管、笛を口にあてる。【七】桑婦、桑を摘む女。【八】銀筐、銀製の箱。【九】箬溪、一統志に「長興縣西に在り、溪皆箭筈を生ず。南岸を上着といひ、北岸を下着といふ。土人、下着の水を取り、酒を醸して醇美を極む」とある。【一〇】酒脂、前にも見ゆ。酒の純醜にして油の如きなをいふ。【一一】願渚、一統志に「長興縣の西北に在り、旁に二山あつて相對し、明月峽と號す、唐、貢茶院を此に置く」とある。【一二】茗旗、茶を賣る店の旗。

【題義】この詩は、頃ろ張羽が吳興の舊遊を懐ふと題せる詩を作つたから、それに和し、且つ併せてその體に倣つたのである。

【詩意】霅溪と稱する綠溶溶たる川は、長く流れて城中を貫き、岸上の朱閣は、橋と相映じて居る。

春は、鶯の聲、なまめかしくして、山歌を譜し、夏は、蓮の花の咲き匂ふ間に於て、競漕が行はれる。花に戯るる童兒は、笛を口にあて、桑を採る女は、銀の箱を攜へて居る。碧溪には、美酒を産し、その色碧にして味よく、願渚は茶の名所で、到る處、茶を賣る店の旗まで香しく覺える。この地に在つて、名勝を擇んで探討するのは、まことに面白く、決して厭きはた譯でもないが、戦亂俄に起りて、傷心の極、中止して仕舞つたといふ話。今しも、舊游の地を顧みれば、むかしの繁華の跡は、凄涼となり、唯だ秋草が西風に亂れて居るのみである。

【餘論】前八句は、吳興の勝景を列敘し、對句で之を行つた爲に、その堆垛を覺えず、これも、確に一段である。後四句は、追憶の餘、滄桑滿目、俯仰感を爲し易きことを述べたのである。

送沈徵士鉉歸海上

沈徵士鉉の海上に歸るを送る

我友張國士、短若婁君卿。我が友張國士、短は婁君卿の若し。
 家無一金産、所結皆豪英。家に一金の産なきも、結ぶところは皆豪英。
 去年東方來、向我道爾名。去年、東方より來り、我に向つて爾の名を道ふ。
 相逢眞甚都、座客爲之傾。相逢ふ、眞に甚だ都、座客、これが爲に傾く。

高標華月出、雄辯流雲崩。

高標、華月出で、雄辯、流雲崩る。

時方尙權謀、處士皆振纓。時、方に權謀を尙び、處士、皆纓を振ふ。
 諸侯致幣聘、公子將車迎。諸侯、幣を致して聘し、公子、車を將て迎ふ。
 爾獨念滄洲、扁舟問歸程。爾、ひとり滄洲を念ひ、扁舟、歸程を問ふ。
 翩翩冥飛鴻、影過海上城。翩翩たる冥飛の鴻、影は過ぐ海上の城。
 儻見魯連子、殷勤煩寄聲。もし魯連子を見れば、殷勤に寄聲を煩はさむ。

【字解】【一】張國士、國士は一國知名の士の號、誰だか善くは分からぬが、或は前首に見えた羽羽かも知れぬ。【二】短、身の丈の低いこと。【三】婁君卿、漢書游俠傳に「樓護、字は君卿、人と爲り短小、辯論談論、常に名節に依り、これを聽くもの、皆嫌す。この時、王氏方に盛にして、賓客門に滿つ。護、谷水と俱に五侯の上客となる」とある。【四】所結、交際するところの人。【五】甚都、都は都雅、みやびやかなること、野鄙でないこと。【六】爲之傾、傾は心を傾ける、傾倒、傾慕。【七】高標、その姿を披いた立派な風采。【八】華月、照り輝く月、章應物の詩に「西晉得三時、華月共淹留」とある。【九】流雲崩、酒酒として盡さざるを云ふ。陸機の文賦に「思風發于扇、言泉流于唇、齒」とある。【一〇】振纓、冠の紐を整へる、出仕の準備をする。沈炯の文に「明徳世産、振纓王室」とある。【一一】公子將車迎、魏の信陵君が自ら車を以て、夷門の監者たりし侯嬴を迎へたこと、前に卷二、大梁行の中に詳しく述べて置いた。【一二】滄洲、東海中の仙境。【一三】冥飛鴻、天上を飛び度る雁。【一四】魯連子、即ち魯仲連、その傳は、史記に見え、慷慨傲岸を以て稱せられ、かつて、平原君に説いて、もし、秦を尊んで帝となさば、連、東海に蹈んで死せむのみときへられた。【一五】寄聲、傳聲、傳言。

【題義】沈鉉は、列朝詩集に「字は文學、雲間の人、世、郊外に居り、室を築いて野亭といふ。楊廉夫、記あり、高啓、贈詩あり」と記してある。又微士といふからには、かつて朝廷から徴し出されたこともあつたと見える。この詩は、沈鉉が海邊の故郷に歸るのを送つたので、無論、時は元末であらう。

【詩意】わが友にして國士の稱ある張氏は、身の丈低きこと、古しへの婁君卿の如く、そして、家には一金の財産とても無いが、交を結んだものは、皆一代の英豪であつた。その張氏が、去年、東方より來つて、話の序に、君の姓名を聞かせたが、それより、敬慕の想に勝へなかつた。その後、幸に縁があつて、君に逢つて見ると、人物甚だ都雅にして、座客は、いづれも傾倒して仕舞つた。君の立派な風采は、たとへば晴れた月の出でたるが如く、滔滔たる雄辯は、流るる泉流を切り落した様である。今しも、騷亂の世で、權謀を貴び、處士は、皆冠の紐を整へて、出仕の支度を爲し、然るべき一廉の人物とさへ見れば、諸侯は、幣物を厚くして、之を招聘し、公子は、車を用意して、態態迎ひに來られるといふ始末。然るに、君は、獨り海中の仙山を念ひ、扁舟を僦うて、歸郷の日程を打合せなどする。今次、君の歸られるのは、翩翩として青冥の上を飛ぶ鴻雁が、海邊の城を過ぐるに比すべく、そこで、萬一、魯仲連の如き慷慨倜儻の人物に逢つたならば、僕が宜しく申して居たといつて言傳をして呉れろ。

【餘論】起六句は、張國士の話に因つて、沈鉉の名を知りしことを敘し、相逢真甚都の四句は、始めて沈鉉に遇ひしことを言ひ、時方向權謀の四句は、刻下の時勢、爾獨念滄洲の六句は、その歸郷を送つて、題意を全うし、末二句は、更に一步を踏過して、餘情を存したのである。

重午書事

重午書事

采蒲臨綠波。團扇送涼過。
越客爭標渡。荆巫弭節歌。
家醕憐浮玉。宮衣憶賜羅。
今年兵氣惡。朱符佩更多。

蒲を采つて綠波に臨み、團扇、涼を送つて過ぐ。
越客、標を争うて渡り、荆巫、節を弭めて歌ふ。
家醕、浮玉を憐み、宮衣、賜羅を憶ふ。
今年、兵氣悪しく、朱符、佩ふること更に多し。

【字解】(一) 采蒲 金門記に「五日、蒲を刺して人と爲し、艾を結んで虎と爲し、小、豆大の如く、以て之を戴く」とある。
(二) 團扇 唐書に「時に翰林の初めて選ばれたるものには、内庫より青綺綾・紫絲履の類を給し、五日、青團扇を賜ふ」とある。
(三) 標渡 水中に標木を立て、その間に於て競漕を行ふ、即ち標渡。荆楚歲時記に「五月五日、俗謂ふ、この日、屈原、汨羅に投ず、人、その死を傷む、故に舟楫を以て之を救ふ」とあり、李適の競渡の詩に「金鑿爭標排、荷度」とある。
(四) 荆巫 楚地の巫女、劉禹錫の詩に「荆巫厭厭傳神語」とある。
(五) 弭節 漢書司馬相如傳に「楚王弭節、節、節、節」とあり、その注に「弭は、猶ほ低のごときなり」とある。
(六) 家醕 家釀の酒。
(七) 浮玉 その色の清澄なるを云ふ。
(八) 賜羅 魏都の成王席上、美人の時に香艶王分貼、綉綉教羅とある。天子より賜はりし薄絹。
(九) 朱符 抱朴子に「午日、赤靈符に朱書して心前に著け、以て兵疫百病を避く」とある。

【圖義】重午は五月五日、即ち節句、支那では、この日が屈原の汨羅に投じた日に當るといふので、祭を爲し、且つ競波を催すことに成つて居るので、この詩は、直に其事を記したのである。

【詩意】人形を造る爲に、蒲を摘まむとして綠波に臨み、やがて歸ると、團扇で涼風を送つて貰つた。越地の少年輩は、この日を待ち構へて、競漕を行ひ、楚國の巫女どもは、節を低くして歌を唱へて居る。家釀の酒は、清澄にして玉を浮べたるが如く、禮服を見ては、恩賜の薄絹で造つたことを思ひ出した。今年は、兵氣悪しく、争亂未だ平定せざるに因り、常よりも數多く朱符を佩びて、難に罹らぬ様にと念じて居る。

【餘論】句句、ただ重五の節物に關係ある事實を列記しただけで、特に之を統合することもなく、恐らくは結構の散漫たるを免れまいと思ふ。

東白軒

東白軒

昔宿東峰顛。長夜何漫漫。
起看玄景晦。冰雪積未泮。
翻翻驚濤瀾。黝黝失星漢。

むかし、東峰の顛に宿す、長夜、何ぞ漫漫たる。
起つて看れば、玄景晦く、冰雪積んで、未だ泮けず。
翻翻として濤瀾を驚かし、黝黝として星漢を失ふ。

悲風吹木石。澎湃而凌亂。
太陽淪朱光。陰火吐微煥。
山精與罔象。乘暗出遊翫。
前巖挂猴猿。後嶺起鴉鶴。
一時互號叫。哀厲客腸斷。
芒芒禹九州。下視莫能判。
如身墮幽都。涉水濟無畔。
金烏在地底。其出疑可喚。
雄雞棲高樹。凍噤不振翰。
君家有層軒。不異泰山觀。
扶桑拂簷楹。咫尺海東岸。
酒醒四鼓發。暘谷已昇半。
紛紛物象出。稍稍涼喧換。

悲風、木石を吹き、澎湃として凌亂。
太陽、朱光を淪め、陰火、微煥を吐く。
山精と罔象と、暗に乗じて出でて遊翫。
前巖には猴猿を掛け、後嶺には鴉鶴を起す。
一時互に號叫、哀厲、客腸断ゆ。
芒芒たり禹の九州、下に視るも能く判つなし。
身、幽都に墮つるが如く、水を渉らむとして、濟るに畔。
金烏、地底に在り、その出づるや、喚ぶべきを疑ふ。
雄雞、高樹に棲み、凍噤して翰を振はず。
君が家に層軒あり、泰山の觀に異ならず。
扶桑、簷楹を拂ひ、咫尺、海東の岸。
酒醒めて四鼓發し、暘谷、すでに半ばを昇る。
紛紛として物象出で、稍稍として涼喧換はる。

如盲得復明。毫末皆可看。 盲の復た明かなるを得るが如く、毫末、皆看るべし。
 山中舊所聞。寂默應屏窻。 山中、舊と聞くとく、寂默、應に屏窻すべし。
 何當此借榻。夙興不待盥。 何ぞ當に此に榻を借り、夙に興きて盥を待たず、
 共賓義和車。一觀天下旦。 ともに義和の車を賓し、一たび天下の旦を觀るべき。

【字解】【一】東峰。何處に在るか、金樓の注にも詳記してない。【二】漫漫。時の経過の緩くして遅き貌。【三】玄景。冬景色。
 【四】未泮。まだ解けない。【五】黢黢。玉篇に「黢は黒きなり」とある、暗黒の貌。【六】星漢。銀河。【七】陰火。燐が何かの燃え
 るのであらう。【八】微煥。微明に同じ。【九】山精。異苑に「山精は人の如く、一足、長三四尺、山齋を食ひ、夜出でて晝藏る」と
 ある。【一〇】同象。史記孔子世家に「水の怪は龍同象」とあり、夏鼎志に「同象は三歳の兒の如く、赤目黒色、大耳長髯赤爪、索縛すれ
 ば食ふを得べし」とある。【一一】鴉。鴉は邦名、ふのと、禽類に「鴉、仰きて鳴けば暗れ、俯して鳴けば陰」とある。【一二】哀厲
 その聲の悲しく且つ烈しきこと。【一三】芒芒。茫茫に同じ。【一四】禹九州。禹は、水土を治めし後、支那本部を區劃して九州とした。
 【一五】莫能判。判別することが出来ぬ。【一六】幽都。地獄。【一七】金鳥。太陽、五燈會元に水底金鳥天上日とある。【一八】雄雞
 前に卷一、放歌行の中にも引いて置いたが、支中記に「桃都山に大樹あり、桃都といふ、枝相去ること三千里、上に天雞あり、日は
 じめて出でて、この樹を照らせば、天雞、即ち鳴き、天下の雞、皆、これに應ず」とある。【一九】凍曉。曉は口を閉づること。【二〇】
 泰山觀。泰山日觀峰の略、應劭の泰山記に「下より、古しへの封禪の處に至る、凡そ四十里。東南の巖を日觀と名づく。日觀とは、
 雞一たび鳴くと、日の始めて出でむと欲するを觀る、長さ三丈所」とある。【二一】扶桑。東海中の神木、淮南子に「日は暘谷より
 出で、咸池に浴し、搏桑を拂ふ、これを晨明といふ」とある。【二二】四鼓。四更を報する街鼓。【二三】鳴谷。上に見ゆ、日の始めて
 出づる處。【二四】精稍。次第に。【二五】毫末。細い毛の尖端。【二六】屏窻。退き隠れる。【二七】不待盥。顔を洗ふ間も待たぬ。

【二六】實。書經に「實んで出日を賓す」とある、日を迎へる。【二九】義和車。義和が御となつて、太陽の乘れる車を進める。

【題義】東白軒は、何處に在るか、何人の住居か分からぬが、この詩は、即ち其軒に寄題したのであ
 る。

【詩意】むかし、東峰の絶頂に宿したことがあつたが、長夜漫漫として、なかなか夜があけない。起
 つて見れば、冬の寒景色は、甚だ晦く、氷雪も積んだ儘で、まだ解けない。その内に、翻翻として大波
 が打寄する様に騒がしく、まだ眞ッ暗で、黒白も分からぬ其中に、天の河も見えなかつたが、それは、
 悲風颯として木石を吹き飛ばしたからであつて、その聲澎湃、その勢は、あらゆる物を凌いで紛亂せ
 しめる位。この時、太陽は朱光を瀰めて全く見え、唯だ燐様の陰火が微明を吐くだけで、山精だの、
 同象だのいふ怪物どもは、時を得顔に、暗きに乗じて、勝手に遊戯して居るだけであつた。かくて、前
 なる巖には、猿などがぶら下り、後なる山には、鳥や鶴が飛び起つて、同時に叫び合ひ、その聲の
 悲しく烈しきは、容易に、孤客をして心腸を断絶せしめる。むかし、大禹の區劃した九州は、茫茫と
 して、下に俯視するも、判別するに由なく、身は、さながら地獄に落ち、三途の川を徒涉しやうとし
 ても、向う岸が分からぬ様である。この時、太陽は地底に潜み、呼べば出て来さうでもあるが、天雞
 は、高樹に栖んだ儘、寒さの厳しきにつれ、凍えて口を閉ぢ、羽ばたきする元氣も無い位。むかし、
 東峰で體驗した真夜中の光景は、ざつと此通り。君の家には、幾層かの樓があつて、泰山の日觀峰に異

ならず、扶桑の神木は、軒や垂木を拂ふかと疑はれ、東海の岸は、咫尺の間に見える。そこで、酒が醒むる頃、街鼓、四更を報ずれば、日は陽谷より上つて、すでに其半に及び、天地間の森羅萬象は、紛紛として現はれ來り、次第に寒温も變つて來る。たとへば、目くらが再び物を見ることが出来る様になつたと同じく、兎の毛の末までも、はつきりと分かり、むかし、山中で聞いたところの怪異の物どもは、寂黙の中に退き置れて仕舞ふ。願はくは、この樓に一榻を借り、朝早く起き出でて、顔を洗ふ間もあらせず、君と共に、羲和が其車を御すといふ太陽を迎へ、そして、天下の晚景を一見したいものである。

【餘論】 起首より凍噤不振、翰に至る二十四句は、さきに東峰に於て實視した夜景、君家有二層軒より寂黙應三屏竄に至る十二句は、東白軒の夜あけを想像し、何當此借榻の四句は、おのが希望を述べて收結としたので、その日出の景色を詳述せずして、讀者の摸索に任かせたのは、含蓄に富み、且つ省筆の法を得たものである。

賦得姑蘇臺送賈文學麒 城上聞啼鴉臺前見遊鹿

悠悠畫簾影、薄暮澄潭曲。
雲隨歌舞散、日與興亡促。
美人不歸來、湖水春更綠。
思君別後登、應盡天涯目。

【字解】 (一) 悠悠、靜に動かざる貌。(二) 美人、西施を云ふ。

【題義】 姑蘇志に「姑蘇臺、一名胥臺、姑蘇山に在り」と記し、山水記に「夫差、臺を作る、三年成らず、材を積む五年にして乃ち成る、九曲の路を造り、高さ三百里を見る。勾踐、吳を伐たむと欲す、ここに于て、柵柵を作り、嬰くるに白壁を以てし、鑲むるに黄金を以てし、狀、龍蛇の如し、吳王に獻す。吳王、大に悦び、受けて以て此臺を起す」とあり、越絶書に「吳王、姑胥の臺に遊ぶ、子胥諫むれども聽かず、又臺上に于て、別に春宵宮を立て、長夜の飲を爲し、天池を作り、以て青龍舟を泛べ、舟中盛に妓樂を致し、日に西施と嬖を爲し、海靈館・館娃閣を作る、皆銅溝玉檻、飾るに珠玉を以てす。後、越、吳を伐ち、遂に其臺を焚く」とある。この詩は、姑蘇臺を賦して、これに託して文學賈麒の遠行を送つたのである、その賈麒の字、竝に閱歴、任地等は分らない。

【詩意】 むかし豪華を極めたる姑蘇臺も、千年の今日、その名残をだに留めず、城壁の上には、鴉の

啼くのが聞こえ、臺前には、鹿の遊ぶのが見える。畫簾の影は、悠悠として動かす、薄暮、水の澄んだ淵の曲つた處に映つて居る。雲は歌舞に随つて、ともに散じ、日は興亡と共に頻りに移り、當年の西施は歸り來らず、五湖の水は、春來逾よ緑である。今日、ここに君を送るのであるが、別後、君を思つて臺に上らば、空のはてまでも眺めあかすであらう。

聞晚鶯

晚鶯を聞く

昨歲聞孤囀。綠陰山院行。

昨歲、孤囀を聞いて、綠陰山院に行く。

今朝寢齋雨。重聽獨含情。

今朝寢齋の雨、重ねて聽いて、獨り情を含む。

西澗多喬木。何爲亦到城。

西澗に喬木多し、何すれぞ亦た城に到る。

【字解】「一」孤囀、ただ一羽で囀つて居る。「二」寢齋、前に見ゆ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、題下の原注に「時に圍城中に在り」と記してあるのは、「一寸注意すべきことである。」

【詩意】去年、ここで晚鶯が一羽、面白く囀るを聞いて、忽ち興を催し、綠陰に閉された山中の寺院を尋ねて往つたことがある。今朝、寢室たる小齋に臥した儘、雨中に又しても晚鶯を聞いて、ひとり、情を含んで堪へられない。おもへば、西澗には喬木も多く、汝の栖むに適して居るのに、如何なれば、重圍に陥つて居る此城中に、態態遣つて來たのであるか。

【餘論】今昔を對比して、俯仰の感に堪へざる上に、結二句は、城の圍中に在るをいひ、感慨更に盡さざるを覺える。

西齋池上三詠

西齋池上三詠

葵花

葵花

豔發朱光裏。叢依綠蔭邊。

豔は發す朱光の裏、叢は依る綠蔭の邊。

夕同山薜落。午竝海榴燃。

夕には山薜と同じく落ち、午には海榴に竝んで燃ゆ。

幽馥流珍簞。鮮輝照藻筵。

幽馥、珍簞に流れ、鮮輝、藻筵を照らす。

羣芳已謝賞。孤植轉成憐。

羣芳、すでに賞を謝す、孤植、轉た憐を成す。

【字解】「一」豔發、花の開くこと。「二」朱光、夏の日光。「三」山薜、薜は蔓花、圍會に「薜は木植、朝に華さき暮に落つ」

とある。山葵といへば、野生の種類であらう。【三】海榴、石榴、海の字を付けたのは、元と外國産で、往時南海の方から輸入したからだといふ説もある。【四】幽蘭、幽香に同じ。【五】珍草、珍は見事で珍らしい。【六】鮮輝、鮮かな光輝。【七】藻蘩、立派な蘩。【八】謝賞、人に賞せらるるを謝して、すでに凋落して仕舞つた。【九】孤植、ひとり残つて居る。

【題義】この三首は、西の方の書齋に近く池があつて、その畔に植ゑてある三種の花弁を分詠したので、これは、その第一葵花である。以下、題義は注するに及ばぬから、省略することにす。

【詩意】葵の花は、艶やかに夏の日光の中に咲き出で、その株は、緑の木影に倚り添うて居る。この花も、盛りの短いもので、夕には木樞と共に落ちて仕舞ふが、日中には、石榴と竝んで、その色は、燃ゆるが如く見える。幽香は、見事な竹むしろの上に流れ、鮮かなる光輝は、立派な蘩を照らして居る。ただ多くの花どもが、既に人の吟賞を謝して、皆散り過ぎた後に、この花だけが、ひとり残つて、園中に立つて居るのは、流石にしほらしいと思ふ。

荷葉

荷葉

楚服新裁得、吳笛舊製成。

楚服、新に裁し得たり、吳笛、舊と製して成る。

圓應間荇菜、密欲翳蓮莖。

圓は、應に荇菜に間すべく、密は、蓮莖に翳さむと欲す。

聲中亂雨至、陰下一魚行。

聲中、亂雨至り、陰下、一魚行く。

桂櫂還思折、江南日暮情。

桂櫂、還た折らむことを思ふ、江南日暮の情。

【字解】【一】楚服、楚辭、即ち屈原の服。離騷に製三交荷二以爲衣裳、集芙蓉一以爲裳とある。【二】吳笛、笛は吸ひ筒、姓譜に「魏の鄭愨、三伏、賀寮を集め、暑を歴陽に避け、荷葉を取つて酒を盛り、刺して柄と通ぜしめ、傳へて之を吸ひ、奏笛酒と名づく」とある。【三】圓、浮葉の圓きなふ。【四】荇菜、荇菜の類。【五】翳蓮莖、蓮の莖に掩ひかかつて見えなくする。【六】桂櫂、桂の香木で造つた櫂。【七】思折、葉を折らばやと思ふ。

【詩意】楚客は、新に之を裁して衣となし、吳人は、舊くからの之を笛として酒を飲んだといふ話。浮葉の小さいのは、荇菜などに交つて可愛げに見えるが、大きな葉が密に重つて居ると、蓮の莖を掩ひかぶせて、見えなくする。その葉の捲れて騒ぐ聲を聞いては、亂るるが如き驟雨の至りしを知るべく、その葉影の下を一尾の魚が悠悠と行くのが見える。ここに桂棹を移して舟を進めたが、この葉を折らうとするに際して、江南日暮、人を思ふ情に堪へず、しばしは、つくねんとして居た。

桐樹

桐樹

晴粉朝英墜、涼瓊夏葉舒。

晴粉、朝英墜し、涼瓊、夏葉舒ぶ。

鳥啼高樹早、蟾轉薄疏虛。

鳥は高樹に啼くこと早く、蟾は薄疏に轉じて虚し。

朱絃未薦曲、彤管屢題詩。

朱絃、未だ曲を薦めず、彤管、屢ば詩を題す。

坐恐銷華澤。商吹起前除。

坐に恐る、華澤を銷し、商吹、前除に起るを。

【字解】【一】晴粉、乾いた花粉。【二】朝英、朝咲き出でた花。【三】波瑣、涼しき美玉。【四】蟾、蟾蜍の時、月を指す。【五】薄粧、深からぬ粧。【六】朱絃、琴に類する、司馬彪の詩に「宮宿桐樹、寄生于南岳」とあり、又、班固「不我顧、牙頰不我餘、焉得成琴瑟、何由揚妙曲」とある。【七】形管、詩經の靜女に靜女其嬰、貽我彤管」とある、彤管は赤軸の筆、后夫人に侍して居る女史の用ふるもの。ここでは、唯だ女史の用ふる筆と見れば善い。商芸小説に「獨の侯爵圖、一大桐葉を飄すを見る、詩あり、云ふ、拭翠斂雙蛾、爲鬱心中事、猶管下三庭除、書成相思字」と。數年にして、續圖、任氏の女に婚す、曰く、これ妾の書するところなり」とある。【八】華澤、つややかなること。【九】商吹、秋聲に同じ。【一〇】前除、除は階。

【詩意】朝に咲き出でたる桐の花は、乾いたる粉を落し、夏、大きくなつた葉は、涼しげな玉を舒べた様である。その高い梢の上には、鳥の啼き出づること早く、月は其處から深からぬ窓にさし込む。この桐を材とすれば、立派な琴が出来るが、まだ朱絃を張つて一曲を奏するまでに至らず、深閨の女子は、赤軸の筆を揮つて、數ば其葉の上に詩を題する。ただ恐るるは、秋風が階前に起り、その爲に桐の葉が光澤を失ひ、やがて枯れて飄り落つることである。

【餘論】以上三首、いづれも、中間の四句を對偶にし、聲調全く諧合せざれども、兎に角、律體に近いもので、作法も亦た之に據つて居る。前にも、その例は、いくらもあつたが、これは、特に彰著なるものである。

遊城西得豔字

城西に遊ぶ、豔の字を得たり

軍旗表山柵。商鼓喚津店。

軍旗、山柵を表し、商鼓、津店に喚ぶ。

稻黃雲有香。楓赤火無焰。

稻は黃にして雲に香あり、楓は赤くして火に焰なし。

賞懷誓飲償。眺目擬窮占。

賞懷、飲償を誓ひ、眺目、窮占を擬す。

思叟已槃弱。欲賦更橫槩。

叟を思つて、すでに弱を槃し、賦せむと欲して更に槩を

煙開象極判。波溢類洪墊。

煙は開いて極判に象り、波は溢れて洪墊に類す。

壞宮茨被垣。棄壘葑漫塹。

壞宮、茨に被り、棄壘、葑に漫る。

晨唳鴈鴻多。秋腥鱸蟹贍。

晨に唳いて鴈鴻多く、秋、腥くして鱸蟹贍る。

吼鯨報僧粥。臥獸衛官窳。

吼鯨、僧粥を報じ、臥獸、官窳を衛る。

揖道訛語談。映籬陋妝覘。

道に揖して、訛語談じ、籬に映じて、陋妝覘ふ。

池開沐女盆。石拔鬪夫劍。

池は沐女の盆を開き、石は鬪夫の劍を抜く。

竿危鬧鈴響。紗古冪燈豔。

竿は危くして鈴響鬧がしく、紗は古くして燈豔を冪す。

時艱游總稀。歲稔醑饒醜。

時艱にして、游、總て稀に、歲稔つて、醑に饒醜し。

探囊出奇蒐（三三）、押弩脱（三六）、浮念（三七）。

囊を採つて奇蒐を出し、弩を押いて浮念を脱す。

一覽一興嗟（三九）、再到再忘厭（四〇）。

一覽すれば一たび嗟を興し、再到すれば再び厭くを忘る。

吟將嘯（四一）、猿庚（四二）、歸用棲（四三）、鶴驗（四四）。

吟じて嘯猿と庚し、歸つて棲鶴を用つて驗す。

壑虛哀（四五）、商叩（四六）、嶺豁初魄閃（四七）。

壑は虚しくして哀商叩き、嶺豁にして初魄閃く。

宵宵聽鳴鐘（四八）、翩翩戒還轡（四九）。

宵宵として鳴鐘を聴き、翩翩として還轡を戒む。

興清逼林淒（五〇）、醉纈眩湖灘（五一）。

興清くして林の淒なるに逼り、醉纈にして湖の灘なるに眩す。

願標山已違（五二）、入郭塵復染（五三）。

標を願みて、山、すでに違ひ、郭に入つて、塵、復た染む。

幽景慮遂通（五四）、拙詞紀姑僭（五五）。

幽景、遂に通するを慮り、拙詞、姑らく僭なるを紀す。

【字解】【一】山梅 山下に梅を植らして防禦に充てる、魏晉廣陽王傳に「營を造れ、梅を立つ」とある。【二】商鼓 物を商ふ爲に鼓を敲く。【三】津店 津は舟つきの場所。【四】稻黃 稻の穂に實が入つて熟しかかりしこと。【五】賞債 吟賞の思。【六】飲債 酒を飲んで直に其債を拂ふ。【七】窮占 出来るだけ廣く占領する。【八】思敗 敗は狩獲。【九】樂邪 唐韻に「樂は、弓を正しうする所以」とあり、玉篇に「邪は、弓の弛む貌」とある。すると、弓に弦を張つて引き締める。【一〇】橫槩 槩は文字を書く板、西京雜記に「揚雄、鉛を傾にし、槩を掲げ、諸計吏に従ひ、殊方絶俗の語を訪うて方言を作る」とあり、釋名に「槩は漸なり、槩は板の長さ三尺、言ふは漸漸長からしむるなり」とある。【一一】象 かたどる、似て居る。【一二】極判 太極より陽陽の判判すること、はじめて世界の出現すること。【一三】洪盤 書經の益稷に「洪水、天に罰り、滂沱として山を傾れ、陵に裏り、下民昏墊す」とある、洪水の爲に避難する。【一四】壞宮 吳の廢宮であらう。【一五】奇 水草、眞菰の類。【一六】漫壑 漆の中にはびこる。

【一七】晨暝 朝に鳴く。【一八】鷓鴣 鷓は野雞の屬、玉篇に「鷓に似て大なり」とある、鷓は雁の大なるもの。【一九】鴈 十分豐富なること。【二〇】吼鯨 鯨の鳴ること。班固の東都賦に發鯨魚、經三華鯨」とあつて、その法に「海東に大獸あり、謂之鯨、これを擊つと、鯨魚を畏る。鯨魚一擊すれば、蒲牢、輒ち火に吼ゆ。凡そ、鯨、聲をして大ならしめむと欲す、故に蒲牢を上に作り、これを擊つところの者を以て鯨魚の狀を爲す」とある。すると、鯨は、蒲牢の形をなし、これを撞くものは、鯨魚の形をなすといふのが本當であるが、後世では華鯨などといつて、鯨その物が鯨の形をなして居る様に考へて居る。これを、他に出典あるかも知れぬが、姑らく疑を存して置く。【二一】報僧別 寺の食事の制限を知らせる。【二二】臥獸 石獸の倒れて居るを云ふ、趙孟頫の詩に「岳王墳上草離離、秋日荒涼石獸危」とある。【二三】官空 空は説文「下棺を葬るなり」とある。下棺は、柩などを除いた棺その物と思はれるから、空は即ち墓、官空といへば官許の共同墓地であらう。【二四】排道 道上に於て挨拶をする。【二五】訛語 地方のなまりを交へたる言葉。【二六】兩歇 田舎臭く野暮らしき化粧。【二七】視 何ふ。【二八】沐女盆 卷五、天池の詩中にも見えたが、華山には玉女の洗頭盆といふ池があつて、沐女盆は之と同義。沐は、髪を洗ふこと、即ち洗頭。【二九】竿危 竿が丈高くして危げなること。【三〇】鈴響 天寶遺事に「五王宮中、各一庭中に於て長竿を豎て、五色の旛を竿頭に掛け、旛の四垂、緩るに小金鈴を以てす。聲あれば、即ち旛の向ふところを見、以て四方の風候を知るなり」とある。これは、風見の旗竿であらう。【三一】燈燈 燈は包む、燈火の明顯なるを包み隠す。【三二】歲終 豐年に遇ふ。【三三】酷饑 酷は一宿の酒、賣酒などの饑があるが、ここのは後者で、店で賣る酒、饑は廣頭に「酒醴味厚し」とあり、増韻に「饑なり」とあるから、濃くて味よき酒。豐年に際し、惜しげもなく、善い米を淨山使つて醸造するから、尋常の野店で賣つて居る酒も、大抵濃くて味が善いといふ義。【三四】探囊 囊は錦囊、詩稿などを入れる。李長吉が少年の時、毎日錦囊を背にし、馬に跨つて外出し、句を得れば、囊中に投げ込み、歸後、夜、これを補足して篇を全うしたといふことがある。【三五】奇蒐 蒐は狩獲、物珍らしいものを狩り集めて作つた詩句。【三六】押弩 押は挽く、李賀の猛虎吟に「長戈莫觸、強弩莫押」とある。【三七】浮念 浮いた念慮。【三八】廣 相和する。【三九】驗 樓鶴が其巢を忘れずして必ず其處に歸る

であるから、僭越ながら、拙い文詞を連ねて、しばらく、これを紀し、聊か他日の追憶に資する次第である。

【餘論】この詩は、韓孟の聯句などを真似たものと見え、險韻を驅使し、全篇、對偶を以て之を行、加、之、見聞せるままに敘述したから、段落なども截然分明でない。強ひて言へば、起首より歲稔酷饑、饑、饑に至るまでは、専ら探勝を寫し、探囊出三奇蒐一より結末に至るまでは、いささか感慨を寓し、且つ歸つて城中に入ることまで併敘したのである。一句づつ取り出して見ると、往往無理はあつても、よく引き締まつて、全く洗練の結果と思はれるが、詩として見ると、結構、やや散漫に失し、殆んど中心絶頂が無い。要するに、敘事の一體として、姑らく之を存することが至當であらうと思はれる。

卞將軍墓

卞將軍の墓

胡馬飲洛川。皇輿寓江左。
宰輔失良圖。國門屢興禍。
惡木不可植。猛獸終難馴。
冠軍歷陽來。白日飛黃塵。

胡馬、洛川に飲み、皇輿、江左に寓す。
宰輔、良圖を失ひ、國門、屢ば禍を興す。
惡木、植うべからず、猛獸、終に馴らし難し。
冠軍、歷陽より來り、白日、黃塵を飛ばす。

兵叩西陵關。火焚大桁口。
虎旅方敗奔。六宮竟誰守。
卞公仗戎鉞。勇氣超常倫。
立朝素正色。臨難仍捐身。
落日百戰餘。裹創領殘卒。
父子誓除兇。一朝共淪歿。
當年尙浮虛。風俗變縉紳。
誰知效節者。不在清談人。
石頭義旗來。天狼夜流血。
冊贈極哀榮。千秋表忠烈。
六朝卿相冢。無數青山根。
至今行人過。但拜將軍墳。
馬鬣封未平。龍泉氣猶發。

兵は西陵關を叩き、火は大桁口を焚く。
虎旅、方に敗奔、六宮、竟に誰か守らむ。
卞公、戎鉞に仗り、勇氣、常倫に超ゆ。
朝に立つて、素より色を正しうし、難に臨み、仍つて身を捐つ。
落日百戰の餘、創を裹んで殘卒を領す。
父子、兇を除かむことを誓ひ、一朝、共に淪歿。
當年、浮虚を尙び、風俗、縉紳を變す。
誰か知らむ、節を效すもの、清談の人に在らざるを。
石頭、義旗來り、天狼、夜、血を流す。
冊贈、哀榮を極め、千秋、忠烈を表す。
六朝、卿相の冢、無數、青山の根。
今に至つて、行人過ぐるも、但だ將軍の墳を拜す。
馬鬣、封、未だ平かならず、龍泉、氣、猶ほ發す。

惆悵望松楸一杯奠寒月

【字解】【一】胡馬飲洛川。洛川は即ち洛水、洛陽の南を流れて居る。晉書地理志に「永嘉の後、司州、劉曜に淪没す。曜、洛陽を以て荊州となす。石勒に及び、復た以て司州と爲す。石季龍、又司州の河南、河東、弘農、滎陽、兗州の陳留、東燕を分つて洛州と爲す」とある。【二】皇輿。天子の乗れる輿、龍駕に同じ。【三】宰相。宰相に輔弼の臣。【四】冠軍。冠軍は蘇峻を指す。晉書の本傳に「峻、庾亮に隨ひ、追うて沈充を破り、使持節冠軍將軍歷陽內史に進み、散騎常侍を加へ、都陵公に封ぜらる」とあり、一統志に「和州含山縣は、漢の歷陽の地」とある。【五】兵甲。西陵關。蘇峻傳に「峻、自ら漢柳の衆萬人を率ゐ、風に乘じ、橫江より濟つて陵口に次し、王師と戦つて、頗りに捷ち、遂に蔣陵の覆舟山に據り、衆を率ゐ、風に因つて火を放ち、襄省及び諸營等の署、一時に蕩盡し、遂に宮城を陷る」とある。なほ趙麟の條を併看すべし。【六】虎旅。材力、虎に比すべき兵士、禁軍を云ふ。【七】浮虛。輕浮虛誕。【八】籍州。籍は抑む、紳は大帶。笏を大帶に挿むところの高位高官の者。晉書の卞壺傳に「時に、貴游の子弟、多く王澄謝鯨を慕うて遠と爲す。壺、朝に厲色して曰く、禮に悖り、教を傷る、即、これより甚しきはなし。中朝傾覆、實に此に由る」と。奏して之を推せむと欲す」とある。【九】石頭。石頭城。蘇峻傳に「温嶠・陶侃、すでに職を武昌に借ふ。峻、兵起るを聞き、還つて石頭に據る」とある。【一〇】天狼。天狼は擄掠を主る、即ち盜賊に對照する星で、それが、夜、血を流したといへば、即ち蘇峻の誅に伏せしこと。本傳に「嶠、趙胤と歩卒萬人を率ゐ、白石の南より上つて、これに臨まむと欲す。峻、匡孝と八千人を將ゐ、逆へ戦つて北に下り、陣を突けども入るを得ず。將に逼つて白木陳の牙門に趨らむと欲す。彭世、李千等、これに投ずるに矛を以てし、馬より墜して首を斬り、これを擄割して、その骨を焚く」とある。又晉書天文志に「天狼の一星は、東井の東南に在り、狼は野將たり、擄掠を主る。狐の九星は、狼の東南に在り、盜賊に備ふるを司り、つれに狼に向ふ」とある。【一一】册。封册を以て追贈する。【一二】六朝。一統志に「江南、古しへの金陵の地、吳晉宋齊梁陳の舊都なり」とある。【一三】青山。山麓。【一四】馬。禮記の檀弓に「從、斧の若きもの、馬鬣封の謂なり」とある。古しへの墓、即ち土饅頭は、上の方が薄く、下の方が厚く、一寸見ると、斧の刃を倒にした様な形で、又馬の鬣の部分に似て居るから名づけたので、馬鬣は即ち土饅頭。【一五】龍泉。龍泉、靈前に供へて祭を爲す。

死後なほ靈あることを云ふ。龍泉は、太阿と並び稱せらるる古しへの名劍。郭元振の寶劍篇に良工鍛鍊凡幾年、鑄得寶劍一名龍泉とある。又卞壺傳に「後、壺、壺の墓を發く。尸僅れて、靈骸蒼白、面、生くるが如く、兩手皆拳、爪甲穿つて手背に透す。安帝、詔して、錢十萬を給し、以て壺光を修めしむ」とある。【一六】松楸。松とひさぎ、多く墓邊に種うる故に、墓地の義に用ふ。【一七】奠。靈前に供へて祭を爲す。

【題義】卞將軍は即ち卞壺、晉書の本傳に「壺、字は望之、濟陰宛句の人、光祿大夫に拜せられ、散騎常侍を加へらる。時に、庾亮、將に蘇峻を徵さむとす。壺、朝に言うて曰く、峻は狼子野心、終に必ず亂を爲さむと。亮、納れず。峻、果して、兵を稱げて東陵に至る。詔して、壺を以て、都督大桁東諸軍事たらしめ、節を假し、復た領軍將軍給事中を加へらる。壺、郭默・趙胤等を率ゐ、峻と大桁に西陵に戦ひ、峻に破らる。峻、進んで、青溪を攻む。壺、諸將と距ぎ撃ちしが、禁する能はず。賊、火を放つて、宮寺を焼き、六軍敗績す。壺、時に背創を發し、猶ほ未だ合せず、疾を力めて戦ひ、遂に之に死す、時に年四十八。二子瞻・盱、相隨つて賊に赴き、同時に害せらる。峻、平らぐ。朝議、壺に左光祿大夫を贈り、散騎常侍尙書郎を加へ、後、改めて侍中驍騎將軍開府儀同三司を贈り、諡して忠貞といひ、祠るに太牢を以てし、世子瞻に散騎侍郎、盱の弟盱に奉車都尉を贈る。盱の母表氏、二子の尸を撫し、哭して曰く、父は忠臣たり、汝は孝子たり、夫れ何ぞ恨みむや」とあり、なほ一統志に「墓は冶城に在り、廟は鷄鳴山の陽に在り」と見えて居る。この詩は、青邱が親ら卞壺の墓を弔

うて作つたのである。

【詩意】西晋の末の騷亂に際し、胡兵は中國に亂入して、馬を洛水に飲ひ、龍駕、南に遷つて、江左に寄寓し、廟堂の宰相輔佐輩は、良圖を出さず、その後、引き續いて、都下に於ても、數ば禍を興す様になつた。げにや、惡木は、決して移植すべからず、猛獸は、如何にするも、馴らし難いもので、ここに、冠軍將軍の蘇峻は、叛を爲して歷陽より押し寄せ、白日に黃塵を飛ばし、その兵は、西陵關を叩き破り、次いで火を大桁口に放つて、金陵の近くに攻め入つた。時しも、禁衛の武士どもは、敗走したばかりで、六宮の守備も、甚しく手薄に成つた。卞公は、ひとり節鉞に仗つて、殘兵を指揮し、その勇氣は、常人に超えて、まことに凜凜たるものであつた。卞公は、朝廷に立てば、色を正しうして、每每直言された位であるから、危難に臨んで、健氣にも、その身を捐てられた。その時、百戰功なく、味方は、恰も落日の傾く様な否運に陥つたが、創を裏んで殘卒を従へ、父子ともに必ず兇賊を除かむことを誓つて、頻りに奮闘し、不幸にも、一朝ともに戰歿して仕舞つた。その頃は、浮華輕佻の風俗で、朝廷の大官輩まで、これにかぶれて仕舞つたが、その手合は、かういふ時に何の役にも立たず、節を效して死んだのは、卞公だけで、それは、清談を事とする底の人ではなかつた。卞公の死後、温嶠、陶侃等は、義旗を押し立てて石頭城に蘇峻を攻め、やがて、天狼の一星、夜、血を流した様に赤くなり、その兆徴、虚しからず、さしもの賊臣も、遂に誅に伏して仕舞ひ、そこで、封冊を以

て贈位されたが、まことに悲哀光榮の至で、千秋の後まで、將軍の忠烈を表彰されたのは、如何にも尤もな事である。顧みれば、六朝の間なる卿相輩の塚と稱するものは、金陵四圍の山麓に、數限りもない位、澤山あるが、今日でも、行人來り過ぐれば、唯だ卞將軍の塚を拜するのみである。その塚は、土饅頭も、昔の儘で、まだ削平せられず、英豪の死後、なほ靈あることは、龍泉の名劍が自然精氣を發するに異ならず。われ今、ここに來り、惆悵之餘、松楸の立ち圍む墓所を望み、皎皎たる寒月の下に於て、謹んで一杯を奠し、ここに心ばかりの祀を爲した次第である。

【餘論】この詩は、凡そ三大段より成り、起首より六宮竟難守に至る十二句は、五胡の亂入より、延いて蘇峻の亂に及び、卞公仗二戎鉞より不在清談人に至る十二句は、卞公の節義に死せしことを敘し、石頭義旗來より結末に至る十二句は、將軍の死後の表旌より、その墓の儼然なほ存し、仍つて、憑弔をなすことを述べたのである。中にも六朝卿相家より以下八句は、詞彩煥發、慷慨悲愴、最も讀者の心胸を動盪すべく、まさしく、作者の特技である。

綠水園宴集

綠水園宴集

平居寡良會、艱哉況茲時。

平居、良會寡く、艱なる哉、況んや茲時。

幸逢金閨英。中筵接光儀。幸に金閨の英に逢ひ、中筵、光儀に接す。
 名園過修禊。景麗春陽熙。名園、修禊を過ぎ、景、麗にして春陽熙たり。
 綠芷榮曲沼。朱華敷廣墀。綠芷、曲沼に榮え、朱華、廣墀に敷く。
 情宣寄高文。憂襟爲之披。情、宣べて高文に寄せ、憂襟、これが爲に披く。
 觴來不敢訴。慮此朋歡虧。觴來つて敢て訴へず、この朋歡の虧くるを慮る。
 何以淹返旆。頽光願遲遲。何を以て返旆を淹めむ、頽光、願はくは遲遅たれ。

【字解】【一】 暇哉況茲時。況んや茲時の暇なるに於てをやといふこと、刺下は時局困難なる争亂の世であるといふ意。【二】 金閨。金閨は金馬門、史記の滑稽列傳、東方朔の語に「世を金馬門に避く」とある。宮門の名で、つまり、宮中に出入する身分。英は英才。杜甫が李白に贈つた詩に「李侯金閨彦」とある。【三】 中筵。筵中に同じ。【四】 光儀。光彩ある儀容。【五】 名園。綠水園を指す。【六】 修禊。正韻に「祓禊は除惡の祭名」とある。三月三日は、江上に於て禊事を修し、且つ曲水の宴を爲すのが一般の風俗である。【七】 春陽熙。春の日が熙熙として輝く。【八】 綠芷。芷は本草に「一名芳香、一名澤芬、河東川谷の中に生ず、主として肌膚を長じ、顔色を潤澤にす、面脂と作すべし」とあり、離騷にも「江離與辟芷兮」とある。すると、香草の一種で、水邊又は澤地に生ずるものと見える。【九】 廣墀。墀は、説文徐鉉の注に「階上の地なり」とある。【一〇】 朋歡。朋友會飲の興。【一一】 淹。とどめる。【一二】 返旆。かへり行く旗。【一三】 頽光。落つる日、夕陽。

【題義】 綠水園は、卷四に見えた來鴻軒のある園の總名で、その處にも引いて置いたが、姑蘇志に「吳縣の綠水園は、孫老橋東に在り、故と朱勳の別墅たり、元の至正中、廬山の陳汝秩・汝言兄弟、これを購ひ得、杜詩、名園依綠水の句を取つて、以て名づく。來鴻軒・清冷閣・羅徑等の名あり。高啓、詩序を撰す」とある。この詩は、ある年、三月上巳の後、園中に於て宴を催したるに因り、その席上に於て作つたのである。

【詩意】 世と相關せざる此身は、平生、良會少く、まして、時局多難なる争亂の世に於ては猶更の事、ここに、金馬門に奉仕する英才の士に逢ひ、筵中に於て、光彩ある其儀容に接するを得たるは、まことに望外の幸である。今しも、上巳修禊の節を過ぎ、景色は極めて麗かに、春の日は熙熙として輝いて居る。綠なる芷草は、曲れる池の邊に伸び、紅の花は、廣い石だたみの上に散り敷いて居る。そこで、情を抒べて、名文に託されたのを見ると、憂に閉ぢたる我が襟懷も、これが爲に披く様であるし、巡つて來た杯を敢て辭まず、強ひて酌むのも、この席上に於ける朋友團樂の喜の虧くるを氣遣ふからである。さて如何にして歸り行く大旆を引き留めて、更に十分の興を縱にすべきか、願はくは、夕日よ、遲遅として、さう早く西に没せぬ様にして呉れる。

【餘論】 起四句は、席上名士に邂逅したる喜を敘し、名園の四句は、眼前の景色、情宣の四句は、文酒歡を爲すことを寫し、何以の二句は、更に一步を踏過して、收束したのである。

答宋南宮見寄

宋南宮の寄せらるるに答ふ

棲寓豈高遁。偶家南渚濱。
 雖欣遠物累。終悲寡交親。
 擊舟近入郭。言欲訪故人。
 叩門子不在。思懷竟難伸。
 歸來掩蓬廬。幽臥屬始春。
 風暄柳意動。雪霽禽聲新。
 孤游呵芳物。尊酌孰與陳。
 念昔文翰場。弱蹤繼清塵。
 鳴絃東閣夜。飛蓋西園晨。
 茲歡與年徂。憔悴兩未振。
 朝蒙枉瓊藻。慰我佇慕勤。
 深情寄妍詞。不殊握中珍。

棲寓、豈に高遁ならむや、偶ま南渚の濱に家す。
 物累に遠ざかるを欣ぶと雖も、終に交親寡きを悲む。
 舟を撃して、近ごろ郭に入り、言に故人を訪はむと欲す。
 門を叩けども、子、在らず、思懷、竟に伸べ難し。
 歸り來つて蓬廬を掩ひ、幽臥、始春に屬す。
 風暄にして柳意動き、雪霽れて禽聲新なり。
 孤游、芳物を呵、尊酌、孰れか興に陳せむ。
 念ふ昔、文翰の場、弱蹤、清塵を繼ぐ。
 絃を鳴らす東閣の夜、蓋を飛ばす西園の晨。
 この歡、年とともに徂き、憔悴兩つながら未だ振はず。
 朝に瓊藻を枉ぐるを蒙り、我が佇慕の勤を慰む。
 深情、妍詞に寄せ、握中の珍に殊ならず。

居屯在守志。養素豈辭貧。
 裁章以少答。此道願無淪。

屯に居る志を守るに在り、素を養ふ、豈に貧を辭せむや。
 章を裁して、以て少らく答ふ、この道、願はくは淪むること
 「となからむ」

【字解】(一) 棲寓 題下の原注に「時に江上に寓す」とあつて、これは、妻の里方周仲達の家に假寓して居た時であらう。【三】
 高遁 超然として此世を遁れる。【四】 南渚 南の江岸。【五】 物累 さまさまの係累。【六】 擊舟 舟を漕ぐ、李觀の詩に「擊舟古
 岸邊とある。【七】 言、言、言、言」と訓すべし。【八】 思懷 二字ともに思ひ。【九】 呵 見る、眺める。【一〇】 芳物 春の節物。【一〇】
 尊酌 一樽を酌む。【一一】 幽臥 覺束なき眠。【一二】 東閣 漢書公孫弘傳に「數年にして宰相封侯に至る。ここに於て、客館を起
 し、東閣を開き、以て賢人を延き、ともに謀議に參ぜしむ」とある。【一三】 飛蓋 蓋は車蓋、車の上によら下つて居る笠の如きもの。
 【一四】 西園 曹植の公廩の時に、清夜游西園、飛蓋相追隨とある。【一五】 枉瓊藻 立派な詩を寄せられた。章應物(の詩に)晨坐枉瓊
 藻とある。【一六】 佇慕勤 佇み慕ふ思ひの切なること。【一七】 握中珍 手に握つて居る珍寶。【一八】 居屯 屯は易の卦名、運命
 の塞がつて居ること、袁桷の詩に「居屯豈爲折」とある。【一九】 養素 素は本心。【二〇】 裁章 詩を作る。【二一】 少答 取り敢へず
 御答とする。

【題義】 宋南宮は、前に卷三、春日懷三十友の詩の中に見えて居る宋克、字を仲温といふ人で、南宮
 里に家して居たから、宋南宮といつたのである。この詩は、青邱が江上に假寓して居た時、ある日、
 態度、蘇州に往つて訪問した處が、生憎不在であつて、その後、南宮から、その詫の積りでもあらう、
 特に詩を贈つて來たから、これに答へて作つたのである。

【詩意】 われは、高遁する積りでも無いが、偶然、この江上に居り、南渚の邊なる妻の實家に假寓し

て居る。さまざまの係累に遠ざかつて居るのは、まことに嬉しいが、親密なる朋友に乏しいのは、悲しいことである。先日、舟を漕がせて城中に入り、昔馴染の人人を訪問せむとし、第一に、君の門を叩いた處が、折悪しく不在で、お目に掛らず、相思の鬱懐は、遂に伸べることが出来なかつた。そこで、止むなく歸つて来て、八重葎茂れる宿の戸を掩うて、ひとり横に成つて居ると、折しも、春の初、風の暖かなる儘、柳は生意動いて芽を發し、雪は霽れて、鳥の聲が耳新しく聞こえた。しかし、唯だ一人で遊び興じて、春の節物を眺める譯にも行かず、一樽の酒を酌むにも、相手が無いから、物足らぬ想のみして、まことに詰まらない。おもへば昔、文墨の場に入出した時、わが覺束なき足跡を以て、君の踏める清塵に接し、ある時は、宰相が客を延く東閣に參して、夜、琴を弾じ、ある時は、名流の打集ふ清筵に陪し、車に乗つて、朝に西園に赴き、その都度、君の御引立を蒙つた。しかも、この喜は、年と共に消えて去り、今や、君も我も憔悴して、また盛り返すにも及ばない。今朝は、見事なる詩を寄せて、わが佇立思慕の切なるを慰められ、妍麗なる文句の中には、深婉なる情緒が含まれて居て、手に握る珍寶にも異ならない。元來、運命の塞がつた境涯に居れば、あくまで本來の志を守るべく、その本心を涵養するに就いては、貧苦などは、何でも無いことである。そこで、詩を裁し、取り敢へず、お答とするが、君も亦た此道を抱持し、決して、淪没せぬ様に致して貰ひたいものである。

【餘論】起首より尊酌孰與陳に至る十四句は、南宮を訪うて遇はざりし其前後の事を敘し、念昔文翰場の六句は、更に進んで、今昔を俯仰し、朝蒙枉璫藻の八句は、贈答の真意を述べ、その中、居屯在守志の二句は、格言めいて、殊に面白く、これを以て自ら警め、且つ彼に望んだのである。

夢梅堂

夢梅堂

寢齋掩殘雪、幽幔燈微皎。

寢齋、殘雪に掩はれ、幽幔、燈、微に皎たり。

不知南澗濱、魂與春縈繞。

南澗の濱たるを知らず、魂は春と縈繞す。

初迷月入樹、忽斷風驚篠。

初め迷うて、月、樹に入り、忽ち斷えて、風、篠を驚かす。

餘馥悵難尋、空山鶴鳴曉。

餘馥、悵として尋ね難し、空山、鶴、曉に鳴く。

【字解】(一) 寢齋、寢室。無論、書齋と兼用して居るのであらう。(二) 幽幔、深く垂れこめたる戸ばり。(三) 初迷、夢中に迷ふこと。(四) 忽斷、俄然として夢の醒めること。(五) 篠、廣韻に「細竹なり」とある。(六) 餘馥、餘香に同じ。

【題義】夢梅堂は、何處の何人の家に在るのか分からぬ。甚だ覺束ない様だが、前詩に偶家南澗濱といひ、この詩に不知南澗濱とあるを見れば、江上周氏の宅に於ける作者の寓室に外ならず、唯だ一寸名づけて見たのでは無いかとも思はれる。

【詩意】春、なほ淺くして、わが寢室は、殘雪に掩はれ、深く垂れこめたる戸ばりの中には、燈火消えがてにして、微光を放つて居る。ここは、南洲の濱なることをも知らず、わが魂は、春ともつれ合つて、萬梅花薫する處に飛んで往つた。その初めて夢中に迷うたのは、月が梅の木の間に落ちた時で、あたりの仄白きを覺えたのみであつたが、忽然として、夢が醒めると、風が細竹を揺り動かし、全く其聲に驚かされたものと分かつた。しかも、幻境すでに去り、夢中の餘香、遂に尋ね難きは、まことに恨むべく、やがて、空山の中に鶴が鳴いて、いつしか、夜は明け離れて仕舞つた。

【餘論】夢寐恍惚の景を寫し出し、かなり面白く出來て居るのみならず、結二句は、杳然として神遠きを覺える。

送程校理游江上

程校理の江上に遊ぶを送る

風亭 離管 草綠 江水暮

風亭、離管、曩たり、草は綠に、江水暮る。

送此南浦人 孤帆 雨中渡

この南浦の人を送れば、孤帆、雨中に渡る。

別觴 足自緩 前驛 花滿路

別觴、自ら緩うするに足る、前驛、花、路に滿つ。

春叢 戀山鶯 晚絮 迷汀鷺

春叢、山鶯を戀ひ、晚絮、汀鷺を迷はしむ。

我今獨愁居 芳月誰與度

われ、今、ひとり愁居、芳月、誰と度らむ。

佇立望遙波 相思積煙霧

佇立して遙波を望めば、相思、煙霧よりも積む。

【字解】【一】風亭 春風の吹き滿つる亭。【二】曩 餘韻の長く曠く曠。【三】離管 別を惜んで吹く笛。【四】別觴 一に別語に作る、或は其方が善いかも知れぬ。【五】晚絮 日暮に飛ぶ柳の花。【六】芳月 春の盛なる月、即ち陰曆三月を云ふ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、程校理の名字、閔歴、江上とは何地を指すか、ともに不詳。

【詩意】春風の吹き滿つる亭榭に於ては、別を惜んで吹く笛の音が、餘韻曩曩として絶えず、草色方に綠にして、江水も暮れなむとして居る。ここに、君を送る爲に、南浦に來て見ると、君は、孤帆を掛けて、雨中に大江を渡るとのことである。君は、別れの此杯を傾けても、さばかり心を傷ましめず、聊か自ら氣を緩くすれば善い。何故とならば、對岸の亭驛に於ては、今しも、花が眞盛りで、行く手の路に滿ち、随分面白い眺が出来るからで、到る處の花の林は、鶯を引き留め、日暮に飛ぶ柳の花の白きは、汀に立つ鶯と見あやまる程である。但し、われは、獨り此に取残されて、豈に陽三月を誰と共に觀賞して暮らさうか。そこで、江頭に佇んで、遙かなる波路を望めば、相思の念は、煙霧よりも深くして、心自ら感ふのみである。

【餘論】起四句は題意の正面、次の四句は旅中の風物、甚だ佳なることを想像し、結四句は、他日相思の念よ切なるを言ひ、全體に於て、一往情深く、能く人を移すものである。

僧齋聞雨

僧齋、雨を聞く

寂寂初罷語。悠悠未成眠。

寂寂として初めて語を罷め、悠悠として未だ眠を成さず。

高齋有春雨。夜半落燈前。

高齋、春雨あり、夜半、燈前に落つ。

已傷花委樹。復念水盈田。

已に傷む花の樹に委するを、復た念ふ水の田に盈つるを。

老衲獨無聽。繩牀方坐禪。

老衲、ひとり聽くなし、繩牀、方に坐禪するを。

【字解】「一」委樹、一寸變な用語であるが、木から落ちて地に委すること、又委は妻に通じて、木の上で萎むといふことかも知れぬ。いづれにしても稍や面白くない。「二」老衲、老僧に同じ。「三」繩牀、繩で造つた圓坐を鋪いた匡牀であらう。張籍の詩に遇、齋長不出、坐臥一繩牀とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】寂寂として、初めて語を止めたが、長夜悠悠として、まだ眠りつかぬ。高樓の外には、春雨降りしきり、夜半になると、燈前にも落ちて来るやうに思はれた。この雨の爲に、花が木から飛び散るは、まことに傷むべく、しかし、水は定めて田に盈ちて、百姓達は喜ぶことであらう。老僧は、ひとり之を聴かぬかの如く、繩牀の上に坐して、今しも禪を試みて居る。

【餘論】平平として他の奇なく、結二句に因つて、その僧齋たるを知るのみである。

懷徐七

徐七を懷ふ

哀鴻已鳴渚。落葉初覆陌。

哀鴻、すでに渚に鳴き、落葉、はじめて陌を覆ふ。

故園當授衣。却思遠行客。

故園、授衣に當り、却つて思ふ、遠行の客。

客行日已遠。我思日已積。

客行、日に日に遠く、我が思、日に日に積む。

東南望歸權。鳥去煙波夕。

東南、歸權を望めば、鳥は去る煙波の夕。

憂來不成言。滿抱空戚戚。

憂來つて言を成さず、滿抱、空しく戚戚。

豈無一尊酒。黃花爲誰摘。

豈に一尊の酒なからむや、黃花、誰が爲にか摘まん。

【字解】「一」覆陌、覆は掩ひかぶさる、陌は大路。「二」授衣、前に見ゆ、詩經の幽風七月に九月授衣とある。「三」歸權、權は棹、ここでは歸舟に同じ。「四」滿抱、抱は懷抱。「五」黃花、菊を云ふ。

【題義】徐七賁は、無論、徐賁で、七は例の排行。徐賁は、前に春日懷二十友の詩中にも見えて居た。この詩は、即ち其人に寄懐したのである。

【詩意】南飛の雁は、すでに江渚に鳴いて、その聲、いとも悲しく、落葉は、初めて大路を掩ふやうに成つた。われは、故郷に居て、九月衣を授くる季節に遇ひ、却つて、遠く旅行する我が友を懷うて居る。旅ゆく我が友は、日に日に已に遠く隔り、そして、我が思は、日に日に積むばかり。君の歸

舟は、東南から来る筈であるから、その方を望めども、煙波渺茫の夕まぐれ、唯だ鳥が飛ぶのみである。かくて、憂來れば、黙して物いはず、胸中空しく戚戚、ここに一樽の酒が有るには有るが、折から、重陽に近く咲き出でた菊花を誰が爲に摘まうか。唯だ一人では、菊を摘む氣にもならず、従つて、酒も飲みたくない様な次第である。

【餘論】起四句は、節物より懷友の情緒を引き出し、次の四句は、相思の切なるを述べ、結四句は、尊酒ひとり酌むに忍びざるを言ひ、側筆を併せて、題意を全うしたのである。

四柏

四柏

堂前四小柏。羅立二尺長。

堂前の四小柏、羅立、二尺長し。

始栽附南墀。遠移自東岡。

はじめ栽ゑしときは南墀に附し、遠く東岡より移す。

春夏衆草芳。翳沒成久荒。

春夏、衆草の芳、翳沒して久荒を成す。

低枝網蟲懸。暗葉螻蟻藏。

低枝、網蟲懸り、暗葉、螻蟻藏す。

不沾夕露氣。每隔朝陽光。

夕露の氣に沾はず、毎に朝陽の光を隔つ。

我病廢芟理。覽之屢彷徨。

我、病んで芟理を廢し、これを覽て、屢は彷徨。

玄冬戒嚴候。迅風激飛霜。

玄冬戒嚴の候、迅風、飛霜を激す。

蕪穢忽自除。鬱然露蒼蒼。

蕪穢、忽ち自ら除き、鬱然として蒼蒼を露はす。

恍若羣鳥散。鷓雛得翱翔。

恍として、羣鳥散じ、鷓雛の翱翔を得るが若し。

乃知受命正。雖弱自可強。

乃ち知る、受命の正しき、弱と雖も、自ら強うすべきを。

循步賞勁色。撫攀挹微香。

歩に循つて勁色を賞し、撫攀して微香を挹す。

幸得依我居。勿令縱牛羊。

幸に我が居に依るを得たり、牛羊を縱たしむる勿れ。

他年培養成。凌雲孰能量。

他年、培養成らば、凌雲、孰れか能く量らむ。

後凋誠足貴。蚤厄庸何傷。

後凋、誠に貴ぶに足れり、蚤厄、庸何ぞ傷まむ。

【字解】【一】羅立。羅列して立つ。【二】南墀。墀は階下の地。【三】翳沒。物がけに成つて隠れる。【四】網蟲。蜘蛛の類。

【五】芟理。雜草を刈つて蕪穢を治める。【六】玄冬。冬は五行の上から黑色に配せらるるが故に云ふ。【七】戒嚴。用心して保護する。【八】蒼蒼。柏の枝葉の青青したるをいふ。【九】恍。恍然、宛然。【一〇】鷓雛。莊子秋水の注に「鷓雛は鸞鳳の屬なり」とある。【一一】受命正。天より命を受けたる、ことが正しい、特性の正しきこと。【一二】循步。足の向くままに歩む。【一三】後凋。史記伯夷列傳に「歳寒くして、然る後に、松柏の凋むに後るを知る」とあつて、その注に「何晏曰く、大寒の後、衆木皆死す、然る後、松柏は凋傷少し。平歲には、衆木も亦た死せざるものあり、故に歳寒を須つて、然る後に之を別つ。凡そ、人、治世に處つては、亦た能く自ら修整して、君子と同じきも、濁世に在つて、然る後に、君子の正、苟くも容れざるを知るに喩ふるなり」とある。【一四】

五言古詩 四 柏

【題義】これは、堂前に植ゑてある四本の柏樹を詠じたのである。柏は、邦語で、かや、或はかしはと訓すれども、實は當らないので、和名かえ、俗に白檜、唐檜葉、兒手柏、阿須奈呂といひ、主要なる香木の一種である。本草に「松柏、以て百木の長となす。凡そ、萬木、皆陽に向ふ、柏、ひとり陰木にして、西を指す、猶は鍼の北を指すが如し、故に、字、白に従ふ、白は西方なり、俗に栢に作る。蓋し、この木、至つて堅くして、霜雪を畏れず、多壽の木なり」とある。

【詩意】わが堂前には、小さな柏樹が四本あつて、羅列して植ゑられ、その丈、各二尺ばかり、もと遠く東岡より移して、はじめ、南の階下に接近して植ゑたのである。春夏の間、多くの草が勢よく伸びると、その蔭に没して見えなくなり、荒れはてた儘で、低い枝には、蜘蛛が網を張り、物かげの葉には、蟻などが隠れて居た。かくて、夕の露の氣にも濡はず、毎隔てられて朝日の光にも當らず、まことに、氣の毒な有様であつた。その頃、自分は、病氣であつた爲に、草を抜いて、園中を綺麗にすることも出来ず、これを見て、屢ばうろついて嘆息する位。兎角する内に、あらゆる物を用心して保護すべき冬の期節になると、烈しい北風が霜を飛ばした爲に、今までの荒蕪汚穢は、見る間に、自然取り除かれ、柏樹は、鬱然として、蒼蒼たる枝葉を顯はして來た。これを譬ふれば、羣がる鳥どもが飛び散じて、鸞鳳が始めて自由に翱翔することの出來たと同じである。されば、天より命を受くる

ことの正しきものは、たとひ、弱弱しげに見えても、自然、強健に成り得るものだといふことが分かつた。そこで、足の向くままに、歩を移して、風霜にもめげぬ勁さうな翠色を賞し、これを撫でると、物とはなしに、香ばしい様な氣がした。この柏樹は、幸に我が宅に植ゑられたので、決して牛羊などに踏ますことは無い。他年培養の功成らば、亭亭として、雲を凌ぐ様にもなり、その高さも、到底測られぬ位であらう。これに就けても、萬木に後れて測むといふ其高節は、まことに貴ぶべく、小さい時に災厄を免れぬことなどは、決して傷むに足らぬことである。

【餘論】この詩は、聊か韓愈の庭楸の筆意を學んだものと見えるが、旨意平明にして、稍や人に近きを覺える。起四句は、四柏の由來、春夏衆草芳の八句は、柏樹の雜草に苛められたことを敘し、玄冬戒嚴候の八句は、冬に成つて却つて勢を得たことを寫し、循歩賞勁色の八句は、即ち感懷で、後測の十字は、大器晩成、もしくは天定まつて人に勝つといふ様な意である。

西臺慟哭詩

西臺慟哭の詩

越人謝翱嘗爲宋丞相文山公之客。公死之十二年。登釣臺。祭公以哭。自爲文。識其哀。曰西臺慟哭記。東陽張孟兼持示求詩。僕感其誼。遂賦。

一首

【調讀】越人謝翺、かつて、宋の丞相文山公の客となる。公死するの十二年、釣臺に登り、公を祭つて以て哭し、自ら文を爲つて、その哀を識し、西臺慟哭記といふ。東陽の張孟兼、持示して詩を求む。僕、その誼に感じ、遂に一首を賦す。

峩峩子陵臺、其下大江奔。

峩峩たる子陵臺、その下、大江奔る。

何人此登高、慟哭白日昏。

何人か此に高きに登り、慟哭して白日昏き。

哀哉宋遺臣、舊客丞相門。

哀しいかな、宋の遺臣、舊と丞相の門に客たり。

丞相既死節、有身恥空存。

丞相、すでに節に死し、身あり、空しく存するを恥づ。

北望萬里天、再拜奠酒尊。

北に望む萬里の天、再拜して酒尊を奠す。

陰雲暮飛來、恍如載忠魂。

陰雲暮に飛び來り、恍として、忠魂を載するが如し。

所哭豈窮途、中抱千古冤。

哭するところは、豈に窮途ならむや、中に抱く千古の冤。

上悲宗周隕、下念國士恩。

上、宗周の隕つるを悲み、下、國士の恩を念ふ。

淒涼當世事、感慨平生言。

淒涼當世の事、感慨平生の言。

空山誰知哀、惟有猴與猿。

空山、誰か哀を知る、惟だ猴と猿とあるのみ。

豈不畏衆驚、聲發不忍吞。

豈に衆の驚くを畏れざらむや、聲、發して吞むに忍びず。

人言天有耳、此哭寧不聞。

人は言ふ天に耳ありと、この哭、むしろ聞かざらむや。

願因長風還、吹此血淚痕。

願はくは、長風に因つて還り、この血淚の痕を吹き、

往墮燕山隅、一灑宿草根。

往いて燕山の隅に墮し、一たび宿草の根に灑がむ。

田橫去已遠、茲道不復論。

田橫去つて、すでに遠く、この道、復た論せず。

作歌悼往事、庶使薄俗敦。

歌を作つて往事を悼む、庶はくは薄俗をして敦からしめむ。

【字解】(一) 峩峩、高峻の貌。(二) 子陵臺、一統志に「嚴州府城の東五十里、東西二臺、各高さ數百尺、漢の嚴子陵、釣を垂るる處」とある。(三) 大江、一統志に「釣臺の下、七里灘」とある。(四) 宋遺臣、謝翺を指す。その略傳は、題辭の條に記すことにする。(五) 丞相既死節、元史に「天祥、燕に留まること三年、一小樓に坐臥し、足、地を履まず。至元十九年、閩僧あり、言ふ、土屋、帝座を犯す、疑ふらくは變あらむ」と。未だ幾ならずして、中山の狂人、自ら宋主と稱し、衆千人あり、文丞相を取らむと欲す。帝、乃ち天祥を召して入らしめ、これに諭して曰く、汝、何をか願ふ。天祥曰く、天祥、宋の宰相たり、安んぞ、二姓に事へむや。願はくは、一死を賜はば足れりと。乃ち詔して、燕の樂市に殺す。刑に臨んで從容、南に向つて拜して死す」とある。(六) 奠、物を供へて祭を爲す。(七) 窮途、晉書阮籍傳に「時に獨り駕して、徑路に由らず、跡窮まれば、即ち慟哭して反る」とある。(八) 宗周隕、天下で宗としたる周室

が滅亡する。左傳に「宗周の傾ちむことを憂ふ」とある。【九】國士恩。史記刺客傳に、豫讓の言を記して「智伯は、國士を以て我を遇す、我、故に國士として之に報ゆ」とある。國士とは、一國に冠たる名士。【一〇】感慨平生言。謝翱の西臺慟哭記に「公、事を以て、憂難陽及び頽杲晦の嘗て往來せし處を過ぎ、感歎慷慨、卒に其言に負かず、而して、これに従つて游ぶ、今、その時、具さに在り、考ふべきなり」とある。【一一】空山誰知真。西臺慟哭記に「嗚呼、阮步兵死して、空山哭聲なきこと、且きに千年ならむとす」とある。【一二】天有耳。三國志の蜀志秦宓傳に「吳、張温をして來り聘せしむ。温問うて曰く、天に頭あるか。宓曰く、之あり、西方に在り、時に曰く、乃眷西顧と。天に耳あるか。宓曰く、之あり、天は高きに處つて卑きを聽く、時に曰く、鶴鳴于九皋、聲聞于天」とある。【一三】長風。晉書宗愨傳に「叔父、志ざすところを問ふ。愨曰く、願はくは、長風に乘じて萬里の浪を破らむ」とある。【一四】燕山岡。燕京は今の北平、その一隅は即ち樂市を指す。【一五】宿草。文天祥の墓を指したので、禮記の檀弓に「朋友の墓、宿草あつて哭せず」とある。【一六】田橫。前に送客之海上の詩中にも引いたが、史記田橫傳に「漢王、立つて皇帝となる。田橫、その徒屬五百人と海に入つて島中に居る。高帝、これに聞ず。横、乃ち其客二人と偕に乘じて洛陽に詣らむとし、未だ至らざること三十里、尸鄉の厓置に至つて、遂に自刎して死す」とある。【一七】茲道。死を以て知己に報すること。【一八】薄俗教。末世の薄俗なる風俗を引き戻して再び敦厚にする。

【題義】小引の意味は——越人謝翱といふもの、かつて宋の丞相文天祥の客となつて、その知遇を受けて居た。そこで、天祥死後十二年、嚴子陵の釣臺に登り、天祥を祭つて慟哭し、仍つて、自ら文章を作つて、その悲哀を記したのが、即ち西臺慟哭記である。ここに、東陽の張孟兼といふもの、その慟哭記を持參して予に示し、且つ詩を求めた。予は、その厚誼に感じて、遂に一首を賦した——と、かういふのである。この中、文山は文天祥の號。東陽の張孟兼の字。竝に閱歷は不詳。謝翱は、宋史に、長溪の人、

浦城に徙る。字は阜羽、側僮にして大節あり。會ま、丞相文天祥、府を延平に開くや、郷兵數百人を率ひ、策に杖いて軍門に詣り、諮議參軍に署せらる。すでにして、復た別れ去る。天祥の節に死するを聞くに及んで、悲禁する能はず。隻影、浙水を行游し、嚴陵を過ぎて西臺に登り、天祥の主を設け、酌奠號泣、竹如意を以て石を撃ち、招魂の詞を歌ひ、竹石ともに碎く。因つて、西臺慟哭記を作る。性、佳山水を嗜み、凡そ雁山・天姥・四明、奇を搜り、秘を扶し、足跡殆んど遍ねし。元の元貞の初、杭に卒す、年四十七。その友、方鳳・吳思齊輩、これを釣臺の南に葬り、文稿を以て殉す。翱、自ら啼髪子と號す、著すところを啼髮集といふ。又天地間集・浦陽先民傳等あり」と記してある。それから、念の爲に、西臺慟哭記の本文を少しばかり引くと、「これより先一日、友人甲乙若しくは丙と約し、越宿して集まる。午雨、未だ至らず、榜を江浚に買ひ、岸に登つて子陵の祠に調し、祠傍の僧舎に憩ふ、盤垣枯甃、墟墓に入るが如し。還つて榜人と祭具を治む。須臾にして雨止む。西臺に登り、主を荒亭の隅に設け、再拜して跪伏す。祝し畢り、號して慟哭するもの三たび、復た再拜して起つ。又念ふ、余弱冠の時、往來必ず祠下に謁拜せしを。その始めて至るや、先君に侍す。今余且さに老いむとす、江山人物、瞻焉として失ふが若し。復た東望泣拜して止まず。雲あり、南より來る、滄溘滄鬱、氣、林木に薄り、相助けて以て悲む者の如し。乃ち竹如意を以て石を撃ち、楚歌を作つて、これを招いて曰く、魂朝往兮何極、暮來歸兮關水黑、化爲朱鳥一分有、味焉食と。歌闕つて、竹石ともに碎く。ここに于

て相向つて感喟す。復た東臺に登り、蒼石を撫し、還つて榜中に憩ふ。榜人、はじめて余の哭に驚いて云ふ、適ま遷舟の過ぐるあるなり、盍ぞ諸に移さざると。遂に榜を中流に移し、酒を擧げて相屬し、各詩を爲り、以て思ふところを寄す」とある。要するに、謝翺の慟哭は、その義烈、千古に彪炳して、まことに絶好の詩題であるところから、青邱も、友人の囑を得て、大に喜び、乗り氣になつて、この詩を作つたのであらう。

【詩意】名だたる子陵の釣臺は、峨峨として岸上に聳え、その下には、七里灘の江水が滔滔として流れて居る。この高臺に、何人が登つて、慟哭の聲、極めて悲しく、やがて、白日を昏くしたのであるか。それは、即ち宋の遺臣として知られた謝翺その人で、もと丞相たりし文天祥の門下に客となつて居たものである。その天祥は、すでに節に死んだから、この身の獨り空しく生存して居るのを恥ぢて居た。そこで、この臺に登り、北、萬里の天を望み、再拜跪伏、酒を奠し、謹んで祭を爲した。その時、日が暮れかかり、陰雲一片、南より飛び來り、恍然として、丞相の忠魂を載するかと疑はれた。謝翺の慟哭したのは、かの阮籍が區區として窮途を悲んだのとは、全く異にして、その心中には、千古消ゆべからざる冤恨を抱いて居たからで、上は宗周に比すべき趙宋の滅亡を悲み、下は國士を以て待遇された天祥の殊恩を念うて居たからである。當世の事は、興亡轉瞬、淒涼の極、語るに堪へず、天祥が平生の言葉は、今、おもひ出して、感慨の途を増すを覺える。しかし、空山人なく、この悲哀を解するも

のは、唯だ猿のみである。ここに來て、遠慮なく慟哭した時、人の驚いて聞くことを氣遣はない譯でもないが、自然に聲が發して、それを吞むことが出来なかつた。天に耳ありとは、かつて聞いたことで、天は、定めて之を聞いたであらう。そこで、長風が還つて來たならば、願はくは、この血涙の痕を吹いて、はるかに燕山の一隅に落し、そして、丞相の墓上なる宿草の根もとに灑ぐ様にして貰ひたい。願みれば、田横、去つて既に遠く、五百の門下、何處に往きしか。身を以て知己に殉するといふ此道は、今や全く忘れられて、誰も口にするものもない位。そこで、われは歌を作つて、往事を痛悼するので、庶幾はくは、世の薄俗を引き戻して、再び敦厚に致したいものである。

【餘論】起四句は總提、哀哉宋遺臣より感慨平生言に至る十四句は、謝翺當日の行事の大略を敘し、空山誰知哀より一灑宿草根に至る十句は、謝翺に代つて、その胸中の感慨を抒べ、殊に人言天有耳以下の數句は、悲壯淋漓、血涙ともに下るの慨がある。田横去已遠の四句は、青邱が此詩を作つた所以を追記し、稍や朴實ではあるが、決して蛇足ではない。これを要するに、この篇は、絶好の題目であるだけに、用筆自然快利、殊に目新しく覺える。

見耕者

耕者を見る

茲晨有佳興。挈杖行遠墟。この晨、佳興あり、杖を挈げて遠墟を行る。

春犁稍已出。土脈向暖舒。
 春犁、稍や已に出で、土脈、暖に向つて舒ぶ。
 嚶嚶鳥嘒谷。瀏瀏泉鳴渠。
 嚶嚶として、鳥、谷に嘒り、瀏瀏として、泉、渠に鳴る。
 歲功自茲始。爲農亦良劬。
 歲功、これより始む、農を爲す亦た良劬。
 而我情四體。偃息在弊廬。
 而して我、四體を情り、偃息して弊廬に在り。
 飢匱固當爾。無爲歎踟躕。
 飢匱固より當に爾るべし、歎じて踟躕するを爲すなかれ。

【字解】【一】佳興、面白き興會。【二】翠杖、杖を指へる。【三】行、めぐる。【四】遠墟、遠い村里。【五】春犁、春に乗じて耕すもの。【六】土脈、土の命脈。【七】嚶嚶、相和鳴する聲。【八】瀏瀏、水の勢よく鳴り響く聲。【九】渠、流に同じ。【一〇】歲功、この年の仕事。【一一】良劬、勉は勞、勤苦。【一二】四體、兩手と兩足。【一三】偃息、偃臥して休息する。【一四】飢匱、既は物質の缺乏。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】今朝、偶然、興を催したるに因り、杖を引きすつて、散歩しつつ、遠い村里を巡つて見た。到る處、春に乗じて耕す人人が、ぼつぼつと野らに出で、そして、土の命脈も暖氣を帯び、ふつくりと舒びやかである。鳥は、嚶嚶相和して、谷中に鳴き、泉は、瀏瀏ひとり鳴つて、溝の中を勢よく流れて居る。一年の仕事は、これから始まるので、農業は、ことに効果ある勤勞である。しかし、予は、手足ともに懶くだるく、唯だ偃臥休息して、弊廬に引き籠つて居る。かくては、平生、飢に苦み、物資

の缺乏するのにも全く自業自得で當然の事、わが身の不遇を嘆息して、愚圖愚圖する處ではないと思ひ、流石に、ひと奮發して見やうといふ様な氣になつた。

【餘論】前の八句は、専ら耕者を敍し、後の四句は、自己の疎懶を言うて、襯映頗る妙、そして、その中に自奮の意が含まれて居る。

雨中書湖上漁家壁

雨中、湖上漁家の壁に書す

漁舍煙不起。瀟瀟雨初暝。
 漁舍、煙、起らず、瀟瀟として、雨、初めて暝す。
 孤客與羣鷗。寒依葦間聽。
 孤客と羣鷗と、寒くして葦間に依つて聽く。
 山昏望易失。波動愁難定。
 山は昏くして望失ひ易く、波は動いて愁定め難し。
 歸思滿蒼茫。空憐去帆迴。
 歸思、蒼茫に滿つ、空しく憐む去帆の迴なるを。

【字解】【一】漁舍、漁家に同じ。【二】蒼茫、水天の間。【三】空憐、憐は羨む。

【題義】説明に及ばぬ。湖上とは、蓋し太湖であらう。

【詩意】漁家には、炊煙だに立ち上らず、瀟瀟たる雨の中に、日は既に暮れて仕舞つた。ここに宿せ

る孤客の我は、羣鷗と共に、寒さを忍びつつ、葦間に居ながら、雨の音を聴いて居る。眺めやれば、山は昏くして、忽ち見えなくなりさうであるし、波は動いて、愁情も亦た落ちつかない。早く家に歸りたい心は、水天蒼茫の間に満ち、仍つて、去帆の遙に過ぎ去るのを羨ましく思つた。

【餘論】前半は、漁家の低く蘆葦の間に在るを寫し、後半は、専ら遠景を敍して、歸思の切なるに及んだのである。

同杜二進士晚登潘氏樓

杜二進士と同じく、晩に潘氏の樓に登る

靄靄川樹暝、夕陽忽然收。靄靄として、川樹暝し、夕陽、忽然として收まる。

林間一鐘來、隴上衆未休。林間、一鐘來り、隴上、衆未休す。

維榜漁石邊、尋我棲寓儔。榜を維ぐ漁石の邊、我が棲寓の儔を尋ぬ。

本期散憂懷、攜手登此樓。本と憂懷を散せむことを期し、手を攜へて此樓に登る。

那知見遠色、蒼茫轉成愁。那ぞ知らむ、遠色を見、蒼茫、轉た愁を成すを。

幸茲有尊酌、雖晚爲君留。幸に茲に尊酌あり、晩と雖も、君が爲に留まる。

【字解】【一】靄靄、煙の立ち籠めた貌。【二】川樹、川原に植みである木。【三】隴上、細の中。【四】衆未、未は歸歟。【五】維榜、榜は小舟。【六】漁石、舟でも繋ぐ爲に、特に設置した石標であらう。【七】棲寓、旅寓中の交遊。【八】遠色、遠くより寄せて来る暮色。

【題義】説明に及ばぬ。但し、杜二進士の名字閱歴だの、潘氏樓の所在だのは、例の通り、さつぱり分からぬ。

【詩意】川原の木々は、煙立ちこめて、將に暮れなむとし、夕日は、忽然として收まつた。やがて、林間より鐘の音が一つ響き出すと、畑中に耕して居た者どもは、鋤犂を片づけて仕舞つた。この時しも、予は、舟を石標に繋ぎ、旅中の交遊たる杜二を尋ねた。もとより、憂懷を散せむが爲であつたら、やがて、手を攜へて、ここ潘家の高樓に上つた。處が料らざりき、遠色の蒼茫たるを眺むれば、郷里を思つて、愁を生せむとは。幸にして、此に一尊の酒が用意してあるから、日が暮れてもかまはず、君の爲に留まつて、十分痛飲を爲さうではないか。

【餘論】起四句は晩、次の四句は潘氏の樓に上る、次の四句は、杜二の爲にし、且つ自ら慰めむとして、特に尊酒を勧めたのである。一本には、隴上衆未休の下に、青山繞北郭、故園阻歸遊の二句があるさうで、意義は愈よ明かになるが、那知見遠色の二句が、勢を失ふところから、作者が自ら割つたのであらう。

送家兄西遷

家兄の西遷を送る

昔別歸有期。此別去何極。

むかし別れるる、歸るに期あり、この別去つて何ぞ極まらむ。

西遷屬事變。咎責非己得。

西遷、事變に屬し、咎責、己より得たるに非ず。

家貧無行資。空橐辭故國。

家貧にして行資なく、空橐、故國を辭す。

忽忽逐徒旅。宛宛謝親識。

忽忽として徒旅を逐ひ、宛宛として親識に謝す。

牽攀不能留。慟哭野水側。

牽攀、留むる能はず、慟哭す野水の側。

離鴻爲廻翔。浮雲暮愁色。

離鴻、爲に廻翔、浮雲、暮に色を愁へしむ。

別時雖云苦。未若別後憶。

別時、苦と云ふと雖も、未だ別後憶ふに若かず。

願行勿憂家。養親自我職。

願はくは行け、家を憂ふる勿れ、親を養ふは自ら我が職。

殊方氣候異。炎霧秋未息。

殊方、氣候異に、炎霧、秋、未だ息まず。

委命毋怨尤。長年強餐食。

命に委して怨尤する毋れ、長年、強ひて餐食せよ。

【字解】【一】非己得、自分から得たのではない、他の運命であるといふ意。

【二】行資、旅費。【三】空橐、から財布。【四】徒旅、多数の同行者。【五】宛宛、ありありと情思の見ゆる貌。【六】牽攀、車を引き止めて攀上る。【七】養親、この親は、兩

親ではなく、親戚であらう。青邱は早く其情持を喪つて居た。【八】殊方、遠地。【九】委命、天命に任かせる。【一〇】怨尤、うらみ替める。【一一】長年、今後の長い年。【一二】強餐食、勉強して食事をする。

【題義】青邱の兄は、唯だ一人で、名を吝といひ、前にも一寸見えなが、その人に就いては、青邱の門人呂勉の撰せる榘軒集の本傳に「稍や長じ、兄吝、淮右に戍す」とあるだけで、字も閥歴も分らないが、張士誠が呉に據つた時、これに隸屬して官吏となつて居たから、明の太祖が士誠を滅した時、他に徙されたので、史には、その官屬饒介等及び家屬流寓の人二十餘萬を金陵に徙すとある。この詩は、即ち其際、別を送つて作つたのである。

【詩意】むかし、君と別れるときには、歸期も前以て知れて居たから善かつたが、今回の別は、ここを去つて、どうなるか分からぬから、甚だ心細い。君の西遷されたのは、おもひがけぬ事變の爲であつて、咎を受け責を引くといふことは、何も自分で得たのではなく、全く御氣の毒な始末。家、もとより貧にして、旅費を調達することも出来ず、から財布の儘で故國を辭して、旅路に上られる。そこで、忽忽として忙しげに、多くの同行者の後を追ひ、宛宛として、さも忍びかねた様に、親戚に辭別された。われは、君の車を牽き止め、攀ち上つて見ても、公事自ら程あり、決して留めることも出来ず、覺えず、慟哭して野水の邊に倒れた。空を渡る失羣の雁も、これが爲に、飛び回り、浮雲も、これが爲に、日暮に愁の色を帯ぶ様に見えた。別れる時は、いかに苦しくとも、その場かぎりの事であるが、別れた後、

相思ふことの切なるは、更に甚しく、これからの事も思ひやられる。しかし、君、家の事は心配せずに行かれよ、一族の者を養ふことは、もとより我が職務であるから、お言葉がなくても、決して疏かには致さぬ積り。君が行かれる僻遠の地は、氣候も自然違つて居て、炎熱の氣を含める瘴霧は、秋に成つても、まだ消えない。そこで、何事も運命と諦め、天を怨むことなく、人を尤むることなく、今後長い年月の間、勉強して餐飯を加へ、第一身體を大切にして下さいと、折入つて、御願する次第である。

【餘論】起四句は、家兄西遷の事由、家貧無行資の八句は、別時の光景、別時雖云苦の八句は、主として、別後の事に係り、兩親の奉養には御心配なく、そして、養生が第一であるといつて、懇に囑付したのである。この中、別時以下の二十字は、情真にして意摯、まさしく、人を動かすものである。

至蓮村

蓮村に至る

昔愛茲里幽。誓將構蓬廬。
孰云墮世網。重到十載餘。
喪亂喜獨完。煙火靄舊墟。
柴門在深巷。落日榆柳疏。

昔この里の幽なるを愛し、誓つて將に蓬廬を構へむとす。
孰れか云はむ、世網に墮ち、重ねて到る十載餘ならむとは。
喪亂、ひとり完きを喜び、煙火、舊墟に靄たり。
柴門、深巷に在り、落日、榆柳疏なり。

鄰翁念契濶。攜筐饋雙魚。

鄰翁、契濶を念ひ、筐を攜へて雙魚を饋る。

苦問客何事。顔色與昔殊。

苦に問ふ、客、何事ぞ、顔色むかしと殊なりと。

焉知涉艱難。多戚長少娛。

焉んぞ知らむ艱難を涉り、戚多くして長しへに娛少きを。

貧賤非所恥。中情在閑居。

貧賤は恥づるところに非ず、中情は閑居に在り。

願翁勿相誚。終當遂吾初。

願はくは、翁、相誚る勿れ、終に當に吾が初を遂ぐべし。

【字解】【一】蓬廬、蓬の茂れる中の小舎。【二】契濶、契濶なること。【三】攜筐、筐は箱、同持の類であらう。【四】苦問、苦は難に。【五】遂吾初、わが初志を遂ぐ、吾書に「孫綽、會稽に居り、山水に遊放すること十餘年、遂初賦を作り、以て其意を致す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、蓮村に就いては、金檀も、その注を缺いて居るから、その所在等は分らない。

【詩意】むかし、この蓮村の靜幽なのが氣に入つて、いつかは、ここに來て、草小屋を構へやうと、自ら心に誓つた。しかも、圖らざりき、浮世の網に引ツかかり、再び此に來たのは、十餘年後に屬せむとは。幸に、喪亂に際しても、こののみ、ひとり完く、むかしの儘なる村里には、煙火が賑賑しく立ちこめて居る。わが尋ねる家は、深巷の中に柴門を開き、宅を繞つて、榆や柳を程よく植ゑて、夕日の

中に影を投じて居る。すると、鄰家の老人は、しばらく逢はなかつたことを思ひ出で、岡持に入れて鮮魚二尾を態態持参して贈られ、そして、われに向ひ、どう成されたか、お顔色は、丸で前年と違つた様に見えますといつて、懇に尋ねて呉れた。それも其筈、この十餘年間、さまざまの艱難を経、心配事のみ多く、歡娛は、長しへに稀であつたから、自然かくの如く憔悴したのである。抑も、貧賤は恥づべきものではないが、わが本心は、閑居に在るので、願はくは、翁よ、決して、わが志行相違ふことを請めずに置いて呉れ、いづれ終には、吾が初志を遂げ、この村に隱居して、お世話に成ることであらう。

【餘論】起八句は、蓮村に至りて目睹したる光景、鄰翁念三契淵の四句は、併せて其間に及び、焉知涉艱難の六句は、その筈を主とし、やがて、必ず初志を遂ぐべきを言うて、起首に願應したのである。

雨中登白蓮閣望故園

亭亭高閣上、渺渺清川曲。亭亭たる高閣の上、渺渺たる清川の曲。
日暮靄靄愁、離蘅雨中綠。日暮、靄靄たり、離蘅、雨中に綠なり。

聞鐘僧已返、荷笠人猶牧。鐘を聞いて、僧、すでに返り、笠を荷うて、人猶は牧す。

歸棹獨難尋、江南望雲木。歸棹、ひとり尋ね難し、江南に雲木を望む。

【字解】(一) 荷笠、客悉に同じ。(二) 離蘅、司馬相如の上林賦に離以三江蘅とある。蘅は、詳しく杜衡、屈原の離騷に芷葹兮荷之、離之兮杜衡とあり。本草の注に「葉、葵に似て、形、馬蹄の如し、故に馬蹄香といふ」とある。ともに、香草の名。

【題義】説明に及ばぬ。但し、金檀の説に據ると、白蓮閣は、白蓮寺の高閣で、白蓮寺は、前に次韻内弟周思敬秋夜同飲白蓮寺池上の詩に見えて居る。

【詩意】亭亭として高き佛閣の上に坐して、渺渺たる清川の曲れる處を見下すと、折しも日暮で、客愁、靄然として暗く、離蘅などいふ香草は、漸く伸びて、雨の中に綠色を爲して居る。僧は、鐘を聞いて早く歸つて来たが、百姓どもは、笠を被つて、なほ牛羊を牧して居る。そこで、自分も、いつか家に歸らうと思ふが、都合の善い舟も見當らず、止むなく、雲とまがふ木の茂れる江南の方を望むのみである。

【餘論】前半四句は、閣に上りしこと。後半は、僧の返るより、歸棹を引き出して、故園を望むことを言ひ、兼ねて、第三句の靄靄に緊接して居る。

尋照公

照公を尋ぬ

遠尋林下僧。不識林下路。
 遠く林下の僧を尋ねむとして、林下の路を識らず。
 隔雲孤磬響。因到繡經處。
 雲を隔てて孤磬響き、因つて經を繡く處に到る。
 相對竟忘言。夕陽在祇樹。
 相對して竟に言を忘る、夕陽、祇樹に在り。

【字解】(一) 不識 識は識別すること。(二) 繡經處 前に卷四、無上人丈室、遠三李道士の詩中にも引いて置いたが、廬山記に「謝靈運、一たび遠公を見て、肅然心服し、乃ち寺中に即いて涅槃經を繡くを觀、池邊を爲り、白蓮を池中に植ふ、その處を名づけて繡經處となす」とある。(三) 祇樹 祇は祇園の時、寺の境内に植ふた樹木。

【題義】説明に及ばぬ。但し、照公の本名等は不詳。

【詩意】遠く行いて、林下の僧を尋ねむとしたが、林下には路が多く、いづれを、それと識別することが出来なかつた。幸にも、雲を隔てて孤磬の響くを聞いて、やつと、それと分かり、ほとほと歩いて、高僧が經を繡いて居る處に往つた。その僧と相對し、儼然として物いふことを忘れ、やがて、夕日が境内の木に落ちかかる頃となつた。

【餘論】不識林下路は、王維の不識香積寺、數里入雲峰と同一の筆法。相對竟忘言は、陶淵明の欲辨已忘言と聊か相近い。通篇清貧絶塵、まさしく、朝川の遺と稱すべきものである。

江上過丁校書宅留飲

江上、丁校書の宅を過りて留飲す

迂權入浦汭。言尋故人扉。
 權を迂らして浦汭に入り、ここに、故人の扉を尋ぬ。
 雞鳴村樹煙。寒旭景尙微。
 雞は鳴く村樹の煙、寒旭、景、尙は微なり。
 子起罷理髮。相延闕中闌。
 子、起つて理髮を罷め、相延いて、中闌を開く。
 雅詞既云宣。濁醪亦以揮。
 雅詞既に云に宣べ、濁醪亦た以て揮ふ。
 幸茲竟日歡。一浣積慮非。
 幸に茲に竟日の歡、積慮の非なるを一浣す。
 尙慙有羈牽。暫會復遠違。
 尙は慙づらくは、羈牽あり、暫會復た遠く違ふ。
 臨流送我還。廻颺夕吹衣。
 流に臨んで、我が還るを送る、廻颺、夕に衣を吹く。
 亂來人情改。高誼似子希。
 亂來、人情改まり、高誼、子に似たるは希なり。
 儻不終憚煩。卜鄰遂相依。
 もし終に煩を憚らずんば、鄰を下して遂に相依らむ。

【字解】(一) 迂權 權をめぐらす。(二) 浦汭 書經禹貢の疏に「水北を浦といふ」とあつて、入江の奥まりたる處と見える。(三) 景尙微 景は日光。(四) 理髮 頭髮を梳く、晉書謝安傳に「桓温、かつて安に詣り、その髮を理するに値ふ。安、性遲緩、久しうして方に罷み、帽を取らしむ。温、見て之を留めて曰く、司馬をして帽を著けて進ましめよと。その重んぜらるること、かくの如し」とある。(五) 中闌 戸ばりの中、奥の間。(六) 雅詞 風流の話。(七) 濁醪 濁酒に同じ。(八) 積慮 積る心配。(九) 羈牽 五言古詩、尋照公、江上過丁校書宅留飲

世事の係累。【一〇】習會 今日一寸面會した。【一一】高血 厚い情血。【一二】煙煩 煩はしく小面倒な事を厭やと思ふ。

【題義】校書は官名、もと書籍を校正することで、風俗通・劉向別錄に「一人、書を読み、その上下を校し、謬誤を得るを校となす。一人、本を持し、一人、書を読み、怨家相對するが若きを讎と爲す」とあり、唐書に「魏徵奏す、諸儒を引いて秘書を校集すれば、國家の圖籍、燦然完璧たらむ」とあつて、必要上、宮中秘書の對校をしたのであるが、後には單に祕府の書籍を司るものを校書郎といつた。この詩は、江上に校書郎丁某の宅を訪ひ、引き留められて御馳走に成つたから、その席に於て、作つたのである。但し、丁の名字閱歴等は不詳。

【詩意】棹をめぐらして、入江の奥に入り、ここに舊知丁君の家を尋ねた。時しも、雞が初めて鳴いて、村樹は煙を帯び、寒げに見ゆる朝日は、光線も弱弱しい。すると、君は、やをら起き出でて、頭髪を梳り、それが済むと、迎へ入れて、奥の一間を開いた。いろいろ風流の話などをした揚句に、濁酒を勧められて飲み、終日の喜悅に依つて、積る心配を一洗し、まことに長閑に且つ愉快であつた。なほ慙づらくは、われには、俗事の係累があつて、ここに一寸お目にかかつたばかり、又ぞろ遠く離れて居なければならぬ。やがて、歸らうとすれば、態態送つて來て、江流に臨まれたが、折から、夕風寒く衣に吹き入つた。願れば、喪亂以來、人情全く改まり、君の如き厚誼を以てせられる人は、甚

だ稀である。そこで、萬一、うるさいことを嫌はれずば、近鄰に卜居して、常に相依つて、御世話にならいたいものである。

【餘論】起首より濁醪亦以揮に至る八句は、丁校書の宅を過ぎて留飲したことで、即ち題意の正面である。以下十句は、純ら感慨を發したが、初に終日の歡、次に日暮の別、最後に卜鄰の意を述べ、深く傾倒の情思を表出したのである。

游靈巖賦得越來溪

靈巖に遊び、越來溪を賦し得たり

越女游未去、越兵嗟已來

越女、游んで未だ去らず、越兵、已に來るを嗟す。

青山舊溪上、無復見樓臺

青山舊溪の上、復た樓臺を見るなし。

過客空惆悵、荷花秋自開

過客空しく惆悵、荷花、秋自ら開く。

【字解】(一) 越女 西施を指す。

【題義】靈巖山は、前に卷五に見えて、即ち吳王夫差の館娃宮である。越來溪も同卷に見え、靈巖山の近くに在つて、むかし越兵が吳に侵入した路である。この詩は、靈巖山に遊んだ時、越來溪を賦したのである。

【詩意】越より差出した美人の西施は、呉王の寵を専にし、ここ館娃宮に遊んで、まだ歸り去らぬ内に、越兵は、早くも押し寄せ、やがて、呉は一撃の下に亡ぼされ、青山に近き蕩滌の上なる當日の樓臺は、跡方もなく成つて仕舞つた。今日、行旅、この地を過ぎて、空しく惆悵するのみ、そして、蓮の花は、そんな事には頓著なく、秋にさへ成れば、相變らず咲き矜つて居る。

【餘論】一氣呵成とはいへるらしいが、少しも新警の處なく、全く庸淺を免れない。

立春前一日喜雪

立春の前一日、雪を喜ぶ

一冬纔見瑞三白詎須頻

一冬、わづかに瑞を見る、三白、詎ぞ頻なるを須ひむ。

未嫌遲送臘唯憐預占春

未だ嫌はず遅く臘を送る、唯だ憐む、預め春を占むるを。

積砌猶殘凍妝苑已芳辰

砌に積んで猶ほ殘凍、苑を妝うて已に芳辰。

留更明朝落梅花欲鬪新

留めて更に明朝落ちしむれば、梅花、新を鬪はさむと欲す。

【字解】【一】見瑞 雪は豐年の兆と稱せらるるが故に云ふ。【三】三白 朝野僉載に「夢に宜しきを要すれば、三白を見よ」とあり、注に「雪なり」とある。即ち雪が三度降ること、さうすれば、明年、夢が善く出来る。【三】送臘 臘は十二月、臘の祭を爲すが故に云ふ。【四】芳辰 即ち春。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】この冬を通じて、やつと豐年の瑞を見たので、一度で澤山、何も三度打續くほど頻繁でなくとも善い。最早、年の暮も遠からず、こんな遅く降つた雪で、臘月を送るのであるが、必ずしも之を嫌ふに及ばず、ただ木木が花咲いた様に見える、預め春を占めたのは、まことにしほらしい。その雪が階上に積れば、矢張、物の凍る冬の氣分らしいが、園中を妝ひしを見れば、なる程、すでに春である。もし、この雪を留めて、明朝落ちしむれば、梅花も咲き出で、定めて、その鮮新の色を鬪はすであらう。

【餘論】宛然たる詠物の體で、刻劃頗る至れるも、流動の致に於て、聊か缺けたるを遺憾とする

移家江上別城東故居

家を江上に移し、城東の故居に別る

人情戀故郷誰樂遠爲客

人情、故郷を戀ふ、誰か遠く客と爲るを樂まむ。

我行豈得已實爲喪亂迫

わが行、豈に已むを得むや、實に喪亂に迫らる。

悽悽願丘隴悄悄別親戚

悽悽として丘隴を願み、悄悄として親戚に別る。

不去畏憂虞欲去念離隔

去らざれば憂虞を畏れ、去らむと欲すれば離隔を念ふ。

雖有妻子從。我恨終不釋。妻子的從ふありと雖も、わが恨終に釋けず。
出門未忍發。惆悵至日夕。門を出でて未だ發するに忍びず、惆悵、日の夕に至る。

【字解】(一) 丘隱 先祖の墓所。(二) 憂虞 憂ふべき危難。(三) 離隔 故郷を離れる。

【題義】この詩は家を婁江の上に移さむとし、因つて、蘇州城東の故居に別るるに就いて作つたので、多分、至正二十二年中の事であらう。

【詩意】人情として、故郷を戀ひ慕ふのが普通で、誰しも、遠く離れて客となることを樂むものは無い。自分が今回出かけるのも已むを得ざるに出で、實は、喪亂に迫られて、故郷に落ち付いて居ることが出来ぬからである。悽悽として先祖の墓所を顧み、悄悄として親戚に別れて、愈よ出立。もし此を去らざれば、憂ふべき危難に罹る心配があるし、此を去らうとすれば、故郷を離れるのだなと思つて、殆んど堪へられない。たとひ、妻子が付き随つて行くにしても、わが恨は、遂に釋く由もなく、門を出でて、出發するに忍び兼ね、惆悵として日暮に成りかけて仕舞つた。

【餘論】起四句は、移家の所由。次の四句は、愈よ出發せむとしたこと。結四句は、かくても猶ほ發するに忍びずして、惆悵として居る様を敍したのである。一往情深くして、哀婉を極めて居るやうなもの、一方から見ると、聊か女女しいといふ嫌がある。

雨中客僧舍

雨中、僧舍に客たり

客夢方暫適。竹間風雨驚。客夢、方に暫く適す、竹間、風雨驚く。

起登林端閣。迢遞望層城。起つて林端の閣に登り、迢遞、層城を望む。

景寒川樹疏。野晦原煙平。景は寒くして川樹疏に、野は晦くして原煙平かなり。

不邀釋子語。何以緩羈情。釋子を邀へて語らずんば、何を以てか、羈情を緩うせむ。

【字解】(一) 暫適 適は適意、自適。しばらくの間は自適した。(二) 迢遞 はるかなる貌。(三) 層城 高い城壁。(四) 景 景は日光。(五) 釋子 釋迦の弟子、即ち坊主。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】物靜かなるまま、午睡をなし、その間、客夢のどかに、稍や自適して居たが、簇る竹に風雨の驚くを聞いて、忽然として覺め、やをら、身を起して、林端の高閣に上り、はるかに州城の高壁を望んだ。折から、日光寒くして、川邊の木木は疏に見え、野色暗くして、煙は平かに鋪いて居る。この時、坊さんを相手に話でもしなければ、如何して、客情を緩うすることが出来やうか。

【餘論】前四句は、午睡覺めし後、閣に登りしことを敍し、後四句は、風物慘澹、到底、孤寂の忍ぶべからざるを言つたのである。

見花憶亡女書

花を見、亡女を憶うて書す

中女我所憐。六歲自抱持。
懷中看哺果。膝上教誦詩。
晨起學姊妝。鏡臺強臨窺。
稍知愛羅綺。家貧未能爲。
嗟我久失意。雨雪走路歧。
暮歸見歡迎。憂懷每成怡。
如何屬疾朝。復值事變時。
聞驚遽沈殞。藥餌不得施。
倉皇具薄棺。哭送向遠陂。
茫茫已難尋。惻惻猶苦悲。
却思去年春。花開舊園池。
牽我樹下行。令我折好枝。

中女、わが憐むところ、六歲、自ら抱持。
懷中に果を哺するを看、膝上に詩を誦するを教ふ。
晨に起きて姉の妝を學び、鏡臺、強ひて臨んで窺ふ。
稍く羅綺を愛するを知るも、家貧しくして、未だ爲す能はず。
嗟す、我、久しく失意、雨雪、路歧に走る。
暮に歸つて、歡迎せられ、憂懷、毎に怡を成す。
如何か、疾を屬するの朝、復た事變の時に値はむとは。
聞いて驚く、遽に沈殞せしを、藥餌、施すを得ず。
倉皇、薄棺を具へ、哭送して遠陂に向ふ。
茫茫として已に尋ね難く、惻惻として猶ほ悲しきに苦しむ。
却つて思ふ去年の春、花は開く舊園池。
我を牽いて樹下に行き、我をして好枝を折らしむ。

今年花復開。客居遠江湄。

今年花復た開く、客居す遠江の湄。

家全爾獨歿。看花淚空垂。

家全くして爾ひとり歿し、花を看て涙空しく垂る。

一觴不自慰。夕幔風淒其。

一觴、自ら慰めず、夕幔、風淒其。

【字解】【一】中女、三人居る内の真中の娘、即ち第二女。【二】所憐、憐は愛する、いとしがらる。【三】哺果、果物を嚼んで口うつしに哺ませる。【四】誦詩、詩經を誦する。【五】羅綺、うす物と綾。【六】路歧、道路の分岐點。【七】屬疾朝、病氣だと言ひ出した其朝。【八】沈殞、死ぬ。【九】倉皇、あわてる。【一〇】薄棺、用材の薄くして粗末に出来た棺。【一一】遠陂、遠い墓地。【一二】遠江湄、遠く故郷を隔てたる婁江の江上。【一三】夕幔、幔は帳、戸ばり。【一四】淒其、淒然といふに同じ。

【題義】花を見つつ亡せにし娘の事を憶ひ出して、この詩を書すといふ義。元來、青邱には、一男三女があつて、その男は、名を祖授といひ、晩年に擧げたが、喜ぶ間もなく、殤死した。娘三人は、皆その上であるが、中女は至正二十七年に、六歳で死んで仕舞ひ、青邱が之を哭した詩は、五律の部に出で居て、即ち次の如くである。

保養常多闕。艱難愧我貧。悽悽臨歿語。的的在生親。遺佩寒江月。殘燈夜室塵。中郎他日棄。留付與三何人。

それから、翌春に之を追思して作つたのが、即ち此詩である。かくて青邱の死後には、二女兒を餘すだけ、史官となつて京に在りし日は、祖授の未だ生まれざりし時だから、矢張、この二女兒があるの

みで、絶句の部に、客中憶二女一の詩がある。

每憶門前兩候歸。客中長夜夢魂飛。料應此際猶依母。燈下看縫寄我衣。

これ等の詩を見ると、青邱の骨肉に對する至情の極めて厚かつたことが分かる。

【詩意】三人の内の真中の娘は、わが最も愛するところで、六歳になつても、なほ我が手で抱きかかへ、懷中に入れては、果物を嚙んで口うつしに哺ませ、膝上に置いては、詩經を誦することをお教へて居た。この小娘は、朝早く起きると、姉が化粧するのを見て、その真似をなし、鏡臺に向つて、低い身體を無理に脊伸して覗いて居た。だんだん、ませて来て、羅綺の類を愛することを知らぬ様に成つたが、家貧しくして、十分にあてがふことが出来ない。われは、久しく失意の境涯に在つて、雪の降る最中に、大路の衢をたどり、終日奔走して、やがて日暮に歸つて來ると、この娘が愛想よく迎へて呉れるから、憂懐も薄らいで、毎毎喜悅を爲す始末。さて如何なる事ぞ、その病氣を言ひ出した朝は、事變に値つた時であつて、まことに手が廻りかねた。やがて、不意に、もう死んで仕舞つたと聞いては、唯だ驚くばかり、碌碌、藥さへ吞ませることが出来なかつた。仕方が無いから、あわてて粗末な棺を用意し、慟哭しつゝ、葬を送つて、遠い墓所に向つて往き、どうやら後始末も終つたが、茫然として、その人すでに尋ね難く、惻惻として、いつまでも悲は忘れられなかつた。おもへば、去年の春、舊宅の園池に花の咲いた時、われを牽いて木の下に行き、われにせがんで好き一枝を折つて呉

れといつたことがある。今年は、花の再び開く頃、遠き婁江の邊に客居し、一家皆無事であるのに、汝ひとり、死して在らざるに因り、花を看ても、涙が自然と流れる。たとひ、酒ありとも、一觴自ら慰むるに足らず、夕風が戸ばりを捲き上げて、凄然として吹き入るにつけて、愈よ以て堪へられぬ。

【餘論】起首より憂懷毎成レ怡に至る十二句は、中女生前の愛らしかりし様を記し、如何屬レ疾朝より惻惻猶苦レ悲に至る八句は、その死去を述べ、却思去年春の十句は、去年と今年と、花は均しく咲き出で、地は異なるも、一家すべて全きに拘はらず、中女ひとり、在らざるを言うて、その哀痛の至情を寫し出したのである。通篇、もとより雕澤を謝し、出語自然、敘述周囲ではあるが、或は修辭上から見て、聊か洗鍊が足らぬ様に思はれるといふ人もあらう、この種の詩は、もとより文字の巧拙を以て論すべきものでなく、人を動かせば、その能事、すでに畢れりと云ふべきでは無からうか。

東坡路上阻水

東坡の路上、水に阻てらる

不覺去村遠。瀟瀟柳間步。

村を去るの遠きを覺えず、瀟瀟たる柳間に歩す。

江雨夜來多。春流稍侵路。

江雨、夜來多く、春流、稍や路を侵す。

褰裳自可涉。不待漁舟渡。裳を褰げて、自ら渉るべし、漁舟の渡るを待たず。

【字解】【一】 侵路。水が溢れて通路に侵入した。【二】 褰裳。裳は下衣、もすそを捲くり上げる。

【題義】 東坡は東方の隄、そこへ行かうとする途中に、水が出て居て、行歩を妨げられたことを詠じたのである。

【詩意】 わが居る村を距つることの遠きを覺えず、雨瀟瀟たる柳の並木の間を、とぼとぼと歩いて往つた。昨夜より、江天の雨、降りしきり、春の流は次第に溢れて、通路まで侵して来た。しかし、もすそを捲くり上げると、自分で徒渉することが出来るので、特に漁舟を呼んで渡して貰ふにも及ばない。

【餘論】 唯だ見たところを敍したのであるが、稍や敷張に失したやうである。

獨酌

獨酌

白日下、遠川。寒風振高柯。白日、遠川を下り、寒風、高柯を振ふ。

蕭條掩關臥。暮雀忽已過。蕭條として、關を掩うて臥し、暮雀、忽ち已に過ぐ。

我有羈旅愁。鬱如抱沈痾。我に羈旅の愁あり、鬱として沈痾を抱くが如し。

起坐呼清尊。獨飲還獨歌。起坐して清尊を呼び、獨り飲み、還た獨り歌ふ。

一斟解物累。再酌廻天和。一斟、物累を解き、再酌、天和を廻す。

數觴竟復醺。翻恨愁無多。數觴、竟に復た醺す、翻つて恨む、愁の多きなきを。

所以古達士。但飲不顧他。所以、古しへの達士、但だ飲んで他を顧みず。

回頭向婦笑。戚戚終如何。頭を回らし、婦に向つて笑ふ、戚戚終に如何と。

【字解】【一】 高柯。柯は枝條。【二】 掩關。關は門に同じ。【三】 鬱。もやもやする。【四】 沈痾。持病。【五】 物累。外物の係累。【六】 天和。道徳指歸論に「聖人、動、天と和し、靜、道と合す」とある。天と共に和らぐこと。【七】 醺。酔ふこと。【八】 向婦。婦は妻。【九】 戚戚。憂愁の貌。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 晴れた夕日は、遠くの川原に沈まむとし、寒風は、高い梢を振つて居る。この時しも、ひとり淋しく門を閉ちて高臥すれば、夕ぐれ、巢に急ぐ雀も、すでに飛び去つて仕舞つた。身は、異郷に客として羈旅の愁を懐き、もやもやとした心地は、丸で持病に悩んで居る様である。そこで、坐より起つて、酒を呼び、ひとりで飲みつつ、又ひとりで歌つて居た。まことに、酒は憂を玉帶、一たび斟めば、外物の係累を解き、再び酌めば、わが心を回らして、天と共に和らぐ様にならしめ、五六杯に及

べば、とうとう酔つて仕舞つたので、もつと愁が多く積つて居ても、何でもない、愁の多くないのは、却つて呆ッ氣ないと思ふ位。されば、古しへの達士輩は、唯だ酒を飲んで、外の事は一切顧みなかつたのである。そこで、首を回らし、妻に向つて笑ひつつ、汝の如く、くよくよと物を思つて、不景氣な面をして居ても仕方がなからうと云つて遣つた。

【餘論】起四句は、旅寓中の晩景。次の四句は、獨酌に至るまでの徑路。次の四句は、酒の效能。結四句は餘波、上に續いて、酒徳の絶對的なことを頌したのである。

同杜徵士寅過南渚赴朱七丈招

杜徵士寅と同じく、南渚を過ぎて朱七丈の招に赴く

五月燕雛飛。絲成桑葉稀。五月、燕雛飛ぶ、絲、成つて、桑葉稀なり。

相逢總羈旅。白苧未縫衣。相逢ふ、總て羈旅、白苧、未だ衣を縫はず。

扁舟喜同載。晚度滄洲外。扁舟、同じく載するを喜び、晩に度る滄洲の外。

樹失潮氣昏。沙喧雨聲大。樹失うて潮氣昏く、沙、喧しくして雨聲大なり。

將迷路却通。窈窕復蒙龍。將に迷はむとして、路、却つて通じ、窈窕、復た蒙龍。

果熟皆梅子。禽啼盡郭公。果熟するは皆梅子、禽啼くは盡く郭公。

兵戈苦未息。莫歎猶爲客。兵戈未だ息まざるに苦む、歎する莫れ猶は客と爲ることを。

此去醉誰家。江邊主人宅。ここを去つて、誰が家に酔はむ、江邊主人の宅。

【字解】「一」蘇成。曲が出来て其蘇を取る。「二」白苧。白い麻地。「三」滄洲。前に置ば見えて居た、東海中の仙山。「四」樹。失。樹が見えなくなる。「五」窈窕。奥深き貌。「六」蒙龍。木のこんもりせる貌。「七」梅子。梅の實。「八」郭公。禽類に「郭公は鳥名、即ち布穀なり」とあつて、春の末、畑に種を蒔く頃に啼く鳥。杜鵑とは全く別の物だといふ説が、正しい様に思はれる。

【題義】杜寅は、徵士といふから、かつて、朝廷から召し出された人。列朝詩集に「杜寅、字は彦正、青城の人、後、吳に居る。洪武の初、元史を修するに與る。八年、岐寧衛知事となり、經歷熊鼎とともに、竝に狐裘を賜ふ。後、官、侍郎に至る」とあつて、相當に出世したものに見える。南渚は、前に答へ宋南宮見寄の詩中に偶家南渚濱とある、その南渚であらうか。朱七丈の七は、例の排行、丈は長老の尊稱、その名字は不詳、この詩は、朱七老人より御馳走に招かれたから、徵士杜寅と共に、南渚を過ぎて、其家に赴く途中で作つたのである。

【詩意】今しも五月、燕の雛は、すでに生長して飛べる様になり、蠶は繭を爲し、もう絲に取られる位で、散散摘まれた後の桑は、葉も稀なる位。君と相逢うて、いづれも旅の身、追迫、暑氣に向ふけ

れども、まだ白い麻衣を縫ふにも及ばず、兎角、客寓中は、萬事足らぬ勝である。ここに、君と同じく舟に乗り、日暮、滄洲の外に航せむとして、だんだん漕ぎ出すと、潮氣昏く立ちこめて、岸上の木は見えなくなり、雨聲大にして、汀の沙を打つて騒がしく響いて居る。それから、上陸して、歩き出すと、田舎路は、迷はむとして復た通じ、あたりは奥深く、且つ木がこんもりとして居る。熟した果は皆梅の實、啼く鳥は、すべて郭公である。今しも、兵戈未だ息まず、四海争亂に苦む折柄なれども、依然として客たることを歎息するにも及ばないので、これより往けば、江邊なる朱老の宅で、十分御馳走に成つて愉快に樂むことが出来る。

【餘論】起四句は、その季節。次の四句は、舟中に見た遠景。次の四句は、上陸後、歩行中に接した田舎の模様。結四句は、會飲の興多かるべきを豫想して言つたのである。

始聞夏蟬

始めて夏蟬を聞く

翩翩纔得蛻 咽咽未成喧
翳葉誰能見 南風綠繞軒
乍驚變節物 還念別郊園

翩翩として纔に蛻するを得、咽咽として未だ喧を成さず。葉に翳されて、誰か能く見む、南風、綠、軒を繞る。乍ち驚く節物を變ずるを、還た念ふ郊園に別るるを。

何待當秋聽 方令羈思繁
何ぞ秋に當つて聽くを待たむ、方に羈思をして繁からしむ。

【字解】(一) 翩翩 翩翩として飛ぶなり」とある。(二) 羈 羈から抜け出る。(三) 咽咽 聲の溢り勝なること。

【題義】 蟬に驚される、掩はれる。(二) 羈思 客愁に同じ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 蟬は、今新に生まれたので、翩翩として、やつと殻から抜け出し、咽咽として、まだ感がしく鳴き立てもしない。葉の下に掩はれては、一寸見つからず、折しも、暖き南風が吹いて、新緑は軒を繞つて居る。節物の推移して變ずることは驚くべく、それに付けても、又ぞろ、故郷の村園に別れたことを思うて、感慨に堪へぬ。何も、秋になつて、悲しげに聞こえるのではなく、今、その聲を聞いてだに、客愁をして繁からしめる。

【餘論】 前四句は蟬の始めて出たこと。後四句は、これを聞いて客愁を催したことを述べたのであつて、五六兩句の意を七八兩句で更に説明して居るのである。

贈斲苓者

苓を斲るものに贈る

山田不生苗 靈雨空漑之
山田、苗を生せず、靈雨、空しく之を漑す。

五言古詩 始聞夏蟬 贈斲苓者

歳晏窮谷中、何以療我飢。
 青青萬丈松、兔絲絡其枝。
 不知何樹下、乃有千年脂。
 朝行西澗濱、暮行東岡陲。
 荷鍤偶遠樵、言尋亦良疲。
 鑿彼土石間、得此瓊瑤姿。
 香因清颺發、色藉玄泉滋。
 嘗讀炎帝編、微功實多奇。
 天和滌煩滯、靈味扶殘衰。
 詎必勞悲歌、去采商顏芝。
 歸來拾荆薪、炊之作晨糜。
 八珍豈不美、素餐懼有嗤。
 服斯待輕舉、往與仙人期。

歳は晏し窮谷の中、何を以て、我が飢を療せむ。
 青青たる萬丈の松、兔絲、その枝に絡ふ。
 知らず、何の樹の下に、乃ち千年の脂ある。
 朝に西澗の濱を行き、暮に東岡の陲を行く。
 鍤を荷うて遠樵に偶し、言に尋ねて亦た良に疲る。
 かの土石の間を鑿つて、この瓊瑤の姿を得たり。
 香は清颺に因つて發し、色は玄泉を藉つて滋ふ。
 かつて、炎帝の編を讀むに、微功、實に奇多し。
 天和、煩滯を滌ひ、靈味、殘衰を扶く。
 詎ぞ必ずしも悲歌を勞し、去つて商顏の芝を采らむや。
 歸り來つて、荆薪を拾ひ、これを炊いで晨糜と作す。
 八珍、豈に美ならざらむや、素餐、嗤ふあるを懼る。
 これを服して輕舉を待ち、往いて、仙人と期せむ。

【字解】(一) 靈雨 效驗著しき雨。(二) 歳之 既ば水を注ぎかける。(三) 歳晏 歳が暮れる。(四) 兔絲 葛かづらの類。

【五】 千年脂 茯苓も、琥珀などと同じく、矢張、松脂が地に入つて千年の後に化成したものと稱せられて居る。淮南子に「千年の松、下に茯苓あり、上に菟絲あり」とある。【六】 東岡陲 陲は邊。(七) 荷鍤 鍤を肩に荷ふ。【八】 偶 偶に同じ、一緒になる、道づれになる。【九】 遠樵 遠くまで出かける木、り。【一〇】 瓊瑤姿 玉の如き珍奇なるもの。【一一】 玄泉 地下の泉。【一二】 微功 微功、效驗。【一三】 炎帝編 神農氏の遺書、史記三皇紀に「炎帝神農氏、はじめて五穀を藝ふ、百草を嘗め、醫藥を製す」とある。【一四】 天和 前にも獨酌の詩中にも見えたが、このは、天然の和氣といふ義。【一五】 煩滯 煩苦しめて停滯する。【一六】 靈味 不思議なる甘味。【一七】 商顏芝 前に卷五、角里村の詩にも見えて居たが、東岡公・韓里季・夏黃公・角里先生、謂ゆる四皓は、秦の亂を避け、商顏山に隠れて、靈芝を采つて居た。【一八】 荆薪 荆はいばら、灌木の類。薪は雜木。【一九】 晨糜 朝の粥。【二〇】 八珍 周禮の膳夫に「珍、八物を用ふ」とあつて、その注に「淳熬・淳母・炮豚・炮脾・炮珍・漬・煎・肝膾を謂ふなり」とある。【二一】 素餐 その職に應ずる仕事を碌碌爲さずして唯だ飯を食むこと。【二二】 輕舉 仙人になつて空中を飛行する。本草に「茯苓は、久しく服すれば、魂を安んじ、神を養ひ、飢えずして年を延ぶ」とある。

【題義】 この詩は、茯苓を掘ることを業として居る人に贈つたのであるが、實に之に託して、自己の出世間的願望を述べたのである。茯苓は、松根に生ずる一種の菌類で、その質堅く、これを削つて、煎じて服すれば、今でも、補血の功あるものと稱せられて居る。

【詩意】 山田には、稲の苗を生せず、靈雨が、いくら注いでも、何の効果もない。かくて、窮谷の中に在りて歳暮に近き時、何を食つて、我が飢を療せむとならば、それには、幸ひ茯苓といふものがある。かの青青たる萬丈の松には、葛かづらが其枝にからみ付いて居て、どの木の下に、彼の千年の松

脂の化成した茯苓があるか。大體の見當は、もとより付いて居る。朝には西澗の濱を行き、暮には東岡の邊を行き、鋤を肩に荷うて、遠くまで出かける木こりと道づれになつて、そこを尋ね廻はると、随分疲れる。そこで、土石の間を掘り起すと、瓊瑤に比すべき茯苓を発見して、その香は、清風に吹かれて發し、その色は地下の泉に濡されて、自然光澤がある。かつて、神農氏の遺書を讀んだが、茯苓の功驗、随分不思議なことが多く、天然の和氣は、煩苦停滯を洗ひ去り、その靈妙なる甘味は、衰老を扶けて、若がへらしめると書いてあつた。されば、何も必ずしも悲歌を唱へつつ、商顔山に分け入つて、靈芝を採るにも及ばない。仍つて、自分の家に歸りし後、粗朶を拾ひ集め、これを煮て朝の難炊を作り上げる。なる程、八珍は美味であらうし、徒に祿を食むことは、人から笑はれる心配もあらうが、自分で茯苓を採つて來て食ふことは、何等の差支もない。そこで、これを服して、身體が軽く、飛行自在になつたならば、往いて仙人と相約し、どこでも、勝手次第に飛び廻りたいものである。

【餘論】 通篇、苓を勵する者に代つて言を立てた様な形式になつて居る。起首より乃有千年脂に至る八句は、茯苓に著意したことを言ひ、朝行西澗濱より色藉玄泉滋に至る八句は、山中に苓を勵することを敍し、嘗讀炎帝編より去采商顔芝に至る六句は、茯苓の功驗非常なることを言ひ、歸來拾荆薪以下六句は、これを服して仙を待つのを意を返露したのである。

我昔

我昔

我昔在家日、有樂不自知。

我、むかし家に在るの日、樂あるも、自ら知らず。

及茲出門遊、始復思往時。

ここに門を出でて遊ぶに及び、はじめて復た往時を思ふ。

貧賤爲客難、寢食不獲宜。

貧賤、客と爲ること難く、寢食、宜しきを獲ず。

異鄉寡儔侶、僮僕相擁持。

異郷、儔侶寡く、僮僕、相擁持す。

天性本至慵、強使賦載馳。

天性、本と至慵、強ひて載馳を賦せしむ。

發言恐有忤、蹈足慮近危。

發言、忤ふあらむことを恐れ、蹈足、危きに近づくかむこと

人生貴安逸、壯遊亦奚爲。

人生、安逸を貴ぶ、壯遊亦た奚をか爲さむ。

何當謝斯役、歸守東岡陂。

何ぞ當に斯役を謝し、歸つて、東岡の陂を守るべき。

【字解】 【一】 爲客難 客となるには色色の難儀がある。 【二】 儔侶 仲間、友だち。 【三】 僮僕 小もの、下部。 【四】 至慵 至極疎懶なること。 【五】 載馳 すなはち馳すと訓すべし、詩經に見えた字面。 【六】 蹈足 足を踏んで歩き出す。 【七】 斯役 役は行役、もとより公事には限らない。 【八】 東岡陂 陂は隄、池などをいふ意味もあるが、このは池といふこと。

【題義】 起首の二字を取つて、假りに題としたので、大體に於て、客中の感懐を敍したのである。

【詩意】 我、むかし家に在りし日は、樂あれども、それとも氣づかずに居たが、ここに、門を出で

て遠遊するに及び、はじめ、往日の樂しかりしことを思ひ起した。もとより、貧賤の身は、萬事足らぬ勝であるから、客となるには、色色の難儀があつて、寢食ともに決して宜しきを得ず、往往にして、無理をする。おまけに、異郷に於ては、友達もなく、ただ童僕輩と相擁して、わづかに自ら慰めるだけである。元來、わが天性は、至極疎懶であるのに、時の廻り合せて、載馳の古詩を賦して、無理に旅をさせられたので、もともと少しも知らぬ恐ろしき人達の間まじり、言を發すれば、先方の心は、件ひはせぬかと氣兼ねをなし、足を踏み出せば、危きに近よりはせぬかと思つて心配する位で、とても遣り切れない。人生の貴ぶところは、安逸であつて、萬里の壯遊といつた處で、何の効果もなく、まことに、詰まらぬことである。どうかして、この行役を止めて、早く故郷に歸り、そして、東岡の邊なる舊宅を守つて、そこに穩臥して居たいものである。

【餘論】起四句は、往時を思ふの意。次の四句は、貧賤にして客となることの苦を言ひ、次の四句は、わが天性に反して、心づかひの甚しきを訴へ、結四句は、早く歸臥したいといふ希望を述べたのであるが、例の女女しさは、又ぞろ、ここにも顯はれて居る。

將往海上舟行值雨投僧舍

將に海上に往かむとし、舟行雨に値ひ、僧舍に投す

沙響聞雨來。中途生旅愁。沙は響いて、雨の來るを聞き、中途に旅愁を生ず。

遙尋晚林磬。暫駐寒塘舟。遙に晚林の磬を尋ねて、暫く寒塘に舟を駐む。

窓下一僧老。竹間諸鳥幽。窓下、一僧老い、竹間、諸鳥幽なり。

誰言阻遠去。翻使得佳游。誰か言ふ、遠きを阻てて去り、翻つて佳游を得せしむと。

【字解】【一】中途 途中と同じ。【二】寒塘 冬がれの隈。【三】阻遠 故郷と遠路を隔つ、つまり遠く故郷を隔つ。【四】佳游 面白い游、興多き旅行。

【題義】説明に及ばぬ。海上とは無論、東海の岸上である。

【詩意】沙が鳴り響いて、雨の降つて來たことが分かり、途中に於て、忽ち旅愁を生じた。そこで、舟を寒塘の下に繋ぎ、暮るる林の中に鳴る磬聲を心あてに、漸く寺を尋ねあてて、そこに一夜の宿を借りることにした。窓下には、一人の老僧が踞まつて居るし、茂れる竹の間には、時を求める百鳥の聲が幽に聞こえる。故郷を遠く隔てて、だんだん行くと、翻つて、面白い眺があると云ふけれども、實際、さはなくして、旅は誠に憂いものである。

【餘論】起四句は、舟行雨に値うて僧舍に投せしこと、次の二句は、僧舍中の所見、結二句は、感慨を發したのである。

暫歸鳴珂里舊宅

暫く鳴珂里の舊宅に歸る

故廬在東里。久出喜偶旋。故廬、東里に在り、久しく出でて、偶々旋るを喜ぶ。

景物亂後非。行觀一悽然。景物、亂後に非なり、行いて觀れば、一に悽然。

荒榛塞園徑。流塵蔽堂筵。荒榛、園徑を塞ぎ、流塵、堂筵を蔽ふ。

念茲經營初。勤苦唯我先。この經營の初を念ふ、勤苦、唯だ我先んず。

燕壤棄弗守。願已誠有愆。燕壤、棄てて守らず、己を顧みるに、誠に愆あり。

雖懷首邱願。未絕遊方緣。首邱の願を懷くと雖も、未だ遊方の緣を絶たず。

是主乃如客。暫來靡留連。是れ主、乃ち客の如し、暫く來つて、留連するなし。

日暮復遠去。哀抱將何宣。日暮、復た遠く去る、哀抱、將に何くにか宣べむとする。

【字解】【一】東里、城東の一區、即ち鳴珂里。【二】偶旋、偶然歸り來る。【三】荒榛、荒れたる灌木。【四】流塵、飛ぶ塵埃。

【五】燕壤、荒れはてる。【六】有愆、愆はあやまち。【七】首邱願、楚辭に孤死必首邱とあつて、孤は死んでも故の國の方へ頭を向けるといふこと。人も、最後まで、故郷に歸りたいと願ふこと。【八】遊方緣、四方に遊ぶ因縁。于武陵の訪僧不遇の詩に及べ月無三行跡、遊方應未歸とある。【九】哀抱、悲しき懷抱、悲哀なる思。

【題義】説明に及ばぬ。鳴珂里は、蘇州城内に在ると見える。

【詩意】わが舊宅は、城内の東に在るが、身は久しく外に居て、今日嬉しくも、偶然歸つて來た。しかし、亂後の景色、一として非ならざるなく、宅内を巡つて觀ると、唯だ悽然たるばかりである。心のままに茂りたる灌木の類は、園中の小徑を塞ぎ、飛ぶ塵は、堂上の筵を蔽ふ位。はじめ、この宅を經營した時には、自分が眞ッ先に立つて勤苦したのであるが、これを荒蕪敗に任せ、棄てて守らざりしは、自ら顧みて、どうも手落だと思つた。しかし、自分は故郷に死にたいといふ願を懷くものから、四方を遊行する因縁、未だ絶えざれば、ここに、一寸歸つて來ても、もと主人たるものが却つて客の如く、そして、留連する譯にも行かず、一宿だにせずして、日暮に、又復た遠く立ち去らねばならず、悲哀なる思は、如何にして宜ぶべきぞ、まことに、傷心の極である。

【餘論】起六句は、刻下舊宅の荒廢せる有様。次の四句は、これを棄てて顧みざるを以て、おのが愆に歸し、結六句は、遊方未だ止まねば、それも仕方がなく、日暮、又遠く去ることを欲し、謂はゆる哀抱の一端を此に逗出したのである。

江上晚晴

江上晚晴

江虹斷雨脚。返景明墟里。江虹、雨脚を斷ち、返景、墟里に明かなり。

宿鳥亂歸村、幽人獨臨水。宿鳥、亂れて村に歸り、幽人、ひとり水に臨む。
 漁舟隔浦飯、煙火蘆中起。漁舟、浦を隔てて飯せむとし、煙火、蘆中に起る。
 閒吟望遠岑、緩步尋芳芷。閒吟、遠岑を望み、緩歩、芳芷を尋ぬ。
 此夕遇新晴、憂懷偶然喜。この夕、新晴に遇ひ、憂懷、偶然喜ぶ。

【字解】(一) 江虹、江天の虹、杜市の時に江虹明遠飲とある。(二) 雨脚、雨の過ぎ行くを脚に比して云ふ、杜市の時に出門復入門、雨脚但如書とある。(三) 返景、照りかへす光、説文に「落光、その東を反照す、これを反景といふ」とある。(四) 隔浦、飯は飯を炊ぐこと。(五) 芳芷、芷は前に見ゆ、香草の屬。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】江天に虹が出て、雨脚は既に断え、夕日の照りかへしは、村里の邊に、はつきりと見える。時に急ぐ鳥は、亂れて村に歸らむとし、幽人は獨り水に臨み、何やら、物おもはし氣に見える。むかふの入江に泊せる漁舟は、飯を炊がむとして、蘆間に煙火の起るが認められた。この時、われは、静に吟嘯しつつ遠峰を望み、又緩歩して岸邊の芳草を尋ねなどして、ひとり徘徊して居る。但だ、此夕、新晴に遇うた爲に、憂き懷も、どうやら開いて、偶然にも喜をなした。

【餘論】前六句は敘景、宿鳥以下は、殊に工細新警である。後四句は、自己の行止を寫した抒情で、

相配して、愈よ其妙を覺える。

與王隱君宿寧真道館

王隱君と寧真道館に宿す

松下禮眞罷、鶴鳴暮壇空。松下、眞を禮して罷み、鶴、鳴いて、暮壇空し。
 偶來古仙居、欣與靜者同。偶ま古仙居に來り、靜者と同じきを欣ぶ。
 玄言不知還、遂宿琳館中。玄言、還るを知らず、遂に琳館の中に宿す。
 蒸菌沃芳露、焚蘭度微風。菌を蒸して芳露を沃ぎ、蘭を焚いて微風に度る。
 山瓢瀉未盡、月出秋林東。山瓢、瀉いで、未だ盡きず、月は出づ秋林の東。
 語化衆妙歸、探元萬緣窮。化を語つて、衆妙歸し、元を探つて、萬緣窮す。
 不與至道俱、何以超妄蒙。至道と俱にせずんば、何を以て妄蒙を超えむ。
 願從希夷遊、稽首青牛翁。願はくは、希夷に従つて遊び、青牛の翁に稽首せむ。

【字解】(一) 眞、仙人。(二) 暮壇、日暮の仙境。(三) 靜者、物外に行ひ澄ます人、杜市の時に蔡侯靜者意有餘とある。(四) 玄言、玄妙なる言論。(五) 琳館、琳は美玉、それで飾つた様に立派な道館、馬祖常の時に琳館瑤臺九天近とある。(六) 蒸菌、菌は草を蒸して食はせる、莊子に「樂は虚に出で、蒸して菌を成す」とあつて、その字面を用ひたのであらう。(七) 焚蘭、蘭は

椒園などの香木、香を焚く。【八】語化。化は造化。【九】探元。元は宇宙の本源、李白の詩に探元賦「化先」とある。【一〇】至道。大道に同じ。【一一】妄蒙。愚妄なる見解。【一二】希夷。宋史逸民傳に「陳搏、字は圖南、希夷先生と號す。武当山の九室巖に棲み、穀を避け、氣を服すること二十餘年、但だ日に酒數杯を飲むのみ、又移つて華山の雲臺觀に居り、俟つて、少華の石室に止まる。かつて、巖處、輒ち百餘日居たす」とある。【一三】青牛翁。老子を云ふ。關中記に「老子、關を度る。令尹喜、門吏に教して曰く、もし老公の東より來り、青牛薄板車に乗するものを見れば、關を度るを聽るす勿れと。その日、果して來る。吏、これを白す。喜曰く、道今來る」とある。

【題義】王隱君は、春日懷三十友の詩にも見えて居て、即ち王行といふ人である。寧真道館は、前に卷四、鶴瓢山房の詩中に王行の記を引いて置いたが、その中に「吳城の東北に老氏の居あり、寧真といふ、主者李君、名は容、字は士明、清慎、學を好む」とある。すると、この詩は、王行と共に、城中に李容を訪ひ、その寧真道館に宿した時に作つたのである。

【詩意】松下に於て仙人に禮すれば、天壇に日も暮れかかり、唯だ鶴が鳴いて居るばかりで、外にも居ない。偶然、古りたる仙居に來て、物外の人達と一緒に成つたのは、まことに嬉しい。そこで、玄妙なる話に耽つて還ることを忘れ、やがて、夜に成つたから、遂に道館の中に一泊して仕舞つた。夕食には、薑を蒸して、匂ある汁をかけたものを薦められ、又椒蘭の名木を焚く香の煙は、微風に吹かれて、室内を度り、山瓢の酒は、注いで、まだ盡きないのに、月は早くも秋林の東に差し上つた。そこで、造化の妙機を語つて、衆妙の歸するところを知り、宇宙の本源を探つて、萬縁ともに此に窮

まるを覺えた。苟くも大道を會得して、これと俱にするに非ざれば、如何にして、世俗愚妄の見解より超出することが出來やうぞ。願はくは、古しへの陳希夷の様な人の弟子となり、道家の奥妙を研究し、そして、青牛に乗れる老翁、即ち大本尊の老子に稽首欽仰したのである。

【餘論】前十句は、道館に投宿せしこと、後六句は、純ら感慨を寫したのである。

送珪上人

珪上人を送る

曾來看江雨。同倚香臺上。

かつて、來つて江雨を看、同じく、香臺の上に倚る。

師今西去遙。還上香臺望。

師は今西に去ること遙に、還た香臺に上つて望む。

淮山暮鐘起。楚水春帆漾。

淮山、暮鐘起り、楚水、春帆漾ふ。

來去本隨緣。分攜莫惆悵。

來去、本と隨緣、分攜、惆悵する莫れ。

【字解】【一】香臺。寺中の高臺。【二】淮山。秦淮附近の山。【三】楚水。揚子江。【四】隨緣。因縁の儘にする。【五】分攜。別離に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。但し珪上人の本名等是不詳。

【詩意】われ嘗て此に來つて、江天の雨を望み、師と共に香臺の上に倚つたことがあつたが、今日、

師は此を去つて、遙か西の方に旅行せられるとのことで、又ぞろ、同じ香臺に上つて、その行く手を望んで居る。時しも、秦淮に近き山の或寺から、日暮を報する鐘の聲が起り、楚水の上には、君を乗する舟が帆を掛けて漾ふのが見える。我が來るも、君の去るも、もと因縁のままであつて、たとひ、ここに別離を爲すとも、惆悵するに及ばぬことである。

【餘論】前四句は、來去を竝敘して、殊に今日の送別を掲起し、五六兩句は、別時の光景、七八兩句は、別離の惆悵すべきに非ざるを云うて、強ひて自ら慰めたのである。

冒雨暮歸過白沙湖

雨を冒して暮歸、白沙湖を過ぐ

天寒滿湖雨、獨棹東歸急。

天は寒し滿湖の雨、獨棹、東歸急なり。

遙望水邊村、蕭條暮煙溼。

遙に水邊の村を望めば、蕭條として暮煙溼ふ。

家人應候我、深映柴局立。

家人應に我を候すべく、深く柴局に映じて立つ。

【字解】「一」獨棹、孤舟といふに同じ。「二」候我、われを待つ、わが歸るを何ふ。「三」柴局、局はとぼそ。

【題義】白沙湖は、姑蘇志に「沙湖、鮎魚口より轉じて運河に入り、婁門を経て東するを上雒瀆とな

し、又東を下雒瀆となし、又東を沙湖となす。湖は小と雖も、しかも、松江諸水と相吞吐し、青邱・戴墟の二浦あり」と記してある。この詩は、日暮、雨を冒して家に歸らむとし、舟で白沙湖を過ぎた時に作つたのである。

【詩意】滿湖の雨、降りしきりて、空寒く覺ゆる折から、われは、孤舟に乘じ、急いで東を指して、歸りて行く。はるかに、水邊の村を望めば、蕭條たる暮煙、溼ふが如く、岸に低れて居る。家人どもは、わが歸るを待つて居るらしく、深く柴の戸ばそに映じて立つて居るのが見える。

【餘論】前の四句、敘景すでに足れりとなすべく、後二句は、聊か情思を抒べて相配したのである。

送袁憲史由湖廣調福建

袁憲史の湖廣より福建に調せらるるを送る

只謂遠游苦、寧知遠游樂。

只だ遠游の苦を謂ふのみ、寧ろ遠游の樂しきを知らむや。

君今萬里歸、顔色殊不惡。

君、今、萬里より歸り、顔色殊に惡しからず。

自言楚帆開、初別鳳凰臺。

自ら言ふ、楚帆開き、初めて別る鳳凰臺。

采石月下過、匡廬天際來。

采石、月下に過ぎ、匡廬、天際より來る。

試沽彭澤酒。憔悴陶家柳。

試に彭澤の酒を沽へば、憔悴す陶家の柳。

最愛小姑妍。臨行復回首。

最も愛す小姑の妍なるを、行くに臨んで復た首を回らす。

遠逐繡衣游。閒登黃鶴樓。

遠く繡衣を逐うて遊び、閒に登る黃鶴樓。

千峰漢陽晚。一雁洞庭秋。

千峰、漢陽の晩、一雁、洞庭の秋。

西上荆門渚。銀釵見巴女。

西、荆門の渚に上れば、銀釵、巴女を見る。

歌罷竹枝詞。江陵夜風雨。

歌は罷む竹枝の詞、江陵、夜風雨。

看盡幾多山。今朝始得還。

幾多の山を看盡して、今朝、はじめて還るを得たり。

秋風吹驛騎。又欲度閩關。

秋風、驛騎を吹き、又閩關を度らむと欲す。

閩關聞更好。瘴霧晨收早。

閩關、聞く更に好しと、瘴霧、晨に收まること早し。

椰子美如漿。蘭花多似草。

椰子、美、漿の如く、蘭花、多きこと草に似たり。

嗟余戀故鄉。不肯涉津梁。

嗟す、余が故郷を戀ひ、肯て津梁を涉らざるを。

把酒看君去。相思空斷腸。

酒を把つて君の去るを看、相思空しく斷腸。

【字解】(一) 萬里歸。湖廣より歸りしことを云ふ。(二) 楚帆。楚江、即ち揚子江を航行する舟。(三) 風風。江寧府志に「府

治の西南、杏花村中に在り、宋の元嘉の時、風風、この山に集まる、臺を山椒に築いて、以て瑞を表す」とある。【四】采石。李白が舟を浮べて遊んだ處、唐書の本傳に「かつて、舟に乗じ、崔宗之と采石より金陵に至る、宮錦袍を着けて舟中に坐し、旁に人なきが若し」とある。【五】區區。即ち區區山、一統志に「區區山は、南康府城の西北、周時、匡裕兄弟七人、處を結んで此に隱る、故に名づく。疊嶂九重、崇巖萬仞、周五百餘里、江右の巨鎮、道書の第八洞天」とある。【六】彭澤。一統志に「彭澤は九江府に屬す」とあり、高瑾の詩に「正開彭澤酒、來向高陽池」とある。【七】陶家柳。陶淵明は彭澤の人で、かつて、門前に五株の柳を植ゑて、五柳先生と號した。東坡の詩「武昌詩に空傳三孫郎石、無復陶公柳」とある。【八】小姑。一統志に「彭澤の小姑山は、大江の中流に在り、四面斗絕、惟だ南岸登るべし」とあり、歸田錄に「小孤山、世、孤を轉じて姑と爲す。江側に一石磯あり、これを澎浪磯と謂ひ、遂に轉じて彭郎と爲し、彭郎は小姑の婿なりといふ」とある。【九】繡衣。漢書百官公卿表に「侍御史に繡衣直指あり、出でて姦猾を討め、大獄を治む、武帝の制するところ、常に置かす」とある。【一〇】黃鶴樓。一統志に「黃鶴樓は武昌府黃鶴磯上」とある。【一一】漢陽。一統志に「漢陽の形勢、前は蜀江に枕み、北は漢水を帯び、高山大澤、四に環つて交も映す」とある。【一二】洞庭。一統志に「洞庭湖は岳州府治の西南に在り」と記し、長沙志に「洞庭の水、澗して七百里となる、日月、この中に出没す、瀟湘八景に平沙落雁あり」と見ゆ。【一三】荆門。一統志に「荆門山は、荊州宜都縣大江の南に在り、虎牙山と相對す」とある。【一四】巴女。巴地の女、白居易の詩に「巴女織綉衣、巴女舞鸞圖」とある。【一五】江陵。一統志に「荊州府、隋唐には江陵といふ」とある。【一六】閩關。閩地の入口、一統志に「福州府、秦には閩中といふ」とある。【一七】津梁。秦熱の氣の蒸す處。【一八】椰子。類篇に「椰子は、木の高さ數十丈、葉は其末に在り、膚裏に漿あり、甘きこと酒の如し、宋の李綱に椰子酒賦あり」と見ゆ。【一九】津梁。波し場と稱す。

【詩意】人は、只だ遠遊は苦しいといふのみで、どうして、遠遊の楽しいことを知らうか。君は、今、萬里を隔つる湖廣より歸つたが、顔色殊に悪しくなく、即ち遠遊の樂を極められたものである。君の言ふところに據ると、その初、帆を開いて揚子江を溯るに就いて、はじめて、鳳凰臺に別れた。やがて采石を月下に過ぐれば、廬山は、天際に顯はれて来る。試に彭澤の酒を買へば、陶淵明の家の柳の憔悴したのが、それかといふ様に見える。江上に在る小姑山の妍麗なるは、最も愛すべく、こゝを歩き過ぎむとするに際し、又首を回らして願望する程である。かくて、古しへ繡衣直指に比すべき重要な任務を帯びて官游し、しづかに、黃鶴樓に登ると、漢陽一帶、千峰暮れかかり、一雁秋高く飛んで、洞庭の空に向つて行く。それから、西、荆門山の下を過ぎて、峽江を溯ると、巴地の少女の銀釵を挿せるを見るべく、江陵に風雨さびしき夜、竹枝の歌を唱へ罷むに遇へば、自然、情思に堪へられない。すでに、幾多の山を看盡して、今朝、はじめて金陵に歸つて來ることが出來た。然るに、秋風颯として、驛馬を吹き、今度は、轉じて、南方なる閩地の關門を度つて行かれるとのことである。聞けば、閩關の風土形勝は、更に宜しく、音に聞く瘴霧も、朝早く收まつて、格別苦にはならず、椰子の汁の美味なることは、さながら仙漿の如く、蘭の花の多いことは、雜草に異ならず。これを以てしても、その一斑を知ることが出来る。予は、まことに意氣地なく、常に故郷を戀うて滅多に遠く出かけず、渡し場や橋にかかつて、長い道中をした事もないので、まことに嘆すべく、ここに別の杯

を把つて、君の立ち去りしを見、相思の極、むなしく斷腸して居ることである。

【餘論】起首より今朝始得還に至る二十二句は、袁憲史が曩に湖廣に居りしことを言ひ、その間赴任の途すがらなる風景を敘したところは、篇中の精彩である。秋風吹驛騎より蘭花多似草に至る六句は、今次、福建に調せられしことを敘し、嗟余戀故郷の四句は、即ち送別の正文である。

宴願使君東亭隔簾觀竹下舞妓

願使君の東亭に宴し、簾を隔てて竹下の舞妓を觀る

美人竹下舞。醉看隔簾櫺。美人、竹下に舞ふ、酔うては看る簾櫺を隔つるを。

彷彿瑤臺子。游戲綠雲中。彷彿たり瑤臺の子、游戲す綠雲の中、

玉鈞正蕩月。羅袖忽驚風。玉鈞、方に月を蕩し、羅袖、忽ち風に驚く。

莫逐青鸞去。尊前樂未終。青鸞を逐うて去る莫れ、尊前、樂、未だ終らず。

【字解】【一】簾櫺 櫺は説文に「櫺なり」とある。【二】瑤臺 仙宮。【三】玉鈞 簾を釣り上げる鈞。【四】逐青鸞 江淹の別賦に、駕鸞上漢、馳鸞騰天とある。

【題義】説明には及ばぬ。但し、願使君は如何なる人か分からぬ。

【詩意】今しも、美人は、竹下に於て舞を試みて居る。簾櫳を隔てて、酔うて見て居ると、さながら、瑤臺の仙女が綠雲の中に游戲するに彷彿たる有様。玉の簾鉤は、搖れて月を蕩かし、薄ものの袖は、風に驚いて飄つて居る。されば、青鸞を逐うて急に天上に去らずに居て呉れ。尊前、歡正に酣にして、なかなか興は盡きないからである。

【餘論】前四句は、竹下に妓を舞はすことで、題義の正面。玉鉤の二句は、側筆を以て、觀舞を更に細説し、結二句は、さう直に止めず、もつと舞うて呉れといつて依闕したので、その興の愈よ旺なることを暗に敍したのである。

夢遊仙

遊仙を夢む

夢騎蒼麒麟。手持白玉鞭。

夢に蒼麒麟に騎し、手に白玉の鞭を持す。

長風八萬里。夜入通明天。

長風八萬里、夜、通明の天に入る。

正逢絳闕開。謁帝陪羣仙。

正に絳闕の開くに逢ひ、帝に謁して羣仙に陪す。

飄飄紫霞珮。杳靄青霓旂。

飄飄たり紫霞の珮、杳靄たり青霓の旂。

命與衛叔卿。共讀金蕊篇。

命せられて衛叔卿と、共に金蕊篇を讀む。

玄文不可識。謫歸一千年。

玄文、識るべからず、謫せられて歸る一千年。

驚寤忽長歎。虛空但雲煙。

驚き寤めて忽ち長歎、虛空、但だ雲煙。

【字解】一、蒼麒麟。太平廣記に「麒麟客は、南陽張茂實の僮僕なり。その名を王叟といふ。一旦、茂實に向つて曰く、叟の家、ここを去ること甚だ近し、能く相運うて一たび遊ばむや」と。茂實、これに従ひ、相與に南行一里餘。黃頭あり、青麒麟一、赤文虎二を執つて道左に候す。叟、麒麟に乗じ、茂實、黃頭と各一虎に乗じ、仙掌峰に上り、巖を越え、山を凌いで、峻險を覺えず」とある。二、白玉鞭。杜甫の詩に麒麟受「玉鞭」とある。三、通明天。東坡の詩に侍臣謁立通明殿、一朵紅雲捧「玉皇」とある。四、絳闕。絳は赤色、闕は大きな門。五、紫霞珮。紫色の腰飾、霞は形容の詞。六、青霓旂。旂は旗、孟郊の詩に翠煙含「青霓」とある。七、衛叔卿。神仙傳に「衛叔卿は、中山の人なり、雲母を服して仙を得たり。漢の元封二年八月壬辰、武帝、開居す。殿上、忽ち一人あり、雲車に乗じ、天よりして下り來つて、殿前に集まる。年三十ばかり、色、童子の如し、羽衣星冠。帝、乃ち驚き問うて曰く、誰とが爲す。對へて曰く、吾は中山の衛叔卿なり。帝曰く、子、もし是れ中山の人ならば、乃ち朕の臣なり、前んで共に語るべし、と。叔卿、帝必ず優禮を加へむと意ひしに、しかも、朕の臣といふ、ここに于て、望を失ひ、忽焉として在ると、これを知らず」とある。八、金蕊篇。仙書の義であるが、金枝の注にも、その出處等は注してない。九、玄文。玄妙なる文字。一〇、不可識。識は識別。一一、驚寤。驚き醒める。

【題義】仙人に成つて天に朝したことを夢みたるに就いて、その事を賦詠したのである。

【詩意】夢の中に、青色の麒麟に乗じ、白玉鞭を手にし、長風に御して、八萬里の遠きを互り、夜、天上の通明殿に入朝した。すると、赤色の大門が丁度開いて居て、天帝に拜謁し、且つ羣仙に陪席した。仙人どもの紫珮は、飄飄として空中に擧がり、青旂は、杳靄として、殿前に閃いて居る。そこで、

天帝より命せられて、衛叔卿と共に、金蕊篇を讀みにかかったが、何分玄妙な文字は、六つかしくて識別することが出来ず、はては、天帝に罰せられ、又ぞろ、謫せられて人間に歸り、その間、倏忽として千年を経過して仕舞つた。忽ちにして、愕然驚いて醒めると、長嘆を禁せず、仰ぎ見れば、茫茫たる虚空、ただ、雲煙の棚引くのみであつた。

【餘論】起八句は、昇仙せしこと、命與衛叔卿の四句は、再び人間に墮謫せしこと、結二句は、夢醒めし後の光景を敍したので、精彩は前段昇仙の處に在ることは、言ふまでもない。

獨游白蓮寺池上看雨

獨り白蓮寺に遊び、池上に雨を看る

輕衣忽變冷。池雨來清夏。輕衣、忽ち冷に變じ、池雨、來つて夏を清うす。

圓文細細生。密響脩脩下。圓文細細として生じ、密響脩脩として下る。

荷披魚躍起。樹靜禽鳴罷。荷は披いて、魚躍り起ち、樹は靜にして、禽、鳴き罷む。

賞澹自忘還。非因與僧話。澹を賞して、自ら還るを忘る、僧と話するに因るに非ず。

【字解】【一】輕衣、ひとへ物。【二】圓文、圓い波紋。【三】密響、雨の瀟瀟として降る響。【四】荷披、蓮の花が開く。【五】賞澹、幽澹なる景色を賞する。

【題義】説明に及ばぬ。白蓮寺は、前に數ば見えて居た。

【詩意】ひとへ物は、忽ちにして冷氣を覺え、池上の雨は、降り注いで、夏の暑さを清くした。池の面には、圓い波紋が細細として生じ、雨のしめやかに降る響は、脩脩として下つた。蓮の花が開いて、魚は其間に躍つて居るし、木は靜にして、鳥も鳴き止んで仕舞つた。この幽澹なる景色を賞すれば、自然と家に還ることを忘れるので、必ずしも、僧と話をして、深省を發した爲ではない。

【餘論】前四句は、雨の降る景色、次の二句は、池上看るところ、結二句は感想、この種の章法は、前にも數ば見えて居た。

贈薛相士

薛相士に贈る

我少喜功名。輕事勇且狂。我れ、少にして功名を喜び、事を輕んじて、勇、且つ狂。

顧影每自奇。磊落七尺長。影を顧みて、毎に自ら奇とす、磊落、七尺長し。

要將二三策。爲君致時康。二三策を將て、君の爲に時康を致すを要す。

公卿可俯拾。豈數尙書郎。公卿、俯して拾ふべく、豈に數へむや尙書郎。

回頭幾何年。突兀漸老蒼。頭を回らす幾何の年、突兀、漸く老蒼。

始圖竟無成。艱險嗟備嘗。始圖、竟に成るなく、艱險、嗟す備さに嘗むるを。
 歸來省昨非。我耕婦自桑。歸り來つて、昨非を省み、我、耕して、婦、自ら桑す。
 擊木野田間。高歌誦虞唐。木を野田の間に撃ち、高歌して虞唐を誦す。
 薛生遠擊舟。訪我南渚旁。薛生、遠く舟を撃し、我を訪ふ南渚の旁。
 自言解相人。視予難久藏。自ら言ふ、人を相するを解すと、予を視て久しく藏し難し。
 腦後骨已隆。眉間氣初黃。腦後、骨、すでに隆、眉間、氣、はじめて黃と。
 我起前謝生。弛弓懶復張。我、起つて、前んで生に謝す、弛弓、復た張るに懶し。
 請看近時人。躍馬富貴場。請ふ看よ、近時の人、馬を躍らす富貴の場。
 非才冒權寵。須臾竟披猖。非才、權寵を冒すも、須臾にして、竟に披猖。
 鼎食復鼎烹。主父世共傷。鼎に食んで復た鼎に烹らる、主父、世共に傷む。
 安居保常分。爲計豈不良。安居して常分を保つ、計を爲す、豈に良からざらむや。
 願生母多言。妄念吾已忘。願はくは、生、多言する母れ、妄念、吾、すでに忘る。
 【字解】(一) 輕事。どんな事でも爲し易いと思ふ。(二) 時康。時の太平。(三) 可俯拾。漢書夏侯勝傳に「勝、講授する毎に、

常に諸生に謂つて曰く、士、經術に明かなれば、その青紫を取ること、俛して地芥を拾ふが如きのみ」とある。【四】尙書郎。社甫の時に欽、陳、濟世策、已老尙書郎とある。尙書は内閣員、郎は其下の役員、今で謂へば各省の事務官の如きものである。【五】突兀。頭の嶄然として居る貌。【六】老蒼。蒼は灰色、年老いて白髪がはえる、社甫の時に脱、略小時輩、結交皆老蒼とある。【七】始圖。はじめの計畫。【八】備嘗。十分に嘗める、經驗する。【九】自桑。自分で置を何ふ。【一〇】擊木。薪を伐ること、唐書陸羽傳に、「上元の初、羽、苕溪に隱れ、自ら桑苧翁と稱し、門を闔ちて書を著し、或は獨り野田を行き、詩を誦し、木を撃ち、斐回して得意ならず、或は慟哭して歸る、時に、今の接輿と謂ふなり」とある。【一一】虞唐。舜は有虞氏、堯は陶唐氏、これを合稱して云ふ。【一二】擊舟。舟を漕ぎ寄せる。【一三】難久藏。とても何時までも隱して居ることが出来ぬ。【一四】眉間氣初黃。眉後骨已隆。唐書袁天綱傳に「天綱、馬周を見て曰く、馬君、伏犀、腦背を貫き、負ふあるが若し、貴の驗なり。近古、君臣相遇ふ、未だ公に及ぶものあらず。然れども、面澤赤にして耳に根なく、後骨、隆ならず、壽、長からざるなり」とある。【一五】眉間氣初黃。韓愈の時に眉間黃色見、歸期とあり、相書に「喜色は紅黃」とあつて、兩眉の間に黄色の氣が見えて、まことに目出たいといふ意。【一六】弛弓。ゆるんだ弓。儀禮に「衆賓勝てば皆祖し、遂に張弓を執る、勝たざるものは弛弓を執り、升飲初めの如し」とある。【一七】披猖。裂け敗れる、失敗。北齊書王暕傳に「帝、暕を以て侍中と爲さむと欲す、苦辭して受けず。或は、暕に勸めて、自ら就んずる勿れといふ。暕曰く、人主の恩施、何に由つて保つべけむや。萬一披猖、退くを求むるも地なし、熱官と作るを受せざるに非ず、但だ之を思つて爛然するのみ」とある。【一八】鼎食復鼎烹。前に卷四、東園種、蔬の詩中にも引いて置いたが、漢書主父偃傳に「大丈夫、生きて五鼎に食むを得ず、死すれば、五鼎に烹られむのみ。吾、日暮れて路遠し、故に倒行して之を逆施す」とある。【一九】常分。本来の分限。【二〇】妄念。功名富貴の志を云ふ。

【題義】題下の原注に「至正辛丑、嘉禾の薛月鑑、予を過ぎて詩を求む、因つて贈る」とある。至正辛丑は二十一年で、時に作者二十六歳、吳越の游を畢つて、青邱に歸つて居た間の事である。

【詩意】われ年少の頃は、人なみに功名を喜び、すべての事を輕んじて、爲し易しと爲し、進むに勇にして、物狂はしきばかり、おのが影を顧みて、自ら奇として居たが、現に吾が身は、磊落として、丈は七尺位もあつた。そこで、二三の奇策を行つて、天晴、わが君の爲に太平の世に致したく、さうすれば、公卿の位などは、俯して拾ふよりも易く、尙書郎などは、物の數でもないと思つて居た。しかし、頭を回らせば、幾年たつたか知らぬが、嶄然突兀たりし頭も、年老いては、白髪になり、はじめの計畫も、とうとう成功せず、反對に、艱難は十分に経験した。そこで、わが家に歸り來つて、やつと昨日の非なりしことを悟り、自分で田を耕し、妻は蠶を飼ふといふ始末。その野田の間に在つて、薪を伐つて居る間には、虞唐の事を詠じた詩などを高歌して、想を三代の昔に馳せて居た。ここに、薛先生は、態態遠くより舟を漕ぎ寄せて、予を南渚の旁なる茅屋に訪はれ、おのれは、人相を見ることを知つて居るといひ、予の形相を篤と注意して視られるので、久しく匿して置くことも出来なかつた。先生の言はれるには、君は腦の後の骨が高く隆起して居るから、やがて、貴顯の位に上るべく、兩眉の間には、黄色の喜氣が動き初めたから、遠からず目出たい事が有らうとのことであつた。そこで、予は身を起し、進んで先生に謝し、折角の事ではあるが、一度弛んだ弓は、再び張り直すのも面倒であるから、先づ御免を蒙りたい。現に近時の人を見玉へ、馬を躍らして高貴の場に驅け入り、非才でありながら、僥越にも、權寵を得るのも、ほんの束の間で、はては、失敗を免れない。生きては

五鼎に食し、死しては五鼎に烹らるべしとは云つたものの、主父偃の生涯は、世人の共に痛んで氣の毒に思ふところである。それよりも、安居して、おのが本來の分限を守つて居る方が、計として、良くはあるまいか。願はくは、先生、もう何も仰せられな、功名富貴の妄念は、とツクの昔に忘れ果てて、この頃、さういふ了見は全く御座らぬ。

【餘論】起首より豈數尙書郎に至る八句は、少年の英志を寫し、回頭幾何年より高歌誦虞唐に至る八句は、今現に青邱に居て、田園生活に安んずることを言ひ、薛生遠擊舟の六句は、人相を見て呉れたことを述べ、我起前謝生より結末に至る十二句は、最早功名に意なきことを敍したのである。薛生が云つたところの人相は、過半お世辭であつたか如何か。青邱の初めて召し出されて、元史の編修に與かつたのは三十四歳で、これより七年以後の事、それも、わづか一年で罷めて歸り、又三四年にして腰斬に處せられた位であるから、あまり中つても居ない。青邱も、もとより、相士の言をあてにせず、仍つて、體よく前んで之に謝したのであらう。

終